

289
Ma 59

289-Ma 59-5 a7

1200500732097



始



25 6 8

CM 4

2816

マルクス

その生涯と思想

289
MA59
5a



石濱知行著

二見書房刊



マルクス

エンゲルス

レ
72

992
2174

序の言葉

第一次第二次世界大戦はなぜ起つたか、大戦後の民主戦線とは何であり現在それは世界政治の上でどんな役割を演じつつあるか、新しい民主々義はいままでの民主々義と如何なる點において異つてゐるか、経済民主化とは何か、これらを正しく把握するためにはマルキシズムを知らなければならぬ。第一次世界大戦以來の資本主義の混亂を正しく解明しうるのはマルキシズムだけである。そこでまたこの資本主義の矛盾に解決の鍵をあたへるものもマルキシズムである。

マルキシズムはマルクス、エンゲルスによつて建設され、レーニン、スターリンによつて大成された資本家社会の解剖と次の新らしい社会への變革の理論である。

マルクス、エンゲルスの思想をはぐくんだ時代的背景、社会的環境はどんなものであつたか、資本論をはじめ、経済學批判、剩餘學說史、共産黨宣言、イギリスの労働者状態、空想より科學的社會主義などのマルキシズム文獻はどんな内容をもち、如何にして書かれたか、これはマルキシズムそのものの理解のためにも、日本の敗戦後のこの激動期においてももう一度ふりかへつて見直すべきときだと思ふ。

僕は先日二十日ばかり山陽、山陰、關西を旅行した。福島、京都等の學都では若いインテリゲンチヤ諸君からマルキシズム、マルクスの傳記などについていろいろの質問と要望とをうけた。そして新しい時代を作る若き世代がいま根本

的に何を求めつつあるかを知ることが出來た。歸京したら二見書房から編輯員が見えて舊著マルクス傳を時代の要求に應じて再刊しないかといふ交渉をうけた。五月二十五日の戦災のために自分の舊著すらないのでかりうけて閱讀し、若干の訂正を施してここにふたたび世間に出すことにした。このマルクス傳は、改造社の偉人傳の一冊として昭和六年に出版したものであるが、こんどの再刊にあつては同社の諒解をあらかじめ得た。厚く感謝したい。

一九四六年六月

著者

目次

序の言葉.....一
舊版の序.....三

前篇

第一章 時代の背景——マルクスの誕生.....二

封建制度崩壊期——産業革命——フランス革命——プロレタリアの発生——プロレタリア運動の発生——その発展——イギリスの社会運動——フランスの社会運動——ドイツの社会運動——千八百三十年、四十八年時代のドイツ——マルクスの生れたライオン州の情勢——マルクスの生れた時代

第二章 學窓に於けるマルクス.....六

誕生——トリエル——マルクスの両親——改宗——ギムナジウム入學——卒業論文——成績——ボン大學入學——ベルリン大學へ——イエニイ・フォン・ウエストフアレンとの許婚——父への手紙——ドクトル・クラブ——博士論文

第三章 ライン新聞時代

大學教授希望の放棄——バウエルの大學追放——ドイツ年誌——ライン新聞への寄稿並びに編輯——ライン新聞辭職——マルクスにとつてのライン新聞の意義——アネクドター——獨佛年誌發刊の計畫——マルクスの結婚——パリへ

六

第四章 パリからブルツセルへ

パリ時代の重大性——獨佛年誌——ユダヤ人問題について——ヘーゲル法律哲學批判序論——フリードリッヒ・エンゲルス——獨佛年誌の破綻——パリゼルフォールヴェルツ——ブルツセルへの追放——ハイネとの交遊——パリ時代の勉強——神聖家族

八〇

第五章 ブルツセル時代

ブルツセル時代——彼の經濟的困窮——イギリスへの研究旅行——ドイツチエ・イデオロギー——ウオルフ——ウエルト——ワイデマイエル——フライリヒワート——ヘツス——ゲゼルシャフト・シュビーゲル——ワイトリング——アルドドン——ドイツチエス・ブユルゲルブツフ——ライン年誌——ドイツチエ・ブリニツセル・ツァイトウング——通信委員會——亡命者同盟——義人同盟——共産主義同盟——民主主義協會——友愛的民主主義協會——共産主義原則——共産黨宣言——二月革命

一〇三

第六章 千八百四十八年二月革命前後

千八百四十八年二月革命——ヨーロッパ諸國への波及、各地の革命的叛亂——ブルツセル追放——フロコン——パリへ——中央委員會——ヘルグエグ等の陰謀——ドイツに於ける共産黨の要求——共産主義同盟の分散——ケルンへ行く——新ライン新聞——賃労働と資本——實際運動——叛逆罪——憲法戦役——新ライン新聞の發行禁止——パリへ——パリからロンドンへ

一三三

第七章 千八百五十年代の初期

マルクス一家のロンドン渡航——新ライン新聞、政治經濟評論——共産主義者同盟の再組織と分裂——リープクネヒト——マルクス、エンゲルス運動より退ぞく——マルクスの窮乏——ケルン共産黨事件——ワイデマイエル——ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日——ニューヨーク・トリビューン——苦難の時期

一五六

第八章 反動期に於ける文筆的活動

反動時代の同志の動靜——クリミア戦役——文筆的活動の苦痛——千八百五十七年の恐慌——フランス・オーストリア戦役——フォークト事件——ニュー・アメリカン・エンサイクロペディア——經濟學批判——千八百五十五年乃至六十年のマルクス家の生活ラツサールとマルクスとの關係

一七九

第九章 第一インタナショナル……………100

南北戦争—棉花不作のヨーロッパへの影響—ポーランド獨立騒動—第一インタナショナル(國際労働者協會)の創立—マルクス運動に再び乗り出す—各大会—資本論第一卷—バクレーンとマルクス—パリ・コミューン—インタナショナルの解散

第十章 晩年のマルクス……………115

後篇

第一章 マルクスの遺族……………116

第二章 マルクスの學問的及び實際的活動の背景としての私的生活……………119



第一章 時代の背景——マルクスの誕生

第十九世紀の前半は、封建の社會がやうやく崩壊して、それに代つて資本主義が急速に建設の歩をすゝめつつあつた時代である。古い社會關係がくづれて、新しい社會關係の萌芽が伸び行きつつあつた時代である。時代の舞臺が大きく廻轉した時期である。

農業を主たる生産とした中世の末期には、農民の收奪その極に達し、死線に追ひ込まれた農民は、矛を逆しにして支配階級に向ひ、各國に農民戦争を勃發せしめた。一方、中世都市の内部に自由と獨立とを標榜して中世の生産と文化とに多大の寄與をなしたギルド制度は、その獨占性と封鎖性とが反つて發達し行く生産力の上向の桎梏となつて解消しはじめ、それはギルド内部に於ける親方と職人・徒弟との階級的對立・闘争によつてさらに促進せられた。手工業の代りに家内工業が勃興し、原始蓄積の進行とともに商人の手に統制せられ、さらにすゝんでマヌファクチュアにまで進展した。生産が、ギルドの制限より解放せられるとともに、技術も發達し、生産力のより以上の昂上を刺激した。

かくして、第十六、第十七世紀にいたるにつれて、封建制度は壊滅しつつあつたのであるが、それに對して最後のとどめをさしたのは、第十八世紀の六、七十年ごろからおこつた産業革命と九十年代に勃發しその後二三回の餘波を見せたフランス革命とであつた。この二つの過程をへて經濟的にも、社會的にも、資本主義制度が確立したのである。

第十九世紀前半の社會情勢をよく把握する爲には、先づ遡つて産業革命とフランス革命との二大劃期的の社會事象と、それが歴史の進行に與へた大なる影響とを見なければならぬ。

トロッキーは、その著書「イギリスは何處へ行く」に於いて、次のごとく書いてゐる。「歴史的過程の根本理論を注意するものには、一樣に明瞭であるべきことは、イギリスを全然再生せしめた第十八世紀の産業革命も、第十七世紀の政治革命がなかつたら、實現は不可能だつたに違ひないといふことだ。貴族の特權と廷臣の怠慢とに反抗してブルジョアの力とブルジョアの腕とによつてなされた革命なくしては、技術上の諸發明の大精神は喚起されなかつたであらう。また、これを産業上の目的に應用するものも出なかつたであらう。第十七世紀の政治的革命は、それ以前のあらゆる發達から成長しきたつたもので第十八世紀の産業革命の下地をつくつたのであつた。」産業革命を理解するがためには、その發祥地であるイギリスの社會状態を知らなければならぬ。イギリスの産業革命を知るがためには、トロッキーのいふがごとく、それに先驅した第十七世紀

の二つの政治的革命を知らなければならない。その一は、王權神授説をとなへて人民の權利を無視したチャールス一世に對して中等社會の市民より成るラウンド・ヘツツ黨が反對をこころみ、つひに王を刑臺上に葬つて共和政を宣言した千六百四十二年——千六百四十九年の革命であり、他の一つは、ジェームス二世の人權無視に對抗してオランダから自由主義を奉ずるウィリアム公を迎へて、言論の自由、議會の協賛なくしては租税の徴收をなし得ず、等の各項をかゝげた、權利の宣言、および、權利條例を承諾せしめた千六百八十八年の所謂名譽革命である。これらの二つの革命が、ともに、勃興し來りつつあつたブルジョアジの前身によつて中世封建制度の牙城に向つてなされた反抗であり、王權およびそれをかこむ貴族たちに對する人民權利の主張、新興ブルジョアジの主張の貫徹であることは明瞭である。かゝる性質を有する二つの革命が、社會變革過程に於いて、中世制度の崩壊とブルジョアジの解放とに對して、重大なる意味を有し、それより以後の資本主義制度確立に道を拓いたものであり、従つて、トロツキーのいふが如く、技術上の諸發明への刺激となり、「第十八世紀の産業革命の下地を作つたもの」としての重要性をもつたものであつた事は、疑ひのないところであらう。

産業革命は、第十八世紀の後半、六七十年ごろから、約百年のながきにわたつて、ヨーロッパに行はれた機械、動力等の生産手段の發明による技術的變革である。この産業革命は、先づイギ

リスにおこり、つづいてフランス、ドイツその他のヨーロッパ諸國、さらに世界各國にまこつたものである。イギリス以外の他の諸國の産業革命は、大抵イギリスの産業革命の影響を、直接にか、あるひは間接にか、うけてゐる。その意味で、イギリスは産業革命の祖國と言ひ得るであらう。イギリスに一番はじめ産業革命がおこつたのは、そこではすでに前にのべたやうに二大革命を經過してブルジョアジの勢力が伸びつつあり従つて産業革命への下地が出来上つてゐたこと、植民事業の發展、海外商業によつて巨富がイギリスに蓄積され、イングランド・バンクその他の金融機關がすでに設立せられて資金にくるしむ發明家や技術家に資金を融通する道がひらけてゐたこと、その地理的性質、交通の發達、鐵・石炭の埋藏量の豊富なこと、等々が、主要なる原因である。産業革命は先づ、纖維工業部門に行はれ、つづいて他の諸工業部門にも及び、それらの生産部門に於ける産業革命は、交通、商業等の流通部門にも及んで、その結果、千八百三十年頃までには、すべての經濟部門に技術的の變革が行はれた。それらの部門に於いて、從來の手工業で使用された道具や器具のかはりに機械が發明・使用され、人力・馬力・風力・水力等のかはりに蒸汽力といふ強力な動力が使用せられて、それが機械と結合せられて、生産設備に技術的革命をあたへた。人車、馬車、風車等のかはりに汽車が軌道の上を矢のごとく迅速に馳り、燒船、帆前船のかはりに汽船が海の上を風のごとく走るにいたつた。これら經濟上の技術的革命は、その

結果として、經營方法、階級制度、政治方面、イデオロギー方面にも、多大の變革をあたへて、資本主義制度を確立せしめた。イギリスに於けるこの産業革命は、フランス、ドイツ、アメリカ合衆國にも、多大の刺激をあたへ、ことに千八百十五年の大陸封鎖失敗後は、イギリスの技術、機械、經營方法等は、ヨーロッパ諸國に輸入せられて、それらは各自の國家内部に徐々に行はれつつあつた産業革命に、決定的の力をあたへて、それぞれの國家の産業革命を完成せしめた。千八百六十七年ごろからは、鑄鐵爐の發明等が行はれて鐵工業の生産部門にも技術的革命がおこなはれ、史家の所謂第二の産業革命がなされて、ここに百年にわたつた産業革命が完成されたのである。

フランス革命は、千七百八十九年にその口火を切つた。これより先き、絶對王政の專制主義、貴族・僧侶の横暴専恣に對する、民主主義の氣運大に熟し、モンテスキュー（一六八九—一七五五）、ヴォルテール（一六九四—一七七八）、ルソー（一七一二—一七七八）出でて、君主權打破、民權論をとらへ、情實、因習に對してラシヨナリズムを主張し、フランス革命への氣運を促進した。フランス革命は、千七百八十九年七月十四日のバステイーユ牢獄の破壊に端をはつし、ラファイエット、ミラボー等の立憲主義者の活躍となり、つづいて、ダントン、ロベスピエール、マラー等のジャコベン黨（彼等の集合したる寺院の名より生ず）の飛躍となり、ルイ十六

世、マリー・アントワネットのギロチン上の處刑となり、ラーニユド・テロール（恐怖の支配）を現出し、千七百九十二年には王政の廢止、貴族稱號の沒收、共和政治の成立となつた。しかし、それとともにフランスの權力はプチ・ブルジョアと勞働者の聯合軍の手に落ちた。すなはち第三身分と第四身分とが、王、貴族、僧侶等の舊封建支配階級に代つて權力を左右する地位となつたのである。この革命に於いて、また、無産インテリゲンチアが、重要な役目を演じたことを忘れてはならない。ジャコベン黨員として、この革命をリードしたインテリゲンチアは、要するに、ブルジョアジの發展をさまたげてゐた社會的・政治的情勢を顛覆して、その自由なる上向に便宜なるやうに「道を平らかに」するの役目をつとめたのである。彼等の運動の標語としてリベルテ・エガリテ・フラタニテ（自由・平等・友愛）は、ブルジョアジの自由なる躍進への必要なる條件を言ひ現はしたものである。

これがフランス革命の絶頂であつた。フランス革命は、ヨーロッパ諸國に大なる影響をおよぼし、各國の王室・貴族・僧侶等の封建階級に大なる恐怖をあたへ、やがてそれらの没落とブルジョアジの躍進への舞臺をひらく重要な刺激となつたのである。

ジャコベン黨内の内部的對立は、擴大して革命的勢力の分散となり、その虚に乗じて、コルシカの野人ボナパルトの跳梁となり、コンシユル（統領）となり、遂には共和政を廢して、自ら皇

帝の位につき、武力的獨裁を行つた。血をもつてあがなひ得た革命の結果は、ナポレオンの帝政とともに再び昔にかへつたことではあるが、しかしナポレオンは昔の帝王とは自ら異つてゐた。彼は、自ら、「予は革命なり」と呼號し、王位とは、ピロードで蔽はれた單なる木片に過ぎぬ、と豪語したとき、昔時の絶對王政のそれとはまさに時代のへだたりがあるといはなければならぬ。

ワートローの一戦に一敗地にまみれた彼は、遂にセント・ヘレナの流竄となり、ナポレオンの獨裁はつひに潰え、千八百十五年にいたつて、ヨーロッパ列強の懲應にしたがつて、ルイ十八世が王位に上つた。そして、千八百十四年に制定された憲法に従つて、イギリス流の立憲主義を奉ずることを約したが、後年にいたつては當初の約を蹂躪して、保守主義に傾き、議會を解散し、自由主義者を國外に放逐し、貴族、僧侶を信任し、人民の各種の自由、權利を破棄し、その弟シャルル十世は王位につくと共に、保守主義に轉向して、オーストリアの極端なる反動主義者メツテルニヒの助けをかりて自由主義討伐の政策をとり、フランス革命以前の舊制度の復活に努力して、民権を威壓し、あくなき暴政を行つたので、つひに、千八百三十年に王權に對する革命が勃發し、シャルル十世の退位となり、オルレアン王朝のルイ・フィリップの立憲君主政體が成立した。これ、七月革命と稱せらるる革命で、この革命は王位の顛覆は行はれなかつたが、新王

ルイは、自由主義を奉じ、民権を重んずべきを約したブルジョアジーの代表的保護者となり、ブルジョアジーの發展のための經濟政策をとるに至つた。

この七月革命の結果は、ヨーロッパ諸國の封建制度打破、自由主義躍進に大なる拍車をあたへ各國に革命の波をおこさしめた。千八百三十二年に於けるイギリスの選挙法改正、チャーチズム運動の勃興、千八百三十一年のベルギーの獨立、ポーランドの獨立騒動、イタリアに於ける反法王、反僧權運動、イタリア統一主義者の策動、スキスの民主政治の獲得、ドイツ各地方に於ける自由主義運動等々は、みな七月革命の影響である。千八百四十八年にいたり、フランスには更に二月革命が起つて、君主制は廢せられて共和政治が樹立せられ、これより以後、フランスは今日にいたるまで共和の體制を維持してきたつた。この二月革命もまたヨーロッパ各國に革命を起こさしめて、自由へ！ 自由へ！ と大勢は向ひつつあつた。

産業革命は、生産手段、生産組織、労働組織、經營制度の經濟的方面に於ける變革であり、フランス革命は、舊封建支配階級たる王、貴族、僧侶、それらと結托する封建的大地主に對するブルジョアジー、プチ・ブルジョアジー、プロレタリアートの聯合的反抗であつて、その結果としてもたらし來つた主權の轉覆、貴族、僧侶の階級および階級の特權の廢止、大土地所有の分解、憲法主義、人民の政治的諸權利、諸自由、自由・平等・博愛の精神等は主として政治的・社會的

方面に於ける變革であつた。

第十八世紀末から十九世紀の初頭にかけて、殆んど時を同じくして勃發したこの二つの史的
大事件すなはち産業革命とフランス革命とは要するに、封建の胎内に胚々として生長しつつあつ
た反封建要素の擡頭、確立を樹立せしめたのだ。換言すると、この必然的な二つの歴史的事件を
劃線として、舊封建の中世社會制度が崩壊し、止揚されて、その胎内に發生しつつあつた反對素
たるブルジョアジーの制度近代資本主義が成立したのである。

工場制度の完成、商品の生産、それから自然的に生ずる剩餘價値の獲得を原因とするブルジョ
アジーとプロレタリアートといふ基本的對立階級の對峙、政治、法制方面に於ける自由主義、民
權主義、立憲主義の成立、思想方面に於ける自由主義、反宗教主義、唯物論、階級闘争論（フラ
ンス革命後に於ける歴史家アーギュスタン・チエリー、ミニエー、ギゾー、等の鮮新なる階級闘
争的歴史觀の發生を見よ）合理主義、空想的社會主義思想（モレリー、マーブリー、サン・シ
モン、フリーエ、ロバート・オーエン等）等々は、この歴史的二大事件後の新社會の劈頭にあら
はれた社會現象であつた。

資本主義は、勞働力もまた商品となれる、發展の最高段階に於ける商品生産が、一般的、支配
的となれる社會制度である。資本主義制度のもつとも根本的なものは、商品生産の一般化、支
配化とともに、その必然的結果として生じきたる剩餘價値の發生と、その剩餘價値を獲得する資
本家階級と勞働力のほか何ものをも有せずして資本家のために勞働を強制される勞働者階級との
二大對立階級の發生である。勞働者階級は、資本主義の成立と前後して量的にも質的にも増大し
プロレタリアートとして、新しく誕生した資本主義の反對素として漸次擴大・強化しきたり、き
たつたのである。資本主義社會のもとでは、勞働力を強度に收奪することによりてのみ、利潤を
大ならしめることが出来る。従つて利害關係は、ブルジョアジーとプロレタリアートに於いて、
まさに背反的である。ここに、資本主義社會の成立およびその後の發展につれて、プロレタリア
ートとブルジョアジー、それを通じて資本主義社會制度そのものに對する反抗的運動がおこる。
ここで、資本主義成立前後を通じて、プロレタリアートが如何に發生し、第十九世紀前半に於
いて、プロレタリアートの反抗が、資本主義の發達につれて、いかに發展しきつたかについて
のべよう。それは、本傳記の社會的背景のうちで、もつとも根本的で、重要なものであるから。
フリードリッヒ・エンゲルスは、その著書「空想的社會主義と科學的社會主義」のなかで近代
プロレタリアの先驅について、つぎのごとく言つてゐる。

「資本家は賃銀勞働者なしには、存立することが出来ない。だから、中世のツンプトの商工市
民が近世のブルジョアに發達したのと同じ比例をもつて、その組合の職人、弟子と組合外の日

傭稼が、プロレタリアに發達した。それで大體上、ブルジョアジーは、貴族との戦に於いて、それと同時に、その時代の諸種の労働階級の利益をも代表すると稱する事が出来たのであるが、それでも猶ほ總てのブルジョアの運動には、いつでも必ず、近世プロレタリアの先驅として、大なり小なりの發達を遂げた所の、その階級獨立的爆發が伴つてゐた。例へば、ドイツの宗教改革および農民戦争時代に於ける再洗禮派およびトマス・ミュンツエル、イギリスの大革命に於ける平均黨、フランスの大革命に於けるパブリーフの如き。

若干の解説をなさう。中世のツンフト（ギルド）には、親方・職人・徒弟があり、一定の年月と習練の後では、職人・徒弟は親方となつて經濟的獨立をすることが出来た。ところが、第十八世紀末から職人・徒弟の數が増加し、従つて一生涯親方となり得ず、下積となる職人・徒弟の數が激増した。また、職人・徒弟の賃銀も低下したので、彼等の生活は悲惨をきはめた。彼等は時折、親方に向つて闘争を行つたが、その闘争は徹底的に戦はれなかつた。それは、ギルドの協調的性質による。これら悲惨なる職人・徒弟は、ギルド以外の自由なる職場にその労働力を賣らんとしてその機會を待つてゐた。工場制度の成立とともに、これらがプロレタリアトとなるにいたつたことは容易に諒解し得られるであらう。フランス革命當時、これらの職人徒弟は、大舉してパリに殺到して、ブルジョアジーとともに封建支配階級に對抗するにいたつた。イギリス最

初の労働團體たる通信協會に加盟したものは多數のギルド員があつた。

また封建制度の解消は、封建身分の崩壊をきたし、從來支配階級に従屬し、寄生してゐたもの例へば武士、インテリゲンチア等は、失業して、職を求めざるを得なくなつた。フランス革命に於いて、これらの舊封建身分のものが多數参加し、革命の進行を補助した。革命後、これらのものもまた、多數プロレタリアの陣列に加つて行つた。

封建末期の領主の苛斂誅求に苦しんだ農民、商業資本の擴大によつて土地を追ひ出された農民宗教および宗教的特權の剝奪にもなふ寺領の收奪または減少の結果としての寺領内の農民等は、農地を追ひ出されて、都會に自由と職とを求めて殺到してきたが、これらもまた、工場制度の完成にともなふ労働力需要のこゑに應じて、鋏や鋤とる手に機械のハンドルを取らざるを得なくなつた。

一方、機械と動力とを使用して、大工場内で大量商品生産を行ふ近代資本主義は、その性能を充分發揮するがためには、多くの労働力を必要とした。また、かかる工場生産は、從來の手工業や工場手工業の作業および組織とことなつて、特別の體力や技術を必要としないがために、非熟練の素人でも労働者となることが出来た。このことは、プロレタリアートの數を増大せしめるとともに、なほそれでも充分とせずして、婦人や小兒をも労働過程に動員せしめるにいたつた。

かくして動員せられたプロレタリアートは、資本主義の初期では、いかなる状態であつたか。資本主義の初期には、工場法のごとき社会立法は勿論なかつた。したがつて、資本家は汚ない工場設備のなかに多くの労働者をおしこみ、非常にやすい労賃のもとに、時には二十時間にわたる長時間の労働を労働者に強制した。その結果、生活の困窮はもとより、病氣、衰弱のために、二三年にして一人の労働者が一生涯廢人となるがごとき惨状であつた。肉體的にのみならず、精神的にも、道徳的にも、労働者の墮落は恐るべきものであつた。かゝる惨状が、いかに強度のものであつたかは、千八百四十八年のころに於てすらなほエンゲルスが、その著「イギリスの労働状態」のなかで描寫したとほりである。サン・シモン、フリーエ、ロバート・オーエン等の空想的社会主義は、かゝる労働者の惨状を見るにしのびずして一舉にして資本主義組織を廢棄せしめんとしたところより生じたものである。

資本主義組織は、また、景氣循環の一環として恐慌なる段階をもつ。恐慌は經濟進行の一時的暴力的遮断である。それは、結果として、つねに失業をとまなふ、恐慌のきたるごとに、巨大なる失業群が生産せられる。就業してゐてすら生活に追はれ、病氣にくるしむ労働者は、業を失つて、さらに困窮の深淵につき込まれるにいたつたのである。

かゝる姿が、資本主義の初頭に於ける労働プロレタリアの悲惨きはまりなき現實であつたので

ある。その後にはいつて、労働時間を制限する法律、工場寄宿舎設備の改善、衛生設備に關する法律、等々の多くの社会立法が出來たけれども、それだけをもつてしては到底、労働者の惨状をすくふことが出來なかつたのである。そこに労働者は労働者自らの力と團結とによるにあらざれば、解放することが出來ない、といふ意識が、プロレタリアートに生じ、それがすゝんで、ここにプロレタリアートの反抗運動が發生、進歩してきたつたのである。

プロレタリアートの運動は大體、次の二つの段階を経きたつた。

その一は、資本主義の發生に對する反射的な、無意識的な運動である。その具體的なものとしては、機械破壞運動である。千七百七十年ハーグリーブズがジェニー紡績機を發明したとき手工業労働者はハーグリーブズ家を襲撃して機械をこはした。ミュール紡績機を發明したクロムプトン、蒸汽機關の發明者ジャツカール等も、ハーグリーブズとおなじやうな襲撃をかうむつた。かかる機械破壞運動の大規模のものとしては、イギリスのラツダイツト運動とドイツのシュレジェンのオイレングビルダの織匠一揆とがある。ラツダイツト運動は、千八百十一年から十五年にかけて行はれたもので、ラツダ王なる假想の主謀者が中心となつて、ピストル、鐵砲、鐵槌をもつた破壞隊が、ノツテインガムの工場破壞、機械破壞を行つたものである。その後、ノツテインガムのみならず、ヨークシャイアー、ランカシャイアー、チエシヤイアー、ノスタター、ダービシヤ

イアー等の諸所でこの種の破壊運動がさかに行はれた。ドイツの織匠一揆は、シエレジエンのオイレンゲビルゲの手工業親方ツワンチーゲルと機械を設備した工場主デイーリツヒとを襲撃し有名な「血の裁判」の歌を高唱して暴威を逞しくした。ゲルハルト・ハウプトマンの「織匠」の内容となつたのはこの一揆である。かゝる反射的な社会運動は、経済的發達の必然的産物たる機械や工場に、反射的に反抗したところに特色があるが、その失敗の原因もまたそこにある。

機械に罪はない。この機械を所有し、使用する資本主義的社会關係に罪があると自覺して、その社会關係打破のために近代的な社会運動に向つたのが、第二段のプロレタリアートの運動である。次に資本主義先進諸國の資本主義初頭のこの近代的社会運動の概略を略述しよう。

先づ最初は、二大革命と産業革命とを經驗して當時もつとも先端に立つてゐた國家たるイギリスの勞働運動を觀察しよう。イギリスは産業革命の祖國だけあつて早くから反封建的なブルジョアジーの巨大なる代辯者、理論家を生み出した。アダム・スミス(一七二三—一七九〇)、ジェレミー・ベントム(一七四八—一八三二)、デーヴィッド・リカルドー(一七七二—一八二三)がそれである。一方、資本主義に對する懷疑思想家も輩出した。オーエン、スペンス、ゴツドウィン(一七五六—一八三六)、チャールス・ホール等はそれである。ゴツドウィンの名著「ポリテイカル・ジャスティス」は千七百九十三年にすでに世に出てゐる。フランツ・メーリングは、

ドイツ社会民主黨史の一節で、社会主義的思想は、社会運動に先行する、と言つてゐるがこれはイギリスにも妥當する。

一七九一年イギリスでは勞働者の團體、ロンドン通信協會が生れた。有名なトマス・ハーデイイの發起である。これはロンドンに本部を置き各地に支部を設けて通信で連絡をとつた。協會の宣言書を見ると、これがフランス革命前後の民権的思想の影響をうけてゐることが明瞭である。それは先づ、自由が人間の自然權でありとし、その自由は何人も議會に参加することによつて達せられるとし、議會が平等的・一般的代表的性質を有すべきを、主張してゐる。そして暴力的行爲を排して、行動は理性に準據すべきをよく主張してゐる。これによると、この協會が、ルソー等の自由民権論の思想の影響をうけてゐることが明らかであらう。一七九一年フランス革命が勃發するや、ジャコバン黨の行動に同感し、「ジャコバン黨員は人類のために戦ひつつあるのだ」といふメッセージを送つて、激勵した。ためにイギリス官憲の猛烈なる迫害をうくるに至つた。この協會はその後漸次會員を殖やして發展したが、千七百九十九年および千八百年のコンピネーション・アクト(結社法)によつて彈壓のあとで消滅した。これにつづいて、千八百十一年ごろから、前述のラツダイト運動がおこり、各地に機械破壊、工場襲撃の大暴風が捲きおこされた。これは官憲の彈壓によつて永くは續かなかつたが、支配階級を威嚇し、勞働者の威力をしめした

ことは大であつた。ラツダイト運動類似の一揆は十五年頃で終末を見せたが、つづいて各地に労働者が普通選挙権を求むる擾亂が續發した。千八百十九年のピータールー一揆（これはピーター・ワイリルドで行はれたがウオタールーをもちつてピータールーと呼んだ）、千八百二十年のロンドン陰謀、キャツスル、オリヴァー、レイノルツ、エドワーズの一揆等々枚舉にいとまがない。これらの騒擾は結局は、彈壓と死刑とに威脅されて惨敗に終つたが、その威力は當局を戦慄せしめ、労働者を鼓舞した。當時の詩人達も、労働者の味方となつて新興階級を激勵した。バイロンのラツダイト運動を詠じた詩、シエリーの「イギリス人に與ふ」といふ詩のときはその代表的のものである。千八百二十四年、かかる類々たる一揆に恐をなした政府は、フランシス・ブレースの言を納れて、コアリション・ロー（團結法）を發布した。この法律は先の千八百十九年および千八百年の結社法を根本よりくつがへしたもので、これより以後、労働者の團結は合法的のものとなり、初期社會運動への道がやうやく拓かれた。千八百三十年に、ジョン・ドハーティが「労働保護のための國民協會」と稱する最初の労働組合をおこし、最盛時には十萬の組合員を有したといはれてゐるが、千八百三十二年頃には消滅してしまつた。千八百三十一年には革命的な建築労働組合が出来た。千八百三十二年には選挙法改正があり、此改正にだまされた労働者は千八百三十七年から選挙権を要求する大運動をおこした。チャーティスト運動がそれである。

つぎに、フランス革命の發祥地フランスの社會運動を一瞥しよう。

フランス革命の進行につれて、ジャコバン黨の内に内訌がおこりその勢力がおとろへはじめ溫和派が勢力を占めて千七百九十五年に非民主主義的な憲法を發布したので、從來ブルジョアとともに封建打倒の闘争に参加してゐたプロレタリアートは憤激し、その結果バブーフの名によつて知られるブオナロツティの陰謀事件が発生した。ブオナロツティは執政政府の轉覆と千七百九十五年の憲法の廢止と労働者獨裁の主張とをかゝけて、バドテオン同盟をむすび、同志一萬人をもつて、實行運動に着手せんとした。その矢先、同志グリセルのスパイ的行爲により陰謀が暴露しブオナロツティの昔コルシカ時代の親友ナポレオンのために彈壓、解散、捕縛され、バブーフは死刑、ブオナロツティは追放に處せられて、事件は終末を告げた。スパイ、グリセルはバブーフの子供によつて仇討をされた。千八百十五年のナポレオンの失敗後、ブルボン王朝が再建されて自由主義を壓迫し始めるや民衆の反抗おこり、千八百二十一年以來、王朝轉覆と民權回收の武裝的秘密結社がおこり、アウギュスト・ブランキー等が各地にプロレタリアの結社を結合して時期をうかがつてゐた。人民の友、人間の權利、家族協會、季節協會、新季節協會等の大小の秘密結社が簇生した。千八百三十一年にはフランス絹織物業の中心地リヨンで大暴動が勃發した。リヨンは昔からフランス社會運動の中心地で、第十六世紀には印刷工のストライキが行はれ、千七百

十七年には帽子製造工の騒動があり、千七百八十六年には織物業者の叛亂があつた。千八百三十一年の暴動には労働者は決死の覚悟で戦つたが、遂に敗北した。しかし、ブルジョアジーに反抗して真正面から衝突したことは、自由主義的運動の多かつたフランスの運動に、多大の革命的刺激をあたへた。その効は全く没すべからざるものがある。三十四年にも、再びリヨンに暴動がおこつた。千八百三十九年には、アウギュスト・ブランキが労働階級政府の樹立をめざして、叛亂をおこした。この暴動で注意すべきことは、單にフランスの労働者のみによつておこされたのではなくして、ドイツ、ベルギー、スイス等の労働者も参加したことである。インタナショナルの色彩が濃厚であつたブランキの意圖は、結局失敗したが、のち千八百七十一年のバリ・コンミュンによつて、一時的ではあるが實現された。

イギリス、フランスの社會運動を論じた我々は、次に、科學的社會主義の祖國ドイツの社會狀勢にうつらなければならぬ。

ドイツは、中世から近代資本主義への社會的進化の途上で、二個の大なる障害にぶつかつた。その一は、三十年戦争であり、その二は對ナポレオン政策であつた。三十年戦争はドイツ國內の新舊兩教徒の争ひに、デンマーク、スウェーデン、フランス等が加はつて千六百十八年から四十八年までの三十年間つづき、ドイツを慘憺たる窮狀にまでつきおとした戦争であつた。この戦争

の結果、ドイツの大部分の都市および農村はまつたく荒廢し、その經濟を全く破壊してしまつた。その大創痕から癒えて、ドイツが再び立ち上がるには百年の年月を要した。千七百五十年ごろから、ドイツに漸く、復興のあとの新機運がうごき出した。戦争からのがれた地方ことにハンブルグ港の隆盛、ザクセン、シュレジエン地方の工業の勃興、フランスに於ける自由主義藝術、思想の影響、イギリス産業革命の波及等がそのおもなる原因であつた。

カント（一七二四——一八〇四）、ウィーランド（一七三三——一八一三）、ゲーテ（一七四九——一八三二）、シッレル（一七五九——一八〇五）、フィヒテ（一七六二——一八一四）、ヘーデル（一七七〇——一八三一）等は、この時代に輩出して、自由主義をとなへた巨匠である。

フランス革命がおこり、つづいてナポレオンの獨裁がはじまるや、ドイツはロシア、オーストリア等と合して對フランス戦役に加はり、國內に於けるあらゆる自由主義に對して抑壓をこころみるにいたつたので折角延びはじめとしてブルジョアジーの自由主義は、ここに再び無慘にもつみとられるにいたつた。そして、それはナポレオンが失脚してその雄圖がむなしく消えるにいたるまでつづいた。ただ、この反動時代にも新時代への機運がまつたく死滅したのではなくしてたとへば、千八百七年からはじまつたシュタインおよびハルデンベルヒの都市條例ならびに農奴解放による封建制度打破のときが行はれた。フィヒテの有名なる「國民に告ぐ」なる演説は千

八百八年になされたのだ。

千八百十五年に於けるナポレオンの失脚は、ドイツ發展への新しい動機をあたへた。それは二つの方面からなされた。その一つは經濟的方面からであり、他は思想的方面からであつた。ナポレオン失脚の翌年千八百十六年および十七年には恐慌がおこり、ドイツの各方面は大打撃をうけたが、その経過した後は、ふたたび活氣を呈し、ことに、フランスの大陸封鎖が解けてより以來、從來禁止をうけてゐたイギリスの機械、動力、生産品がドイツに輸入し、ドイツも亦それを喜んで輸入したために、ドイツの生産界が大刺激をうけ、ドイツ産業革命の機運がやうやくうごきはじめた。ドイツは、第十九世紀の初頭には、いまだ、封建的關係がおこなはれ、人口の八割は農業であり、工場はほとんど存在せず、技術もまた手工業の範圍内にとどまつてゐた。イギリスよりの革命せられたる技術の傳來はドイツの生産界を漸次資本主義化せしむるにいたつた。ドイツの産業革命は、普通四十年代より行はれたといはれるが、それ迄に徐々として胎生しつたあつたのである。外國の影響以外に、ドイツ國內でもボルシツグ、ハルトマン、チンメルマン等の巨匠が出で、ドイツの産業を資本主義化するために多大の貢獻をなした。フランス革命當時から、フランスの影響をうけて、資本主義と自由主義の機運大に動いてゐたライン諸州は、ドイツ内部では一番早く資本主義化した地方である。

その二は、思想的方面である。前世紀末から第十九世紀初頭にかけて自由思想が擡頭したが、對ナポレオン戰爭勃發するとともに、オーストリアの反動政治家メツテルニヒ、ロシアのツァーリ、アレキサンダー一世の強制によつてドイツも反動化して、自由思想を彈壓したので、勢ももがれてしまつた。しかし、千八百八年には、フィヒテの有名なる愛國演説が行はれてドイツ人を熱狂せしめた。それより、ドイツ統一の運動が漸次盛んとなつて來た。

プロシヤ王ウイルヘルム三世は、政治的自由をドイツ國民に約し、千八百十五年には憲法を發布することを約した。

ドイツ統一運動は、フィヒテの演説やウイルヘルムの施政に刺激せられて、主としてインテリゲンチヤ、學生によつて行はれた。かゝる運動の理論的代表者としてルードウイヒ・ボエルネがある。ボエルネは千七百八十六年フランクフルト・アム・マインに銀行家の子供として生れ、初め醫學を志して、ハルレ、ハイデルベルグ大學に學び、後志を國家學に轉じてギーゼン大學にうつた。卒業後文筆家となつて「ツァイトシュユイデン」「市民生活、科學、藝術」誌の編輯を行ひ、政治的民主主義をとへてドイツの自由主義を鼓吹し、七月革命後は、パリに永住した。彼は千八百三十年まで、ドイツに於ける自由思想の鼓吹に貢獻するところすこぶる大であつた。

千八百三十年の七月革命は、九月上旬にドイツに波及し、フランスシュヴァイグ、ヘツセ・カツ

セル、ハンノーフェル、ザクセン、シユレスウイヒ・ホルシユタイン、バーデン、バイエルン等に叛亂おこり、自由主義の氣運大に起つて、憲法を獲得した。これよりドイツ内に自由主義、科學思想大におこつて、ブルジョアジー發展への未來が開かれはじめた。フオイエルパツハ、ブルノー・パウエル、マツクス・ステイルナー、ガル、ビユヒネル、ハイネ等の新思想家が相次いで輩出し、フンボルト、ガウス等の著名なる科學者も世に出でた。せきを決して流出した自由主義は旺盛として封建打倒に向ひ、同時にプロレタリアの運動もドイツに於いて漸く萌芽を發しはじめた。七月革命についで、ウイルト、ファイフェル、ベツケル等に指導せられて、ドイツの自由と統一とを力説した三萬人のハンバツヘルの祝祭（一八三二年）が行はれて武裝的叛亂が計畫せられ、その翌年にはフランクフルト兵營へのインテリゲンチア、勞働者の襲撃が行はれた。千八百四十八年の革命は、ドイツにも波及して、いたるところに流血の慘事をおこし、その血の中からプロレタリアの運動が力づくよく生れはじめたのである。

かくのごとく、急激に變革しつつあるドイツに於いて、もつとも早く自由主義化し、したがつて、資本主義的氣運の熟してゐたのはライン地方である。

ライン河は、往古より交通の要路であり、ローマ軍の侵略もこの河により、中世にはイタリーの商人がこの道を辿つて北上し、南獨アウグスブルグ、ニュルンベルグの商人もまたラインを利

用し、ラインは交通の上のみならず、藝術や詩の上にも早くからうたはれた。交通の盛なるところ、つねに文化の尖端に立つ。

フランス革命おこるや、ライン州にジャコバン黨支部がつくられ、ドイツ人にして、フランス革命に参加するものもすくなくなかつた。ナポレオンの獨裁がはじまるや、ラインの十六州はフランスの外務大臣タレーランの請に應じて、千八百七年にパリで、ライン同盟をむすび、ナポレオンを保護者とあふぐにいたつた。したがつて、ライン州は、ドイツの反動的政策の壓迫からのがれ、ナポレオンの自由なる約束のもとに、工業や商業が盛となり、自由思想も旺盛であつた。ドイツの資本主義史上、ならびに社會運動史上に、ライン沿岸の諸州は、つねに先頭的な、主要な役割をつとめたのはかゝる理由によるのである。

以上が、第十九世紀初頭に於けるヨーロッパ、およびドイツに於ける、社會的情勢の素描である。これによつて、第十九世紀の初頭が、社會變革過程に於いて、いかなる段階にあつたかを、諒解し得られるであらう。

科學的社會主義の建設者であるカール・マルクスおよびフリードリッヒ・エンゲルスは、かかる社會的背景を負ふて、實にドイツのライン州に生れたのである。彼等の生涯の仕事が、いかなるものであるべきかは、かゝる社會的必然が自ら物語つてゐるのではないか。

第二章 學窓に於けるマルクス

千八百十八年五月五日、カール・マルクスは、プロシヤのライン州のトリエル（フランス語ではトレーヴス）の町のブルツケルガング街六百六十四番地に、長男として生れた。こえて二日、五月七日トリエルの戸籍役場に彼の生誕が届け出でられた。

「千八百十八年五月七日午後四時、トリエル居住、三十七歳、上告裁判所附辯護士たる紳士ハインリツヒ・マルクスが、トリエル區トリエル市役所戸籍吏たる本官の前に出頭して、本官に一人の男子を示し、この男子は五月五日午前二時トリエル在住の辯護士ハインリツヒ・マルクス氏と彼の妻アンリエット・プレスボルクとの間に生れ、此兩親は此彼等の子供にカールといふ名前を與へんと欲することを述べた。すでにのべた子供の呈示、及び二人の證人すなはちトリエル在住の政府書記官にして三十二歳のカール・ベトラツシュ氏とトリエル在住の使用人にして二十一歳のマンティアス・クロツプ氏との面前に於いての上記の宣言がなされたので、本官は子供の呈示者及び二人の證人の出席のもとになされたすべてのこの行動について二重の原

文書を作成し、それらの人の閱讀の後にその文書は子供の呈示者、證人及び本官に『つて署名せられた。

上記の年月日に。カール・ベトラツシュ、クロツプ、マルクス、エー・グラツク」

カール・マルクス誕生文書には、かくのごとく記載せられて、いまなほトリエル市役所に保存せられてゐる。

トリエルは、ライン河の支流モゼル河の兩岸にまたがつてゐる。プロシヤ諸州の一つであるライン州の首都である。ドイツの最も古い都市の一つであつて、ローマ軍遠征の記念碑は、二千年の昔すでに同市が開化したことを物語つてゐる。中世に於いても著名な都市で、アウグスタ・トレヴェローラムといふ名をもつて知られ、舊教大僧正の管轄に屬してゐた。ボルタ・ニグラと稱する圓形劇場、ドーム等今なほ残つてゐる遺跡は、この都市の歴史の古いことを證據だててゐる。同市は八百十五年以來、プロシヤの一領域であつたが、フランスにナポレオン出で、ライン地方がライン同盟をむすんで彼の統帥をうけることとなるや、千八百一年フランスに屬し、ナポレオンはこの地方に自由を許したがために同市を中心とするライン州には、他のプロシヤ諸州に比して、自由主義の氣運が旺盛に勃興して、プロシヤ従つてドイツ全體のうちで、經濟的にも、政治

的にも、思想的にも、最も資本主義化してゐた。トリエルは、皮革工業および織物業が盛に行はれ、かつモーゼル酒の集散地であつた。マルクスが酒好きであつたことについて、後年ある人がモーゼル酒産出の中心地に生れたのだから仕方がない、と言つたことがある。

ナポレオンの失脚と共に、千八百十四年にこの地方一帯はふたたびプロシヤに歸屬した。そして新らしいプロシヤの支配者は、過去に於けるフランス的文化を古いドイツ基督教化せしめやうとして神聖同盟の旗の下に同地を反動化せしめやうとしてゐた。マルクスが呱呱の聲をあげたのは、かかる反動化的政策が同地方におこりはじめてから四年目であつた。

前に引用したトリエル戸籍役場に殘つてゐるマルクスの誕生文書の中に出て来るハインリッヒ・マルクスは、カールの父である。この父は初めヒルシエルと呼び、後ハインリッヒと改稱した。マルクス家の古い戸籍は明瞭でないが、ハインリッヒの父および兄弟はともにラビー（法律學博士）であり、ハインリッヒもまた法律を研究し、辯護士となり、あとではトリエルの法律顧問官となつた。マルクス家はユダヤ人系であり、その奉ずる宗教もまたユダヤ教であつた。

マルクスの父は、自由思想の持主であり、フランス第十八世紀の思想の影響をつよくうけた。第十八世紀のフランスの思想界は啓蒙時代で一方には従來の唯神論に對してメリエ、ドルバクその他多くの唯物論者が出て、他方には科學が勃興し、従來の封建的イデオロギーに對するするど

い批判がさかに行はれ、フランス革命直前にはモンテスキュー、ルソー、ヴォルテールや、デイドロを初としての所謂エンシクロペディストが輩出した。マルクスの父が特に私淑したのはデイドロとヴォルテール、ラシーヌであつたといはれる。デイドロ（一七一三—一七八四）は、政府や貴族、僧侶等の支配階級の度々の壓迫を排して十五年間にわたつてフランス啓蒙哲學の大成たる百科全書を完成した思想家、批判家であり、ヴォルテール（一六九四—一七七八）はフランス宗教界の腐敗を痛罵し、寺領の沒收を主張し、異教迫害、宗教裁判所、宗教戦争等を非難してキリスト教の害悪を指摘した。專制政治に對しても反抗し、青年時代詩をつくつて政府に反對したためにパリを追放されたほどである。また、これらの第十八世紀の新思想家の外にイギリスのジャン・ロツク（經驗學説を主張した學者）等にも私淑したといふことである。これらの新思想に對して同感を感じてゐた、マルクスの父は、當時のドイツでは、餘程すんだ思想の持主と言つていい。マルクスが生れてから千八百三十八年、父の死するまで父からうけた精神的、思想的影響は、後年の彼の思想形成のうへにすくなくからざる影響をあたへたことであらうと考へられる。

マルクスの母は、オランダ系のユダヤ人であり、ドイツ語の發音さへも不完全であつたといはれるから、思想的に、または學問的にマルクスに與へた影響は大であつたといはれないが、その

黙々として息子を信ずる不語の愛は、反つてマルクス独自の思想の自由にして卒直な發展のため
に役立つたであらう。カール・マルクスは、この嚴格にして博學なる父と愛情豊かな母とを両親
として、姉ゾフィーにつぐ長男として生れ、育てられたのである。その家庭が相當富裕であつた
ことは、父の社會的地位によつても想像されるし、後に至つてマルクスがベルリン大學在學時代
に父が普通學生よりも多額の學費を送つた事實によつても推測出来る。「彼の家庭は相當に豊か
であつて、その日の生活に困る事なく、文化的家庭であつたが、決して革命的な家庭といふもの
はなかつた」と、千九百十三年出版のグラナツト百科辭典に、レニンはマルクスの家庭を評して
ゐる。要するに、マルクス家は、ユダヤ人であつたといふことをのぞけば、社會的には中流な、
平和な家庭であつたといふことが出来るであらう。

千八百二十四年、カールが六歳のときに、マルクス家は、ユダヤ教からプロテスタントに改宗
した。ドイツに於いてユダヤ人は社會的に虐遇されてゐた。ことにナポレオン失脚以後ライン州
がプロシヤの一州となり、反動的の氣分がさかんとするにつれて、差別問題が再びもりかへし、
農業恐慌のためにユダヤ人が暴利をむさぼるや、ユダヤ人に對する反感ますます高潮に達した。
マルクスの父は、ユダヤ教を奉じてゐたが、宗教そのものに對してはあまり執着がなかつた。マ
ルクスの傳記者として有名なフランツ・メーリングは、父の改宗は、一層教育あるキリスト教社

會に入る權利を得るために、保守的な母を機縁として子供のカールの未來のことを考へた結果で
あるといつてゐるが、リヤザノフはそれは單なる一面の眞理であるにすぎぬ、といつてゐる。改
宗の理由を證する何等の文献もないから、その點は、いづれが正しいか斷言は出来ぬであらう。
しかし、キリスト教徒に改宗したからといつてカールが、もとのユダヤ人を放棄して省みなかつ
たのではなくして、むしろ反對に社會的に特殊あつかひにされるユダヤ人のためにつねに闘争を
怠なかつたことは、彼の生涯の歴史、ことに「ユダヤ人問題について」と題する彼の後年の著書
を見れば明瞭であらう。

千八百三十年、マルクスが十二の時に、トリエルのギムナジウムに入學した。ギムナジウム時
代の彼については、知られてゐることがすくない。修業中の若干の彼のなした卒業論文と卒業證
書とが、當時の彼を知る資料として、今日残されてゐるにすぎない。

卒業論文の一は、「職業の選擇に際しての一青年の觀察」と題するドイツ語論文であり、それ
に於いて、彼は人間の境遇が人間の思想をつくり、したがつて職業を規定するものである、こと
を論じてゐる。この少年時代の思想は、明らかに父を通じて來たフランス第十八世紀の唯物論的
見解が影響を及ぼしてゐることが觀取せられ、またロバート・オーエンの教育環境説等も何等か
の暗示をあたへてゐるのではないかと思はれる。しかし、その環境をつくるものはまた人間であ

る、といふ思想へは未だ發展してゐない。いまこの論文のうちの一節を左に譯出してみよう。

42

『この點で我々の自己の理性は忠告者たり得ない。何故ならいかなる經驗も、またいかなる深い觀察も理性を支持せず、理性は感情によつてだまされ、フアンタジーによつて盲目にされるからである。我々の理性が我々を見すてる時に我々をたすける何に向つて我々は我々の眼を向くべきであるか。』

すでに人生の行路を經過し、すでに運命の苛酷を試験した兩親は我々の心臓に呼びかける。

我々が地位を冷靜に試験し、その重荷を觀察し、その辛苦の艱難をよく知悉したあとでなほ我々の靈感が繼續し、なほその地位を愛し、その地位が自分の天職だと信するならば、その時は我々はその地位をつかみとつてもよいし、いかなる靈感も我々をだまさないし、いかなる輕卒も我々をひき割かない。

しかし、我々の天職だと信する地位を、必らずしもつねに我々はつかみ得るとはかぎらない。何故なら、我々が社會に於ける我々の状態を決定することが出来る前に、それはすでにいく分か始まつてゐるからだ。』

この論文に對してウイツテンバッハは、つぎのやうな判定をあたへてゐる。

『かなり優良。』

この論文は、思想豊富と、良き計畫的な秩序によつて推奨される。その他の點では、著者はここでまた、彼の特有な缺點、すなはちあまり使はない、比喻の多い表現への過渡のころみにおち入つてゐる……』

卒業論文の他の一に、宗教論文がある。それに對して、キユツペル教授は、「思想の豊富な、華々しい、力づよい、稱賛にあたひする叙述」と判定してゐる。これらの卒業論文のほかに、ラテン語の論文、ギリシヤ語譯解、フランス語譯解、數學上の論文が、當時のマルクスの努力を示してゐる。

これらの卒業試験を経て、十七歳の九月にギムナジウムを卒業した。その時の、卒業證書が残つてゐるが、それには、彼のギムナジウム在學中の全般の學科の成績がかなり詳細に記述されてゐる。

左にそれを摘録してみよう。

一、先輩および同輩に對する道德的行狀は善良であつた。

二、資質と勉強。彼は良き資質をもつ。そして、古代語、ドイツ語、歴史に於いて甚だ充分な

る、數學に於いては充分なる、フランス語はたゞ僅かな勉強を示した。

三、成績。

(イ) 語學。ドイツ語では、彼の文法的智識は、作文と同じく、善良。ラテン語に於いてはギムナジウムで讀まれてゐる古典の比較的容易な場所を、準備もなく、完全に注意を以て譯し説明する。適當な準備か若干の援助をもつてすれば難解な點が語學の性質よりも内容および思想體系にあるようなむづかしい箇所をも譯明する。彼の論文は内容の點では思想の豊富と對象への深い洞察とをしめしてゐるが、しばしば不適當に荷が勝ちすぎてゐる。語學の點では文法上の誤謬からは全く解放されてはゐないが、正しいラテン語に對する習練と努力とを示してゐる。ラテン語の發音では、比較的満足すべき完成を獲得した。ギリシヤ語の成績も大體ラテン語に同じ。フランス語に於いては彼の文法的知識はかなり良し彼は若干の援助を得ればよりむづかしい、場所を讀むことが出来る。又發音に於いても若干の完全さを持つ。

(ロ) 科學。

(a) 宗教的知識。キリスト教理及び倫理學についての彼の知識はかなり明瞭で基礎がある。また彼はキリスト教會史について若干知識をもつてゐる。

(b) 數學。數學に於いては彼はよき理解を持つてゐる。

(c) 歴史および地理に於いては、彼は一般にいつて、かなり通じてゐる。

(d) 物理學および自然科學、物理學に於ける彼の知識は中庸である。

マルクスが、五年在學の後に、トリエルのギムナジウムを卒業したのは、正式には九月廿四日である。

彼は卒業後、ボンの大學に入學して、同年十月半ばにボンに赴き、そこで二學期間聽講した。

彼がボン大學で聽講した科目は、その修業證書によると左のごとくである。

(一) 冬學期(一八三五—三六)

(イ) ビユツゲ教授の法學概論

(ロ) ヴアルテル教授のローマ法史

(ハ) ヴエルツケル教授のギリシヤ、ローマ神話

(ニ) シユレーゲル教授のホーマー問題

(ホ) ダルトン教授の近世文化史

(ヘ) ベツキング教授の研究室

(二) 夏學期(一八三六年)

(イ) ヴアルテル教授のドイツ法律史

(ロ) シュレーゲル教授のプロペルズの悲歌講義

(ハ) プニツゲ教授のヨーロッパ國際法および自然法

これらの聽講課目を一瞥すると、彼の關心をもつてゐたのは、法律學、歴史學、文學方面であつたことが想像出来る。

ボン在學中の二年間、父は度々マルクスに手紙を送つて、たよりを寄越して心配してゐる母を安心させることを促してゐる。これらの父よりの手紙を讀むと、父がマルクスを思ふ心情があふれてゐる。マルクスも父にあてゝ時々返事を出したらしいが、今日は残念ながらボン時代のマルクスの手紙は残つてゐない。父よりの數通の手紙によつて、マルクスの動靜を伺ふより外に方法がない。

マルクスが、トリエルを去つて、三週間目に、父は第一の次のごとき手紙(一八三五年十一月八日トリエル發信)を送つてゐる。

愛するマルクス

お前が去つてからも三週間以上がたつた。そして、お前の痕跡は一つもない！ お前は、お前の母とその心配を知つてゐるにかゝらず、何といふ怠慢だ！ そのことは残念ながら、お前の多くのよき性質にかかわらず私のいづく考、利己主義がお前の心の中にはびこつてゐるといふ考を是認する——

母はこの私の手紙については何事も知らない。私は彼女の心配をこれ以上誇大にしたくない。しかし私はそれをくり返す。それは宥しがたいことだ。

私自身は待つことが出来る——しかし、お前が折返して母を安心させることを期待する。

お前の父

マルクス

十一月十八、十九日の母の手記つきの父の手紙によると、ボンでマルクスには初めが愉快であること、多くの學友のあること、盛に詩をつくつてゐること、が判り、父は、友をすくなく選ぶこと、神を信仰すること、身體を大事にすること、を忠告してゐる。ある手紙では金を如何に消費してゐるかよく知らせよ、父は多くの子供の父であり、金持でないから、とマルクスの浪費を

いましてゐる。その他數通の残つてゐる手紙から、父が如何にマルクスに忠告し、鞭撻し、愛してゐるかを、如實に知ることが出来る。千八百三十六年七月一日の文書で、父はマルクスに向つて、ボンで始めた法律及び行政學の研究をベルリンに於いて繼續することを許し、すゝめてゐる。

『彼が次の學期ベルリン大學に移り、そこで初めた法學及び行政學の研究を繼續することを、私の息子カール・マルクスに許容する。それは又私の意思でもある。』

トリエルにて一八三六年七月一日

マルクス

マルクスが父の許容のもとに、ベルリンに赴く前に、彼は幼な友達千八百十四年ザルツウエーデルで生れたイエニー・フォン・ヴェストファーレン嬢と許婚した。イエニーはマルクスより四歳の年上で、兩人が許婚したときにはマルクスは十八歳、イエニーは二十二歳であつた。マルクス家とヴェストファーレン家は、當主が樞密顧問官となつてザルツウエーデルからトリエルに移り住んで以來の親交の間柄で、イエニーはマルクスの姉ゾフィーの親友であつたから、マルクスとイエニーは幼ないときからの馴染であつた。イエニーとマルクスの許婚は、兩者秘密の間にな

された。イエニーの父は、樞密顧問官であつたが、官僚的なところがすくなく、マルクスを愛し、文學に對する趣味ふかく、つねにホーマーやシエクスピアを暗誦してゐたといはれる。文學的傾向のつよい、ボン大學時代、すでに詩をつくつてゐたマルクスが、このヴェストファーレンの影響をすくなく承けたことは想像にかたくない。ベルリン大學時代に、マルクスの文學熱が高潮にたつし、後年にいたつても、マルクスはダンテの神曲を誦し、シエクスピアのドラマを誦し、ファウストを愛讀し、ハイネ、デューマ、マスコット、セルヴァンテス、バルザック等の文學書を、つねに座右からはなさなかつたときは、幼年時に於ける二人の父、ハインリッヒ・マルクスとヴェストファーレン、ことに、後者の文學的感化がすくなく承りしことを物語つてゐる。

ここにマルクスとイエニーの華やかな許婚時代がはじまつた。この兩人は、千八百四十二年六月十九日クロイツナツハで、正式の結婚をして、兩人の生涯の變らざる交情の生活がはじまつたのである。

愛するイエニーの住むトリエルの地を、はなれがたい心をもつて去つて、ベルリンに赴き、その大學に入學したのは、千八百三十六年の十月二十二日であつた。

彼のベルリン行きは、彼にとつてあまり、氣がすまなかつたらしい。ベルリン到着當時の彼

の氣持は、彼自身によつて、つぎのごとく描寫されてゐる。

『私があなた方の許を去つたとき一つの新しい世界、乃ち愛、ことに初めには憧憬に酔つた、後では希望のむなしい愛の世界が私に發生した。外の場合であれば非常に私を魅惑し、自然の觀察に興奮させ、人生の歡びに燃えさせたであらうところのベルリンへのこの旅行ですら、私を興味なくさせました。のみならず、その旅行は私の氣持を非常に悪くさせました。何故なら私が見た岩は、私の心の感情よりもよりけはしくもなく、より無恥でもなかつたから。また廣い都會は私の血より生き生きしてゐないし、料理屋の食卓は私の荷つた幻想の包みより盛りすぎでなく、不消化でもなかつたから。そして最後に藝術はイエニーのやうにさう美しくありませんから。』

この彼の手紙のうちに、許婚者たるイエニーに對する愛と、それによるベルリン行に對する嫌さ、が明白にあらはれてゐる。このベルリン行は、彼自身よりもむしろ父の懲罰にもとづいたものであつたらう。

ベルリンに着いた彼は、周囲との交際も出来るだけやめ、まつたく孤獨となつて、學問と藝術とに没頭した。その最初の收穫が三冊の詩集となつてあらはれた。この詩集におさめられた詩は

主として千八百三十六年の十月と十一月、すなはち彼のベルリン大學に於ける第一の學期中につくられたもので、最初の二冊は「愛の書」(Bücher der Liebe)と名づけられ、後の一冊は「歌の書」(Buch des Lieder)となづけられ、三冊とも同年の十二月、愛するイエニーに送られた。イエニーに對する愛が孤獨なるマルクスの心情にふれて、この詩集となつたのだ。この若きマルクスの三冊の詩集は、マルクスの死後、マルクスの娘の婿となつたポール・ラファルグ(Paul Lafargue)の手に渡り、ラファルグの死後はマルクスの孫ジャン・ロンゲ(Jean Longuet)の手に渡り、それは他人に貸されて紛失したが、最近再び発見された。しかし、只今のところ發表の域にはいまだ達してゐない。リヤザノフ編輯のマルクス・エンゲルス全集には、發表せらるゝことであらう。

彼が、ベルリン到着後にした最初の仕事は詩作であつた。彼は詩作をもつて、大學時代の専門とした法律學、哲學、歴史學の添へものだといつてゐる。しかし、その後も、在學中は度々詩をつくつた。三冊の愛の詩集は前に述べた通りだ。その翌年、すなはち千八百三十七年までには、さらに多くの詩をつくつた。千八百三十七年の十月末か十一月の初めに、マルクスは父の五十五回目の誕生を祝ふために、それまでに作つた四十の詩と「クエラネム」と稱する悲劇の第一幕と喜劇小説「スコルピオンとフェリツクス」の數章とをまとめて父に送つた。それには、

「千八百三十七年の誕生日に際して、永久の愛の僅かなるしとして、我愛する父にさよぐ。
カー・ハー・マルクス、ベルリンにて」

52

といふ前書が記されてゐる。これらの詩や劇について、マルクス自身、千八百三十七年十一月十日の父への手紙——この手紙は學窓時代父にあてたマルクスの手紙で、今日残つてゐる唯一のもの、これについては後で述べる——の中でつぎのやうに言つてゐる。

『學期の終に私は再び詩神の舞踊とサチールの音楽とを求めました。そしてあなた方に御送りしたこの最近の冊 (Hefte) に於いても、すでに觀念論が、無理強ひされたユウモア「スコルピオンとフェリツクス」を通じて、失敗した幻想的な劇 (クユラネム) を通じて働き、遂にそれは全く變形して、大部分感激的な對象を缺き、奔放な思想の道ゆきのない純形式藝術にうつり變つてゐます。

しかも尙ほこれらの最近の詩はその中に於いて突然私にとつて丁度魔撃によつてのやうに——オ、！ その打撃は初めは打ち碎くやうでした、——眞實の詩の國が遠くの妖女の宮殿のごとくに閃き來り、私のすべての制作を無に歸せしめた唯一のものでありました。』(改造社版、マルクス・エンゲルス全集による)

これら父に送つた詩の中には、先にイエニーに贈つた三冊の詩集のうちも含んでゐる詩も二三再引用せられてゐるといふことである。又これらの詩の中の二つ、「樂人」と「夜の愛」とは、その後若干の改訂の上、「ウイルデ・リーデル」の名のもとに、千八百四十一年一月二十三日の雑誌「アテノイム」——カール・リーデル編輯——によつて、世の中に發表されてゐる。雑誌アテノイムは、ベルリン大學の若き文學者によつて發行せられた週刊雑誌であつて、マルクスはこの團體に屬してゐた。

これらのマルクス自身の手になる詩のほか、彼は、千八百三十九年イエニーのためにつくつた「民謡集成」といふフォクスリードを集めたものをつくつた。後年、彼が詩作をやめてからもハイネや、フライリヒラートやウエルト等の著名の詩人達と交遊し、ハイネのごときはマルクスに詩の批評を依頼したことがある。

若き日のマルクスは、かくして、若き感情を詩のうちに表現することに興味をもつたが、詩作は、彼自らのいふ通り、一つの伴奏であつて、彼の心を特に寄せて研究したものは法律、哲學、歴史であつた。しかも、詩はそれより以後ほとんど作らず、彼の將來を形成したものは、詩にあらずして、大學時代に於ける彼の孜々たる研究であつた。

彼は、ベルリン大學で、何を勉強したか。千八百四十一年三月三十日の卒業證書 (Abgangs-

Marx's)によると、マルクスが聴講した講義は次のごとくである。」

- (一) 一八三六―三七年の冬學期
 - (イ) パンデクテン フォン・サヴィニー教授
 - (ロ) 刑法 ガンス教授
 - (ハ) 人類學 ステツフェン教授
- (二) 一八三七年の夏學期
 - (イ) 教會法
 - (ロ) 一般ドイツ民事訴訟法
 - (ハ) プロシヤ民事訴訟法
- (三) 一八三七―三八年の冬學期
 - (イ) 刑事訴訟法 ヘファル教授
- (四) 一八三八年の夏學期
 - (イ) 論理學 ガブレル教授
 - (ロ) 一般地理學 リツテル教授
 - (ハ) プロシヤ國法 ガンス教授

- (五) 一八三八―三九年の冬學期
 - (イ) 遺産法 ルードルフ教授
- (六) 一八三九年の夏學期
 - (イ) イザヤパウエル氏
- (七) 一八三九―四〇年の冬學期
 - ナシ
- (八) 一八四〇年の夏學期
 - ナシ
- (九) 一八四〇―四一年の冬學期
 - (イ) ユーリビデス ゲツベルト博士

全部で九學期のうちで、十三課目の講義をきいたことになる。その主なるものは、法律學系統の學問であることが判る。そして、各教授は、その講義題目についてのマルクスの勉強振りを講評してゐるが、以上のうち、ガンスの刑法、プロシヤ刑法のもとには、「非常に勉強」、ガブレルの論理學のもとには、「すぐれた勉強」といふ諸評がなされてゐる。マルクスが、特に好んで勉

強した課目が、それによつて、ぼゞ想像される。しかし、以上の僅か十三課目の講義の聴講のみが、マルクスの在學時代に於ける研究のすべてであると思ふのは、大きな誤りである。彼はこの期間に於いて、彼の將來をきづいた基礎的な學問を、學校の講義とはべつに、全く獨立的に勉強したのである。

我々は、現在までに發刊せられてゐるマルクス・エンゲルス全集（モスコフ・マルクス・エンゲルス研究所の委囑のもとにリヤザノフの編纂したるもの）によつてベルリン大學時代のマルクスに宛てた父、母等の慈愛に充ちた、だが嚴格さをも失はない、かすかすの手紙——あるものは故郷トリエルからの、あるものはエムス溫泉場からの——を見ることが出来る。しかし、當時のマルクスがこれらの両親にあたへた手紙は、千八百三十七年十一月十日と推定されるたゞ一つの手紙をのこして全部——父母のマルクスに與へた手紙を見ると、マルクスはあまり手紙を書かなかつたらしいが——が、湮滅してしまつて、今日見ることを得ない。この學窓時代に於ける、殘存せる唯一のマルクス自身の手紙と父母のマルクスへの手紙の内容によつて、ベルリン大學時代の勉強ぶりを視察してみよう。

彼は先づ、法律と哲學とを研究しようとした。そのためにハイネキウス、テイボー及び諸典據を研究し、バンデクテンを獨逸語に翻譯し、法律の方面に於いて一つの法律哲學を形成しよう

として、三百ボーゲンの論述をなした。その研究をすゝめて行くにつれて、深く哲學の研究の必要を感じてその方面に努力をはらひ、新たに一の形而上學的の根本體系を作らんとした。そのために讀んだ本、レツシングのラオコーン、ゾルゲのエルヴィン、ヴィンケルマンの美術史、ルーデンのドイツ歴史等を拔萃して、それに自分の所感を書き添へて置くのを常とした。またクシタスのゲルマニア、オヴィドの挽歌を翻譯したりした。また、獨學で、イギリス語とイタリア語とを學習した。

友からもはなれ、時折は徹夜をつづけて勉強したために、第一學期の終りには身體をこはし、つひに醫者のすゝめでストラロウの漁村に靜養するにいたつた。

彼は初めヘーゲルを讀んで惹きつけられるところがすくなかつたが、靜かな漁村で靜養中にヘーゲル及びその一派の著作を全部讀み通し、そのために、ストラロウに於ける知人を通じて、若きヘーゲリアンの集團であるドクトル・クラブに入會した。

翌千八百三十八年五月十日、マルクスの父は、腎臟病のためにトリエルで死んだ。父のマルクスに對する始終變らざりし、溫嚴ならび存した愛情は、ベルリンに於けるマルクスへの度々の手紙の中によく表はれてゐる。ある時は惱めるマルクスを慰め、ある時は定まらざる彼の心の浮動性をたしなめ、ある時は彼の浪費をいましめた。マルクスは大學時代かなり金を費つたことは、

卒業證書に「訓練的方面には缺點はないが、經濟的方面ではしばしば負債のために訴へられた」とあるによつても知ることが出来る。手紙が來ないとマルクスを責めるかと思へば、故郷へ歸り度いといふマルクスの切々たる希望を鬼にして拒絶した。かゝる父としての温嚴かねそなはつた情に對して、マルクスも亦父を思ふことが深かつた。彼は父を形容して「もつとも寛容な裁判官、もつとも誠實なる分勞者、その火がわれわれの努力の奥深をもあたゝめるところの愛の太陽にまさる神聖なるころ」といつてゐる。マルクスは三人の聖人を尊敬した。彼の父、彼の母、そして彼の妻！と、ある人は言つてゐる。

それ程にまで愛敬したマルクスの心の故郷たる父ハイブリツヒも、二十歳になつたばかりのマルクスを残して他界してしまつた。

父の死後もなほ、彼はベルリンにとどまつて、彼の勉強をつづけた。後では、彼は、あまりアカデミックな大學の講義などはきかなかつたがごとくである。もつばら、ひとり、好きな勉強をつづけた。ヘーゲル左黨の若き哲學者の集團ドクトル・クラブは、その當時のマルクスの上には大なる力をあたへた。

當時このクラブには、ブルノー・パウエル、フリードリツヒ・ケツベン、フォイエルバツハ等を中心として、若き進歩的な篤學の士が集つてゐた。その中には大學の講師、思想家等がゐた。

當時反動的な政治家や思想家によつて、國家の御用哲學に利用せられてゐたヘーゲルの哲學のうちには辨證法的、無神論的結論を見出さんとしたのが、この一群の若きヘーゲル左黨の人たちであつた。マルクスが、このクラブに入會してその一メンバーとなつたのは、前にも述べたやうに、ベルリン大學入學の一學期後のストラロウ靜養中、すなはち彼が十九歳の秋であつた。それから後數年にわたつて彼はこのグループに屬し、年長のパウエルやケツベンの影響をうけ、同時にまた彼等にも彼の力をみとめさせた。

ケツベンは當時實科學校の先生をしてゐた。ケツベンは千八百八年生れの青年で、ステンダルのギムナジウム卒業後ベルリン大學に入り、更に兵務を終へてから千八百四十一年までケーニヒスタットの實科學校の先生をやり、それからドロティン實科學校に移り、千八百五十三年以後はフリードリツヒ實科學校の先生となつた。五十七年、五十八年に出版した彼の著作「佛教とその成立」は名著で、ショーペンハウエルが賞讃したほどである。彼は歴史家としてフランス革命を研究するとともに、他方では有能なるユングヘーゲリアンに屬する著作者であつた。マルクスより十歳の年上であつたが、マルクスの親友の一人であつた。千八百四十年彼はマルクスに「フリードリツヒ大王と彼の反對者」と稱する著作を献じた。『その著作は猛烈な鬭争書であり、著作は當時のヘーゲル模倣者を攻撃し、ことに宗教、深慮、良心、祖國、愛憎のない「無關心者」

に力づく真理を教へるために、第十八世紀の啓蒙學者やカントに歸つた」(カール・フォレンダールのマルクス傳)マルクスとケツペンとは、當時非常に仲が好かつたことは、ケツペンがマルクスに宛てた千八百四十一年六月三日の手紙によつても知られる。

パウエルは、千八百九年生れで、マルクスよりは九歳の年上であつた。三十四年にベルリン大學の神學の私講師となる、三十九年には一年後には教授になるといふ約束のもとにボン大學講師となつた。彼は始めは教會的——正教的ヘーゲリアンであつたが、やがて否定的、批判的ユングヘーゲリアンとなり、大學を追はれた。「各人は福音書の物語りに於いて自分のすきなだけを歴史のものとして認めることが出来るといふシュトラウスのもうろつたる神話を、パウエルは全く非科學的なる點に於いて暴露した。しかししてその際四福音書の全内容について殆んど全部が歴史的に證明せられぬものとして表はされ、それ故に一人のキリストの歴史的存在すら疑問たりうるならば、パウエルはこれをもつて、キリスト教に於いて一種の教義にむすびつけられた觀念および思想は何處より發生し來つたか、またそれらは如何にして世界支配にまで到達したかといふ疑問が解決し得られる基礎をはじめて清めたのである」(エンゲルス、ブルノー・パウエルと原始キリスト教)。シュトラウスが、福音書の歴史的存在性を説き、キリストを歴史的存在とせるに對して、パウエルは、福音書の内容は一つとして歴史のものではなく、福音書の著者たちの假

構であるとし、ギリシヤの哲學者フィロおよびセネカの作るところのものであるとした。

パウエルやケツペンの外に當時のマルクスの友人のうちには、エドワアルト・マイエンおよびルーテンベルグがゐた。マイエンはベルリン大學の若い文學者たちによつて發刊されてゐた週刊誌アテノイムに關係してゐた。マルクスも彼を通じてこの若い文學者たちとも交遊してゐたらしい。四十一年一月二十三日の同誌第四號に、マルクスの詩二篇が登載せられたのも、かゝる因縁によるものであらう。この二つの詩は、三十七年ごろに作られたもので、若干の字句の改訂がほどこされて、アテノイム誌上にのせられた。

ルーテンベルグは、ベルリン幼年學校の地理の先生をしてゐたが、ハンブルグやライプツヒの新聞に論文を發表したかどをもつて解職せられた。マルクスは彼について「私のベルリンの友人中もつとも親しいルーテンベルグ」と言つてゐる。

マルクスの屬したドクトル・クラブは、その後「ベルリン自由人」といふ團體に發達し、それには有名なマツクス・ステイルナーや、四十二年にはエンゲルス等が加盟した。前にのべた雑誌アテノイムの團體は「千八百三十七年乃至四〇年のドクトル・クラブと四十二年の自由人協會との間の連結體」(リヤザノフの言)の役目を果した。

マルクスは、前に掲げた父への手紙のなかで、シュミット・ヘンネルといふ司法官試補と知り

合ひ、法律試験をうけて司法官となれとすゝめられた。ことにウエストフアーレンでは進級順が固定的でないから三年位で試補になれる、試補になつて學位を取り、大學の私講師となる見込があるらしい、ついでには、父母と相談し度い、といふ旨を書きおくつてゐる。この手紙によると、マルクスはすでに大學時代から、大學教授になる希望をもつてゐたらしい。

父の死後半年たつて、彼は母から百六十ターレルを送らした。それは母の言葉によると「お前がドクトル稱號をとるに必要な金」であつた。マルクスをして大學教授たらしめやうとしたのは年長の友パウエルであつた。彼は、マルクスに早く大學を卒業し、ボン大學の講師となり、そこで共同して反動的傾向に對する鬭争を開始するために、雑誌を發行しよう、とすゝめた。私講師となるには、學位をとることが必要であつた。

千九百四十一年四月十五日に、彼はイェナ大學から、「デモクリットとエピクルとの自然哲學の差異」と題する學位請求論文によつて、不在のまゝで、哲學博士の稱號をあたへられた。この論文は、序言、第一部デモクリットとエピクルとの自然哲學の差異に關して、第二部デモクリットとエピクルとの自然哲學の個々點に於ける差異、附録、註釋より成つてゐる。この論文は文體と構造に於いてヘーゲルの影響をかうむつてゐること大であるが、しかしその中には急進的なユングヘーゲリアンの傾向が表現されてゐる。此論文は當時印刷されなかつたが、千九百二

年大部分がメーリングの手により、さらにマルクス・エンゲルス全集の刊行とともに、リヤザノフの手によつて、註釋、準備的論文と共に全部が全集に收載發表されるに至つた。

第三章 ライン新聞時代

大學の「いとふべき試験」(Lumpige Examen) バウエルがマルクスに與へた手紙の中にある文句)をすませ、ドクトルの稱號を得たマルクスは、初志の通り、大學教授としての經歷をはじめようとした。

しかし、この希望は、つひに空しく消えなければならぬ運命となつた。プロシヤを襲ふ反動の氣運が、大學の自由をふみにじつたからだ。

千八百三十年に「死と不死についての諸思想」を書いて、彼岸を目的とせる宗教を退歩とよび、不死についての信仰を心理學的に分析した有名なるルードウィツヒ・フォイエルバツハは、異端者として千八百三十六年にエルランゲン大學の私講師の職を失つた。さらに千八百四十年には、フリードリツヒ・ウイルヘルム四世がプロシヤの王位につき、同年四月アルテンシニタインに代つてアイヒホルンが文部大臣の職につくや、大學に對する政府の反動的壓迫はますます加はり、當時マルクスの屬してゐた若きユングヘーゲリアンの集團の頭目であつたブルノー・バウエルを

學部の統一をみだるものとして、私講師から教授になることに反對し、同大學の教授たちは、彼に對して一致して敵意をしめすにいたつた。千八百四十一年の夏、バウエルは彼の大膽なる著作「三福音書著者の福音史批判」を發表した。ベルリンの反動神學者シエリング、スタール等はこの書を見ておどろき、文相アイヒホルンをして、バウエルを大學より追放せしめんとした。アイヒホルンは、プロシヤ諸州の大學の全神學部のバウエルについての意見を求めたところ、ハルレとケーニヒスベルグ兩大學を除いた他の諸大學はバウエルの追放を可とした。

バウエルはボンを見棄てなければならなかつた。したがつて、それとともに、マルクスの教授となることも絶望となつた。

マルクスは、かつて少年時代ギムナジウムの作文「職業の選擇に際しての一青年の觀察」に於いて、環境が人の職業を定めることを指摘した。プロシヤ當時の社會的環境は、彼をして教授たる職業を放擲して、別の分野に彼の奔放にして不羈の才能を自由にのばすべき職業を探求せしむるにいたつた。また、彼はかつて、その學位論文の一節に於いて、「内部に於いて光りであるものは、外部に發するやきつくす焰となる」と言つてゐる。彼は、この期に際して、彼自身の言葉を、野に立つ文筆人として自由に實現せんと決心した。

千八百四十一年の晩秋、ライプツヒで匿名のパンフレットが出版された。これは、「無神論

者、反キリスト教者としてのヘーゲルについての最後の裁判の宣告、一つの最後の通牒」といふ小冊子で、その中には、正教派保護の形式と舊約聖書の書きぶりを模倣して、ヘーゲルはキリスト教誹謗者であるばかりでなく無神論者でもあつた、といふことが論ぜられて、神學界を動搖せしめた。この匿名の著者は外ならぬパウエルであつた。そして彼は、更にこの「宣告」を繼續して出版するつもりで、それにはマルクスも共働するはずであつたが、ボザウネ（宣言）は禁止を食ひ出版が不可能となつたので、この計畫は中止された。

この時、「ドイツ年誌」へのマルクスの寄稿が行はれた。アーノルド・ルーゲがこの年誌の編輯者であつた。ルーゲは千九百〇二年の生れで、千八百三十一年からハルレ大學の文學および哲學の私講師となり、三十八年以後、「科學および藝術ハルレ年誌」を發行してゐたが、この年誌はユング・ヘーゲリアンの傾向をもつて、宗教や政治を批判してゐた。しかしプロシヤに於ける反動政治は、ルーゲをして、禁止を覺悟して従來通り出版するか、または、プロシヤ以外で出版するか、のいづれかを探るべく餘儀なくさせられた。彼は後の道を探つて、千八百四十一年七月一日からドレスデンに移住して、そこでドイツ年誌を發行するに至つた。

ルーゲはケツペンの紹介でマルクスを知つた。ケツペンは前に述べたやうに、ユング・ヘーゲリアンの一人で、マルクスの友人の一人であり、千八百三十八年以來ルーゲのハルレ年誌の勤勉な

る共働者であつた。ルーゲはマルクスより十四歳上の四十歳であつたが、若きマルクスのタレントをよく理解したのもらしく、千八百三十九年にはケツペンに手紙を出して、「この若い共働者」マルクスを年誌のために獲得すべき旨を傳へた。そこでマルクスは、パウエルとともにドイツ年誌への寄稿者となつた。

マルクスはドイツ年誌の原稿として、四十一年の十二月二十四日發布、翌四十二年一月十四日官報掲載のフリードリッヒ・ウイヘルム四世の檢閲訓令を批判したものをルーゲに送り、さらに、ヴァトケの著書「罪惡について」の批評、バイエルの著作「倫理的精神」の批判等の原稿を送るはずであり、事實それらに着手してゐたが、イエニーの父の死亡その他の家庭的不和のために完結することが出来ず、ルーゲの手もとに届けられた原稿は、新檢閲令の批判といま一つの小冊子だけであつた。マルクスはこの間ボンに居住したり、トリエルのウエストファーレン家の家に寄住したりして、いろいろの家庭的紛争に心を勞してゐた。家庭の内事を個人の瑣事と心得てゐたマルクスは、この家庭の内紛が何を意味するかを、誰れにも知らさなかつた。したがつて今日その内容を知るよしもない。

ところが、マルクスの送つた原稿は、檢閲嚴重のために掲載不可能となつた。そこで、それら掲載不能の原稿を蒐めて、「アネクドター」といふ名で、スイスから出版した。このアネクドター

タ(二卷)の第一巻は千八百四十三年チューリツヒから出版された。アネクドータの編輯者はルーゲであり、寄稿者はパウエル、フォイエルパツハ、ケツペン、ナウヴェルク、ルーゲ及び二三の匿名者となつてゐる。第一巻には「一ラインランド人」の匿名で「最近プロシヤの檢閲訓令について」なるマルクスの論文が登載せられてゐる。これはかつて、ドイツ年誌に寄稿してプロシヤで發表出来なかつた原稿である。アネクドータには今一つ短篇ルーテル論が出てゐる。

ドイツ年誌は、嚴重なる檢閲のもとに續いて出たらしい。四十二年十一月十六日の同誌第五卷第二百七十三號には、「ブルノー・パウエルとオー・エフ・グルツベ博士の大學教育自由について尙ほ一言」といふ、短いマルクスの論文が載つてゐる。グルツベ博士は反ヘーゲル學者で、政府の命を奉じて、ユング・ヘーゲリアン討伐の御用をつとめたベルリン大學の教授であつた。マルクスのこの論文は、グルツベがその著書「ブルノー・パウエルと大學の教育自由」に於いて、パウエルの所説を曲解したのを指摘して、「グルツベを「生れつきの道化役者」と痛罵してゐる。

「アネクドータ」への原稿を書きつつある一方、マルクスはケルンで發行されてゐたライン新聞に密接なる關係をもつた。ライン州は、ナポレオン戰爭中は、ドイツの手をはなれてナポレオンの勢力下にあつたために、由自の氣あふれ、ドイツの他のいかなる部分よりもブルジョアジエの勢力が擡頭してゐたが、ナポレオンの敗北後は再び反動プロシヤの手にかへり、プロシヤ王は

極力、種々の反動的手段を弄して新興の勢力を抑へんとした。ケルンでは、政府黨の機關紙としてはケルン・ギヤゼットが發刊され、これは政府の力とカソリツクの力とを背景として、同地方に獨占的の勢力をもつてゐた。ライン新聞はかゝる絶對的の勢力に對抗する急進的ブルジョアによつて千八百四十二年一月一日から發刊されてゐた。このライン新聞は、自由主義者カンブハウゼン、ハンゼマン等の實務家とケルンのブルジョアで、ユング・ヘーゲリアンたるゲオルグ・ユング、ダゴールベルト・オツペンハイム、メヴィツセン等によつて創立・編輯せられたが、哲學的方面では、ベルリンやボンのユング・ヘーゲリアンが寄稿家として參加した。それらの中には、ベルリンのケツペン、マックス・ステイルネル(有名な「唯一者とその所有」の著者)、ルーテンベルグ、ボンのブルノー・パウエル、マルクスがゐた。パウエルは四十一年の九月のはじめこのライン新聞の創刊の議にあづかつた。創立者のユングとオツペンハイムとは當時の急進思想家で、社會主義にも通曉してゐたモーゼス・ヘツスの幕下に屬する人たちであつた。ヘツスは千八百十二年の生れで、當時に於いて、フランス社會主義の影響をうけてすでに共產主義思想をいだき、もつとも急進なる考へをいだいてゐた人であつた。彼はそれらの幕下を通じ、また直接にライン新聞の上に勢力を有してゐた。四十一年マルクスを知り、マルクスの非凡なる才能をみとめた。同年九月二日、友人ベルトルド・アウエルパツハに宛てた手紙で、マルクスを崇敬すべき偶像

(Abbot) と呼び、最も大なるおそらくは唯一の生ける本来の哲學者とほめ、かゝる人物を哲學の教師として持ちたい、とのべてゐる。マルクスがライン新聞に寄稿するにいたつたのは、彼がユングヘーゲリアンの集團に屬し、またパウエルの友人であつたこともあるが、ヘツスの推輓もあづかつて力があつたことと思ふ。

マルクスは始めボンに居住して、ライン新聞に寄稿してゐた。彼の最初の寄稿は五月五日から十九日まで連載された「第六回ライン州會の議事」の第一論說である。「出版の自由と州會議事の公表とに關する討論」であつた。地方議會は當時のプロシアで經濟的、政治的の意見を公表し得る唯一の場所であつた。にも拘らずその議會は一般に公開せられず、議事録も討論者の名が發表せられなかつた。マルクスの論說は、これに對する攻撃であつた。第二の論說は教會の騒動に關するものであつたが削除された。それについて彼は千八百四十二年七月九日のルーゲ宛の手紙で次のやうに言つてゐる。

『僕等がラインで一つの政治的黃金郷に住んでゐるとは信じて下さるな。ライン新聞のやうな新聞を切り抜けることは、當然不撓不屈のことに屬するものです。僕の地方議會に關する第二の論文は、教會の騒動に關聯して削除されました。それには、如何に國家の擁護者が教會の立場に立ち、教會の擁護者等が如何に國家的立場に立つてゐるかを立證してあります。かうした事件は、

ライン新聞にとつては、愚鈍なケルンのカソリック教徒が陥穽に陥ちて大僧侶の擁護が購讀豫約者を詐取したかの如くで、益々以て不愉快です。……ライン新聞は、今や論說のために召喚狀をうけてゐる。とにかく、新聞のために闘争が始まつてゐます。』

六月には、第七十九號に論說を書いた。八月には「歴史法學派の哲學的宣言」と題する論文を同紙に書き、それに於いて、「典據研究を合言葉とし、典據愛好を極端にまで高めて、つひに船頭に向つて河川で舟を漕がず、その源泉で漕ぐことを求めるやうになつた」ところの「第十八世紀が産出した輕薄兒である」歴史法學派の創造者たるフーゴの哲學的宣言を論じたものである。

十月、マルクスは、ボンからケルンに移轉して、單なる寄稿家から、ルーテンベルグに代つて、ライン新聞の主筆となり、同紙に從來と全然ことなつた新らしい傾向をあたへた。彼はそこで、急進的な政治評論家として、深刻なる筆をふるひはじめた。最初に起稿した論文は、「共產主義とアウグスブルグ一般新聞」である。この論文に於いて、彼は、共產主義について次のごとく言つてゐる。

『現在の形態に於ける共產主義的思想の理論的現實性を決して容認せず、従つて況んや、その

實踐的實現を願ひもせず、又は單に可能とさへ考へ得ない所のライン新聞はこれらの思想に根本的批評を加へるであらう。しかし、ルルー、コンシデランの著、就中ブルードンの爛熯な著書のごとき諸著作が瞬間の皮相的着想によつては批判され得ないで、長き堅忍と深き檢閲との研究の後にのみ批判され得ることは、……之を悟るであらう。』

これによると、彼はいまだ、共產主義的思想には發展してゐなかつた。彼は、他の著書の一部で（經濟學批判の序文）、「アウグスブルグ一般新聞との論争に際して、この種のフランス傾向の思想内容に對しては、私の従來の研究では何の判斷をも下し得ないことがすつかり解つて來た」と正直に白狀してゐる。當時、彼はいまだ急激なる民主主義者であつて共產主義者ではなかつた。十月二十五、二十七、三十日の新聞には、彼は「材木盜取法討論」を連載した。この論文に於いてマルクスは、土地の私的所有者が、無産農民をいじめる事について痛烈なる非難を浴せかけた。この論文に於いて、彼は、土地所有者に搾取される農民大衆の味方となつたが、それは、經濟的見地から、或は社會主義的見地からではなく、法律的見地からであつた。しかし、あとで、彼は、これらの事件に遭遇したために、經濟學を勉強する必要を痛感するに至つたと告白してゐる。

マルクスは、以上のほかに、同新聞に、多くの短い論文を書いたが、この時あたりから政府のライン新聞に對する檢閲による壓迫が、だんだん猛烈さを加へはじめた。

この時代マルクスは二つの方面から面白くない氣持をもたせられた。その一は、ベルリンのドクトル・クテフの自由人たちであつた。彼等はベルリンで奔放な生活をいとなみ、社會主義的、共產主義的な論文「共產主義および社會主義の學說、從つて一の新世界觀を、附隨的な演劇批評等々の中に密輸入」することをライン新聞紙上ではじめたことだ。マルクスはこれらに對して反對をとらへ、かゝる方法を、不適當かつ背德的なものと考へてゐた。「マイエン一派は、世界變革を孕んだ、思想の空虚な、下手な仕事に、無神論と共產主義とを混じたものを、だらしのない文體で、山のやうに送り込んで」來た。マルクスは、共產主義、社會主義を論ずるのなら、もつと根本的に行ふ必要のあることを痛感し、彼等自らは決して共產主義を研究してゐないことを指摘し、マイエン一派の試みを編輯者として許容することが出来なかつた。マルクスのベルリンに於ける「自由人」との阻隔はこの時から始まつた。

その二は、ライン新聞に對する壓迫の増加である。ライン新聞は、元來封建的、官僚的傾向に對するブルジョア急進思想を旗印として發刊されたものであり、同紙上では、つねに言論の自由などが論じられた。またマルクスが編輯を引うけてからは、その上に、さらにモーゼル地方の農

民の悲惨きはまる被擄取状態を暴露したりして、無産大衆の味方として、いちじるしく闘争的性質を帯びて来た。それに、マルクスが主筆となつてから、同紙の發展がいちじるしくなり、紙數も増加しはじめた。このことは、ライン新聞に對する、州知事、政府の壓迫を呼び起した。時、反動的な結婚法案についての投書が掲載せられたので、プロシヤ國王は怒り、彈壓をもつて威嚇した。その後モーゼル地方の農民の被擄取状態の記事が州知事によつて禁止さるるや、更にその禁止の證據的記録をかゝげたので、彈壓はさらに猛烈となつた。マルクスは、編輯者として、「朝から晩まで、おどろくべき檢閲騒ぎや、大臣の文書や、州知事の宣誓式や、地方議會の告發や、株主の怒號」に苦しめられなければならなかつた。千八百四十三年一月二十一日、遂に國王の御前會議の結果、ライン新聞の發行禁止が決定された。しかし、この新聞の株主に對する顧慮から、禁止は三ヶ月間猶豫された。しかし、この禁止期間中は、自由に新聞を發行することは許されないで、二重又は三重（普通檢閲、州知事ゲルラツハの檢閲、およびベルリンから檢閲のために差遣された内閣書記官サン・パウの檢閲）の檢閲を経、刷上つた上は警察に提出し、もしそれに非キリスト教的、非プロシヤ的な何ものもないことにいたつてはじめて發行が許可される、といふ厄介な束縛のもとにあつた。

千八百四十三年三月十七日、マルクスは、つひに、ライン新聞を退いた。翌十八日發行の七十

七號には、次のときマルクスの聲明が出てゐる。

下名のものは、今日の檢閲制度のために、今日をもつてライン新聞の編輯者たることを止めさせられたる事を、署名して聲明する。

一八四三年三月十七日

ドクトウル・マルクス

ライン新聞はマルクスにとつて、實際社會へ出た最初の活動舞臺であつた。この舞臺も、しかしながら、半年にして、檢閲制度のために去らなければならなかつた。

しかし、ライン新聞は、社會的出立の出發點として、マルクスの將來にとつて、意義がすくない。

先づ彼は、大學教授としての多年の希望をなげうつて、文筆家として、政治評論家として立つに至つたことである。國家の反動政策のために大學教授を斷念したことや、政府の彈壓によつてライン新聞が禁止されて編輯部を追ひ出されたことは、若きマルクスに、國家の政治なるもの正體が何であるかを知らしめたであらう。かゝる彈壓は、未來のマルクスを形成するうへにすく

なからざる影響をあたへたことと思はれる。

次に、マルクスはライン新聞に關係したことによつて、經濟學的研究の必要を痛感したことがある。これは、彼の告白通り、材木盜取法案やモーゼル地方農民の被擄取狀態研究のためには、經濟學的知識を必要とするにいたつたことが、彼をしてかく感ぜしめたのである。マルクスは、この時代以後、從來關心の中心であつた法律學や哲學の研究からはなれて、主として經濟學への討究に専心するに至つた。彼はライン新聞を退くにあたつて、「欣んで公生涯から書齋へ退いた」と言つてゐる。その書齋で彼は、未來のために、孜々として、經濟の研究をはじめたのである。マルクス後年の經濟學大成が、この時代に萌芽を發しはじめたのであるから、ライン新聞時代の經驗は、これだけでも、彼にとつて重大であつた。

更に、この時代、マルクスの關心が、被擄取大衆に向けられはじめたことも、看逃せないことであらう。この時代、彼は社會主義者でもなければ共產主義者でもなかつた。その方の知識は充分でない事を自らも告白してゐる。しかし、彼の關心が漸次無産大衆の狀態とその狀態の原因の方へ向けられて、急進的自由思想家であつた彼が、社會主義の方へ轉向せんとする境域に達したことは疑ふべからざる事實である。つづいて來るバリ時代に、彼が社會主義者となるに至つたのは、ケルン時代のかゝる傾向の當然の發展である。

また、この時代に、マルクスが、古いヘーゲリアンのドクトル連中と訣別をしたことも、彼の未來への發足をはつきりさせる上からいつても良いことであらう。

ライン新聞を退いた彼は、さらに未來への新しい發足をしなければならなかつた。

マルクスが、ライン新聞をやめる前に、前記の「アネクドータ」が二月十三日に發刊された。それには、マルクスの「圖書出版の檢閲に關するプロシヤの最新訓令について」及び「ルーテル論」のつた。このアネクドータについて、更に注意すべきことは、これに、千八百四十一年「キリスト教の本質」を著したルドウイヒ・フォイエルバッハが、「哲學改造暫定テーゼ」を發表したことである。フォイエルバッハは、「キリスト教の本質」に於いて、すでに、ヘーゲル流の唯心論的辯證法に反對をとなへた。「テーゼ」も亦同一の傾向を帯び、これは、その後マルクスの上に大なる影響を及ぼした。この影響は、三月から八月までの間にマルクスが書齋にひきこもつて書いた「ヘーゲル國法批判」の中に、あらはれてゐる。この論文に於いて、マルクスは明白に、ヘーゲルから離れてフォイエルバッハに近づいたことを示してゐる。マルクスが、觀念的思惟方法から、唯物辯證法的方法論へ移行し行く重大なる思想の轉機として、この時代は注意に價する。マルクスは、ヘーゲルから辯證法と、市民社會階級對立等の社會科學的概念を引き繼いだだけでヘーゲルからはなれて行つた。

ライン新聞を去つたマルクスは、次の仕事を発見しようとした。當時ヘルヴェグがチューリツヒで「デル・ドイツチエ・ポーチ」といふ雑誌を發刊してゐた。マルクスは、「何一つ出来ないドイツ」を去つて、スイスでこの仕事を手傳はうとして、ルーゲにあてて、その旨を書き送つたが、ヘルヴェグがチューリツヒから追放されたので、この計畫はまともになかつた。ルーゲは、有能多才なるマルクスを自分の手もとに置かうと思つて、いろいろ苦心した。二月一日出の手紙で、ルーゲはマルクスに返事をして、ライプツヒのヴァイガント書店と相談してチューリツヒで「ドイツ年誌」を改造して發行して、マルクスのために、年に八百五十ターレルを出さうと計畫してゐる旨を書き送つた。それとともに、今後の計畫を樹てるために、ライプツヒに來ることを懇願した。それに對してマルクスは、近くライプツヒに行くこと、新らしく共同で始める雑誌をドイツ年誌の延長としてでなく、新らしく「心はフランス、頭はドイツ」の主義をもつ「獨佛年誌」を月刊誌として發行し度い旨を書き送つた。ルーゲは、ユリウス・フレーベルと相談して發行所をリアラリツシエス・コントロールと定め、編輯費としてマルクスに、五百ターレルを給與することを決定した。

マルクスは、この計畫で經濟上の安定を得たので、千八百四十三年六月十二日、許婚の間柄であつたイエニー嬢と、七年以上の婚約のち結婚した。イエニーは、彼女の父の死後、母とともに

に、クロイツナツハに住居した。マルクスはそこへ出掛けて、そこで彼女と結婚式を挙げた。今日、ドイツ社會民主黨のアルヒーフには、兩名の結婚契約書(Ehevertrag)が残つてゐる。結婚後兩人は、クロイツナツハにしばらく逗留した。

マルクスは、新らしい雑誌を發行するところとしてストラスブルグを欲したが、それはうまく行かなかつた。ルーゲとフレーベルとはモーゼス・ヘッスにつれられて、ブルツセルに行つて、發行地をブルツセルに決しようとしたが、そこはドイツの出版物を讀む讀者もすくなく、文化が低くて自由主義的の出版すら困難であることを察して、獨佛年誌の發行所をつひに巴里と定めた。

新婚のマルクス夫婦は、千八百四十三年十一月、ドイツを去つてパリに向つた。ルーゲは、ルーゲ、ヘルヴェグ、モイレル及びマルクスの國家族のために、共同の臺所と食堂を持つ一軒の家を探して、マルクスを迎へた。

第四章　パリからブルツセルへ

千八百四十三年十一月、パリに移つてから、四十五年三月ブルツセルに追放せられるまでの、約一年半のパリ時代は、マルクスの思想的発展にとつて、重大なる意味を有する時期であつた。マルクスは、この時代に、ヘーゲルより脱却し、さらにヘーゲルよりぬけ出てゐたフォイエルバッハをも追ひ越して、すでに唯物辯證法を把握して、立派な共産主義者となつた。彼のその後の共産主義者としての行動及び理論上の收穫の基礎は、じつにこの時代に固められたといつても良し。

カール・フォレンダーは、その近著「カール・マルクス」に於いて、千八百四十四年を、次の四つの理由によつて、近代ドイツ社會主義の誕生の年だと指摘してゐる。(一)フリードリッヒ・エンゲルスがモーゼス・ヘツスによつて社會主義、共産主義に獲得せられ、獨佛年誌に論文を起稿した。(二)クロイツナツハで轉換しつゝあつたマルクスが、同じく獨佛年誌に寄稿した。(三)當時おこつたシユレジエンの織匠一揆が共産主義の最初の刺戟であつた。(四)獨佛年誌や、リュ

ーニングの「ウエーゼル・ダンブポルト」のごとき、最初の社會主義的雑誌ともいふべきドイツ語の雑誌が発行せられるにいたつた。

この説の當否は別として、マルクスのパリ滞在の一年あまりは、マルクス自身にとつても、またドイツ社會主義、従つて科學的社會主義にとつても、その發展の歴史に於いて重要な時代であつたことは疑ふべくもない。

マルクスがパリに移つた翌年の四十四年の二月の終りに、問題の獨佛年誌が一號二號合併となつて發行された。この雑誌は、はじめ、ドイツとフランスの思想家の思想を共働せしむることを目的としたのであつたが、出て見ると豫定のフランスの思想家ラマルティヌ、ラムネイ、ルイ・ブラン、ビエール・ルルー、ブルードン等の諸氏の寄稿はなかつた。したがつてドイツ的色彩がつよく、獨佛年誌の獨佛年誌たる編輯としては失敗した。ドイツ人でこの年誌に寄稿又はたづさはつたものは、マルクス、エンゲルス、ハイネ、ヘルヴェーグ、ヤコビイ、ヘツス、ペルネ等であつたが、あてにしたフォイエルバッハの論文は、得ることが出来なかつた。マルクスは四十二年の十月、クロイツナツハ滞在中フォイエルバッハに手紙を出して、シユリングについての論文を寄稿することを依頼したが、フォイエルバッハは氣分その他を理由として執筆を斷つた。

この獨佛年誌には、巻頭にマルクスのルーダへの手紙が三通と、論文二篇が載つてゐる。それは、「ヘーゲル法律哲學批判序論」と「ユダヤ人問題について」二篇である。

前者は、前にあげた「國法批判」につづいて、千八百四十三年末から初頭にかけて執筆せられたるものである。前者が原稿のまま、最近にいたつてリヤザノフによつて公表せられるまで未發表であつたのに、この「法律哲學批判」は執筆後すぐ獨佛年誌で發表せられた。この論文に於いてマルクスはプロレタリア階級闘争をすでに展開してゐる。

「しからは、ドイツ解放の積極的可能性は何處に存在してゐるか。

答は次のごとくである。それはラディカルな連鎖を以て一つの階級を、即ち市民社會の一階級であり乍らしかも市民的社會の階級でない所の一階級を、すべての身分の解消である所の一つの身分を作り上げることであり、その普遍的苦痛のために一つの普遍的な性質を持ち、そしてそれに對して特殊な不正が行はれず、簡単に不正が行はれる結果として特殊な權利は要求しないやうな、又最早歴史的稱號に訴へずして唯僅に人間の稱號のみに訴へることが出来るやうな、又ドイツの國體の結論に對して一方的な對立をなさずしてその前提に對して多面的な對立をなすやうな、一領域を作り上げることであり、そして最後に、自らを社會の兩餘一切の領域

より解放すると共に、社會の兩餘一切の領域をも解放してやらすには自らを解放することが出来ない様な、それを一言で表せば人間の完全な喪失であり、従つて唯人間の完全な取戻によつて自分自身を得ることが出来るやうな一つの領域を作り上げることである。かくの如き社會の解消を一の特別の身分としてなすものはプロレタリアートである。」

「哲學カプロレタリアートの中にその物質的武器を見出すと等しく、プロレタリアートは哲學の中に彼の精神的武器を見出す。そして思想の閃光が、この質朴なる國民の土臺を根本的に打ち貫くやいなや、ドイツ人の人間への解放は成就せらるるであらう。」

彼は、この論文の結論を、次の文章をもつて終つてゐる。

「結論を要約してみよう。

唯一つ實際的に可能なるドイツの解放は、人間が人間の最高の本體であると宣明する理論の立場によつてなす解放である。ドイツに於いては、中世からの解放は、たゞ同時に中世の部分の征服からの解放としてのみ可能である。ドイツに於いては一切の種類の隷屬を打破するのになければ、如何なる種類の隷屬をも打破することは出来ない。根本的なドイツは之を根柢より革命するに非んば革命することは出来ない。ドイツ人の解放は人間の解放である。この解放の頭腦は哲學であり、その心臓はプロレタリアートである。哲學はプロレタリアートの止揚なく

しては實現せられ得ないし、プロレタリアートは哲學の實現なくしては自らを止揚することは出来ない。

一切の内的條件が充された時にドイツの復活日は、ゴールの雄鷄によつて告げられるであらう。」

なほこの論文には「宗教は阿片なり」といふ有名なマルクス主義の反宗教的標語が、その一節にかゝげられてゐる。

「ユダヤ人問題について」は、ブルノー・パウエルとの二つの論文を批判する形式に於いて、(メーリングのいふ所によれば)「社會主義社會の哲學的綱要」をのべたものである。これに於いてマルクスは、政治的解放と人間的解放とを區別して、次のごとく言つてゐる。ブルジョア革命は政治的解放によつて、人間に人權を與へた。この人權は人間を宗教より解放する代りに信教の自由をあたへ、人間を所有から解放する代りに所有の自由をあたへた。フランス革命の人權は利己的力のもつとも自由なる使命の上に於ける、個々の、共同體から分離せられた人たちの權利にすぎない。「政治的解放は、一方では市民社會の成員すなはち利己的獨立的個人への、他方では國家公民すなはち道德的人格への、人間の復歸である。現實的個人的人間が、抽象的國家公民を

自己に歸せしめ、しかして個人的人間として彼の經驗的生活に於いて、彼の個人的勞働において、彼の個人的關係に於いて、共同體生物となつたときに初めて、人間が彼の個有の力を社會的力として認めて組織し、それゆゑに社會的力を最早政治的力の形態に於いて自己より離さないときに至つて初めて、人間的解放は完成せらるるのである。」ユダヤ人は政治的解放によつてのみでは、社會的に、人間的に解放されない。政治的解放はユダヤ教の世俗的基礎をして、實際的な欲求、私欲たらしめた。この私欲よりの解放によつてユダヤ人は人間的、社會的にはじめて解放される。「ユダヤ人の社會的解放は、社會をユダヤ教(その世俗的基礎は私欲)から社會を解放することである。」

獨佛年誌にかゝげられたこの二つの論文から、マルクスは、すでに階級闘争の理論を把握し、プロレタリアによる社會革命の必要を確信したことを、知ることが出来る。マルクスは、自ら言つてゐる。「私の研究はかういふ結果に到達した。即ち、法律關係並びに國家形態は、それ自身からも、また謂ゆる人間精神の普遍的發展からも理解し得るものでなく、むしろそれは物質的の生活諸關係に根ざし、該諸關係の總體はヘーゲルが之を十八世紀の英佛人の例に倣つてブルジョア社會の名の下に包括した所のものであるが、ブルジョア社會の解剖は、之を經濟學に求めねばならぬ、といふそれである。」

この獨佛年誌には、フリードリッヒ・エンゲルスが、遠いマンチエスターから二つの論文を寄せてゐる。「經濟學批判大綱」と「イギリスの状態」がそれである。エンゲルスは四十四年の秋、マルクスとパリで會ひ、それ以後生涯の友として刎頸の交を結んだ。そこで、ここで、エンゲルスのことにふれることとする。

フリードリッヒ・エンゲルスは、マルクスよりおくれること二年、千八百二十年十一月ライン州北部バルメンの出生である。その家庭はベルグ地方の工業區域の有名な富裕な織維工業者であつた。エルベルフェルドのギムナジウムに通學したが、途中でやめて、千八百三十八年に、父の命によつて、ブレイメンに行き、そこで三年間商業見習をやらされた。彼のこの時代の生活状態については、彼と同じギムナジウムに通學し、その後神學を研究してゐたエルベルフェルドなるフリードリッヒ・グレーバー及びウイルヘルム・グレーバー兄弟に宛た多くの手紙によつて知ることが出来る。これらの手紙では、若きエンゲルスが、才氣縱横に、宗教を論じ、詩や文學を論じてゐる。マルクスも若き時は一時文學に志したが、エンゲルスも亦詩人たらんと志したことがあつたらしい。彼の若い時書いた詩の批評が今日残つてゐる。しかし賢明なる彼は自分の才能についての評價を誤らなかつた。グレーバー兄弟への手紙の一節には、次の一節がある。

「僕は、ゲーテの「青年詩人のために」といふ二つの評論を読んでからといふもの、僕の詩

その創作力にすっかり絶望してゐる。かうしたことが、いかに起り得ることであるかが、この論文の中に非常に立派に述べられてゐると思ふ。また僕は僕の詩が藝術に何ら貢獻するところのなかつたことを明瞭にすることが出来た……」

彼は詩人としてのハイネやベルネに感化されることが多かつた。

エンゲルスの父は、カルヴィン派の新教を奉ずる熱狂的な信者であつた。シュライエルマツヘルやシュトラウスの影響の下にあつたエンゲルスは、この宗教を中心として、父と衝突することが少くなかつた。しかしブレイメンに行つたときには、なほ宗教から斷絶することが出来なかつたが、三年のブレイメン滞在中に多くの宗教的自己批判を加へて、それから離脱することが出来るやうになつた。千八百三十九年のグレーバー宛の手紙には、次の一節がある。

「私は今哲學と批判的神學とに忙しく従事してゐる。誰でも十八歳にもなつて、シュトラウスと合理主義者たちと教會新聞とを知つたときには、何も考へずにこれらすべてを讀み流す奴は別として、誰でも自分のウツパータール風な信仰をうたがひ始めずには居られないであらう。私は正統派の牧師がどうしてそんなに正統的であり得るのかを理解することが出来ない。何となれば、實際明かな矛盾が聖書の中に見出されるからだ……」

キリスト教に對するこの彼の疑問は、後に至つて、「原始キリスト教史について」や「ブルノ

「パウエルと原始キリスト教」となり、宗教の唯物史観的研究となつて大成した。

エンゲルスは、ブレイメン滞在中から、フリードリッヒ・オスワルトの匿名のもとに、ハンブルグで発行されてゐたグツコウ編輯の「テレグラフ・フュア・ドイツユランド」や、スツットガルト発行の「モルゲンブラット・フュア・ゲビルデ・レーゼル」等に多くの文章を発表してゐる。そのうちでも、ウツバータール（エルベルフェルドとバルメンの間の溪谷）通信は、もつとも多く讀者の興味をひきつけた。

千八百四十一年十月一日から一年志願兵としてベルリンのクツプエルグラーベンの近衛砲兵隊へ入營した。入營中にも匿名で、多くの小篇を、アテノイム誌、その他に投稿した。この時代の所産でもつとも注目すべきものは、四十二年の三月ライブツヒのロバート・ピンターから出版した「シエリングと啓示」と題する小冊子である。これも匿名で出版されたが實はエンゲルスの筆になるものであつた。彼は兵營にゐる時、哲學や神學の講義をきいたり、ヘーゲルを研究したりした。老シエリングの開講の演説をもきいた。この著書は、シエリングに對する批判を内容とするもので、キリスト教をこき下すに、青年らしき情熱をもつてしたものであつた。ルーグは、この著者をロシアのバクーニと長く間違へてゐたといふ挿話がある。四十二年の四月から時々ライン新聞に寄稿し、又ドイツ年誌、ヘルツエグの編輯してゐた「アイン・ウント・ツヴァンチ

ツヒ・ボーゲン・アウス・デル・シュヴィツ」誌、フレイベルの編輯になる「スイス共和主義者」誌等へも寄稿した。

四十二年九月除隊してバルメンへ歸り、十一月イギリスのマンチエスターにある父の關係してゐる紡績工場へ事務員として行く途中に、ライン新聞編輯局にて始めてマルクスと會談した。この時の會談は、兩方の誤解によつて、すこぶるあつかなかつた。もしこのまゝで、兩者が相會ふ機會がなかつたら、あの二人の輝しい生涯の交りと共同研究とは成り立たなかつたであらう。がこの兩者の相會ふ機會は、やがて再び來た。だが、それはすこしあとのことであるから、その間のことをすこし述べなければならぬ。

エンゲルスは、約二年間イギリスに滞在してゐたが、彼はその間、資本主義の先進國イギリスの經濟状態、勞働者の困窮状態、ロバート・オーエン派の消費組合運動、チャーティストの革命的運動等をよく視察する機會をもつた。フォレンダーは、エンゲルスの方がマルクスよりも早く社會主義者となつたであらう、と言つてゐる。

獨佛年誌にのつたエンゲルスの二つの論文「經濟學批判大綱」及び「イギリスの狀態、トーマス・カーライル著過去と現在」は、この時代にかゝれたものである。この外、彼は、ロバート・オーエン主義の新聞にも二三の論文を書いた。

獨佛年誌は、これらの新進の思想家の論文を掲載して、勇ましく發刊されたが、やがてそれ以後の出版が不可能になつた。その原因は財政的困難と兩編輯者マルクス、ルーゲの意見の對立とであつた。

財政的方面では、發行所の發行資金が涸渇して、フレイベルは發行繼續不可能を宣言するに至つた。そのみではない。ドイツのプロシヤ政府は、この獨佛年誌をもつてドイツ帝國に危険なるものとし、同誌への寄稿者たるマルクス、ルーゲ、ハイネの入國の絶對禁止を命令し、獨佛年誌の獨逸輸入を禁止し、國境に於いてそれを押收した。また同年誌には豫定とちがつてフランス著作家たちの寄稿がなかつたので、フランスに於いて多くの讀者を得ることが出来なかつた。これらの豫想外の出來事が元來資金の乏しい同誌の發行の繼續を財政的に困難ならしむるにいたつた。マルクスがもらふ筈になつてゐた手當のときも支給し得られなくなつて、年誌の幾冊かを代りに與へるといふやうな窮狀となつた。後で、マルクスがパリを去る時には家賃も拂へない結果、エンゲルスが奔走して友人たちから二三百タレルを集めたほどであつた。

この財政的危機とともに、年誌の共同編輯者であつたルーゲとマルクスとの間に對立が生じはじめた。メーリングは、この兩者の對立について、「マルクスにとつてルーゲとの分裂は、例へば彼のその後のブルノー・パウエルあるひはブルードンとの論争のやうに、實質的意味を有してゐなかつた」と言つてゐるが、マルクスの思想的發展は、ルーゲとの間にかなりな思想的溝渠が出來てゐた。マルクスはすでに社會主義者になつてゐたのに、ルーゲはいまだ單なる自由民主主義者としてとどまつてゐた。この思想的對立が、ヘルヴェグについての兩者の評價を導火線として爆發した。その結果、マルクスとルーゲは、それ以後永久に絶縁した。獨佛年誌の發行は、二號をもつて斷絶した。

その後、マルクスは、パリで發行の「フオールヴェルツ」誌へ、二つの論文を寄稿した。この「フオールヴェルツ」は、ハインリッヒ・ボエルシュタインが經營するもので、千八百四十四年一月以來發行せられ、一週二回の刊行であつた。初めはボルンシュテットといふ男が編輯してゐたが、後になつてベルネーが之に代つた。ベルネーの編輯となつてから、この雑誌は、急激にラディカルなものとなり、プロシヤ政府は、獨佛年誌に對してなしたと同様の彈壓をこころみた。パリには、この雑誌以外には適當な雑誌がなかつたので、ドイツ亡命者達は、これに寄稿した。マルクスがこれに載せた第一の論文は、「プロシヤ國王と社會改良」批判傍註——ルーゲ論說批判——と題するもので、ルーゲが一プロシヤ人の匿名で發表した論文を批判したものである。ルーゲは、千八百四十四年シレジアに起つた織匠一揆を低く評價して、「ドイツの貧民は、貧弱なドイツ人よりも慓巧でない。言ひ換れば彼等はその隨、その工場、その地方の外は何處をも見

ない。全問題は今日までの所未だ一切を打ち貫く政治的精神から見離されてゐる」といひ、この一揆には政治精神が欠乏し、従つて社會革命は不可能だとして、この一揆を軽く看過せんとせるに對して、マルクスは、この「フォールヴェルツ」への論文に於いて、次のごとく言つてゐる。

『先づ第一に、人々は紡織職工の歌を、即ち、この闘争の勇敢なる合言葉を憶ひ起すがいい。その中では竈、工場、地方等が一度も述べられずして、プロレタリアートがいきなりその私有財産社會に對する對立を剗切、果敢、強力な方法で絶叫するのである。シレジアの暴動は正しく、フランス及びイギリスの勞働者暴動が終つたところの事柄をもつて、即ちプロレタリアートの本質に關する意識を以て始まつてゐる。一揆そのものがこの優越した性質を帯びてゐる。機械のみならず、財産の稱標たる勘定帳が破棄せられ、そして爾餘一切の運動が先づ第一に、唯、工業主、即ち目に見える敵のみに向つたのに反して、この運動は同時にかくれたる敵たる銀行家にも向けられてゐる。最後に、イギリスの勞働者暴動は一つと雖もこれほどの勇敢、熱慮、及び忍耐をもつて行はれたことはない。』

フォールヴェルツに載せられた今一つの論文は、「ヴイルヘルム・ワイトリング著、調和と自由の保證批判」である。マルクスは、これに於いて、ワイトリングの才能をブルードン以上に評價してゐる。

ベルネー編輯のフォールヴェルツ誌は、常にプロシヤの政治經濟や、プロシヤ王フリードリッヒ・ウキルヘルム四世に對して痛烈なる攻撃の矢を放つて、ベルリン當局の神経をいらだたせた。ことに革命詩人ハイネの諷刺詩二篇は、つひにベルリン當局をして最後の決意をさせしめた。ハイネの寄稿した詩の一つは、有名な「冬の物語」と稱するもので、それについて、ドイツ共產黨のビーハは、最近のローテ・ファルネ紙上で、次のごとく言つてゐる。

「彼の詩は、人類の有する詩文學の最大作品に屬するものである。彼はそこに於いてメタフィジックなローマン主義を打破して近代文學の基礎をつくつた。彼はその『織匠の歌』及び『冬の物語』で、現今にいたるまで殆んど比較し得るものがないほどの、すばらしい政治文學を作り上げた。」

ベルリン當局は、幾度もパリ政府のギゾーに向けて、「フォールヴェルツ」諸寄稿者の處分を迫つたが、最後には、有名なドイツ自然科学者のアレキサンダー・フォン・フンボルト（プロシヤ外相の親族）の仲介により、つひにギゾー内閣は閣議をもつて、寄稿者、マルクス、バクーニン、ベルネー等をパリから追放するに至つた。ハイネは編輯局に屬せずとの在パリ駐在ドイツ大使の言により厄をまぬがれ、ルーゲは親邊の大官に哀訴することによつて追放をまぬがれた。マルクスが追放令によつてパリーを去らんとするとき、ダルムシュタットの木屋レスケはマルクス

を訪問して、検閲のない四季雑誌を發刊するからハイネと共に協力して呉れと頼んだが、マルクスは、プロシヤに入れば捕縛されることが明瞭なので、一家を連れてブルツセルに脱れた。この時の旅費及びブルツセルに於ける費用は、エンゲルスの配慮によつて集められた。千八百四十五年一月十一日、マルクス一家は、ブルツセルに向つた。マルクスのパリ滞在は四十三年の十一月から四十五年の一月までの約十四ヶ月間にすぎなかつた。

マルクスのブルツセルに於ける活動を記する前に、まだパリ時代のマルクスについて記すべき多くのことが残つてゐる。ここでは、パリに於けるマルクス個人の身邊の雑事とエンゲルスとの最初の共同著述「神聖家族」のことを語らう。

マルクス夫妻は、パリに移住するとともに最初は、ヴァンノイ街二十二番地にルーゲと同一家屋に生活した。そして翌年五月一日に最初の娘イエニーが生まれた。妻はこの新らしく生れた子供を連れて故郷に歸つた。この娘イエニーは後年フランスの社會主義者ロンゲと結婚した。

詩人ハイネとの數ヶ月の交遊もこの時代であつた。ハイネは、千七百九十七年にデュツセルドルフに生れた。マルクスよりも二十一歳の年上である。ボンの大學卒業後ベルリンで、シュライエルマツヘルやゲーテと相識り、抒情詩人としての名を擧げ、のちイギリス、イタリア等を遊歴して再びドイツに歸つた。たまたまフランスに七月革命が起つたので、それに刺激されること大

であつた。ドイツに於ける反動的壓迫の大なるを嫌惡してドイツを去つてパリに出でた。マルクスと相知つたのはすでに四十八歳のときであつた。彼は自らを革命の子なりと稱して、骨をさすごとき諷刺の詩をよんだ。「フオールヴェルツ」にのつた「ドイツ、一つの冬の物語」のとき、また「織匠」のごときその例である。このハイネは、マルクスの家庭に近づいた。マルクスも彼の詩を愛して彼と交遊した。ベルネとハイネとの争ひには、マルクスはハイネに味方し、マルクスがブルツセルに去らんとするや、「あなたを喜んでつれて行かう」と言つた位である。リーブクネヒトの追憶によると、ハイネは詩をつくる毎に、マルクスに見せに行つた。マルクスが皮肉ると、ハイネは夫人の所へ行つて訴へたといはれる。ハイネは、マルクスの追放後、ドイツに歸り、ハンブルグで有名な詩「ロマンツエロ」を残して、五十六年で死んだ。彼はパリ、モンマルトルの墓地に葬られてゐる。マルクスとの交遊は僅か數個月の間であつたが、相當親しい友愛をつづけた。エンゲルスはハイネについて次のごとく言つてゐる。

『ハイネとベルネとは、七月革命以前だけでは孤立した人物であつた。しかし今や彼等は意義を帯びて來たのだ。すなはち有ゆる民族の有する文學と生活とを利用すべき新しい世代は、彼等の基礎の上に成立するのだ。』

ビーハもハイネについて次のやうに言つてゐる。

『ハイネの政治、歴史及び哲學に對する理解の程度は、同時代のいかなる詩人も及ばぬ所であつた。——ハイネが意識的な社會主義者でなかつたことは明かである。彼は徹底的な無神論者でさへなかつた。しかし彼は不撓不屈の革命家であり、被抑壓階級の勇敢なる先驅的闘士であり、時代に對する眼光紙背に徹する詩人であつた。』

『汝等わが墓の上に一つの剣を供へよ！ 我は人類の解放戰に於ける果敢なる勇士なればなり——ハイネ』

文人としての性格の弱さ、生活の不規律にもかゝらず、マルクスが彼と交ることの出來たのも、ハイネのかゝる革命的情熱のためであつたであらう。マルクスはパリを追はれてブルツセルに逃れる時、ハイネに手紙を残して、その中でいふ。「私がこの土地に残して行く人間のなかで誰よりもハイネを残して行くのが私には一番辛いのです。あなたを荷造りして持つて行きたい位です。」ハイネに對する、マルクスの心情を推するに足るではないか。マルクスは、パリに來るや、モーゼス・ヘツスの紹介によつて多くの有名なフランスの社會主義者を知つた。ビエル・ルウ、ブルードン、ルイ・ブラン、カベール等とも交遊したと考へられる。また當時ドイツの亡命者が八萬五千人もパリに居たから、彼等の多くとも近づいたことであつたらう。ロシア人も多く

あつた。

エンゲルスは故郷バルメンからマルクスにあてた手紙で、イギリスの状態や社會運動史を研究中で近く出版したいといつてゐるが、マルクスはパリ滞在中、フランス革命史を研究してゐた。當時のフランスは、千八百三十年の七月革命の後で、この革命によつて再興されたルイ十八世の王權と自由主義との決戦が行はれ、ブルボン王朝はくつがへされて、それに代つて、オルレアン朝のルイ・フィリップによる立憲君主制が布かれた。このルイ・フィリップは新興ブルジョアジエの利益を代表して、ブルジョアジエの未來への自由なる發展を約束した。従つてブルジョアジエは、これを機縁として、上向への途を拓いた。プロレタリアートはどうであつたか。プロレタリアートは、第三身分の名のもとに、ブルジョアジエと共に、千七百九十年代以來封建の遺制と戦つた。しかし、封建の遺制がくつがへされ、ブルジョアジエが發展への可能が確立されると、今度はブルジョアジエは、今までの味方たるプロレタリアートに對して壓迫を始めた。「民衆すなはちプロレタリアートはバリエードに於いて戦つたが、勝利の後にはブルジョアジエがプロレタリアートに對して武装した」のである。

千八百三十一年のリヨンの絹織工の暴動、同じく三十九年五月に於けるブランキエーの叛亂は、プロレタリアートのブルジョアジエに對する反抗の著名なるものであつた。

四十年代のパリイは、かくして、ブルジョアジーの發展と、プロレタリアートの反抗とが渦を捲いて居り、多くの社會主義者がある間に活動してゐた時である。マルクスはこのパリにとび込んで、フランス革命史及び階級の研究に没頭したのは、きはめて自然である。

かかる空気のうちに、マルクスは徹夜をつゞけて、「書物の海」の中に研究に没頭したのであつた。彼は、國民議會の歴史を書かうと思つて、多くの資料を蒐集した。また彼は、フランス革命後の歴史家たるギゾーやチエリー等の歴史家たちを研究して、階級闘争の理論を學んだ。この兩歴史家は、ミニエーと共に、封建制度の末期から革命時代にかけてのブルジョアジーの階級的發展を把握し、社會發展の根本を社會關係にあるとした。生きた歴史から生れたフランス史家のこれら歴史觀に對してマルクスが大なる關心をもつたのはきはめて當然である。マルクスは、すでにパリに行く前、千八百四十三年の夏に、シュミット、ザラスマイト、シャトールリアン、ラケルテール等のフランス歴史や、リエンハルド、ラツベンベルグ、ラツセルのイギリス歴史、ランケのドイツ歴史、政治學說史等をも讀んでゐた。歴史に關する彼の關心、研究が、すでに早いものであり、それが、パリに於ける研究によつて一層進歩した事が推察せられる。又マルクスはここでも經濟學的勉強を怠らなかつた。リカルド及びマカロツク等の經濟學を勉強した。ブルジョアジーが自己解放の思想的武器としたエルヴェシウスやドルバツグ等の唯物論哲學に對して

も研究を怠らなかつた。

これらの勉強や研究から、マルクスの唯物辯證法、唯物史觀、階級闘争理論が確立して行つたのである。この意味で、パリイ時代がマルクスにとつて如何に重大な時期であつたかが判るであらう。

パリでは、ルイ・ブランや、カペーや、ピエル・ルルー、ブルウドン等が、各々の立場に立つて、プロレタリアートの團結と反抗とを主張してゐた。

マルクスが自分でも言つてゐた通り、パリイは、當時、共產主義や社會主義を研究するためには生きた豊富な資料や機會を提供してゐたのである。

エンゲルスはさきに故郷ドイツへ歸る途中パリイにマルクスをたづね、十日間マルクスのもとにあつたが、それよりながい兩者の友情、共同研究が始まつた。バルメンに歸つてからも、エンゲルスは手紙をマルクスに送つて、故郷に於ける運動の情報を報告してゐた。

この兩者の共同研究は、先づ「神聖家族又は批判的批判の批判」となつてあらはれた。ヘーゲルの絶對理念の思想は、フオイエルバツハにより、さらにマルクス、エンゲルス等によつて克服された。青年ヘーゲル學派は、その胎内から、觀念論、思辨派を排撃する唯物辯證法を發展せしめた。ヘーゲル哲學の方法は、倒錯せられて、唯物論とむすんだ。ライン新聞、ドイツ年誌、獨

佛年誌への發展は、ヘーゲルの觀念的思辨を止揚した。それらは、單なる觀念としての哲學から、實踐への政治に重點を置きはじめた。かゝる青年ヘーゲル學派の一部の發展に對して、かゝる發展をなし得ざる「自由者」連は、かゝる傾向に對して反抗し、あくまで純粹思辨、純粹理論によつて哲學を守らうとした。バウエルがそのうちの一人である。彼も亦獨佛年誌に誘はれたけれど、哲學より政治へと向つた一派と共に行動することは、「精神」を唯一にして最高の救とするバウエル一派にとつて、いさぎよしとせざる所であつた。そこで、彼等は、自らの發表機關を持つた。これが、千八百四十三年の十二月から發行せられた「アルゲマイネ・リテラトゥール・ツァイトウング」である。

この新聞には、バウエル兄弟、スツエリガの假名にかくれるプロシヤの士官フォン・ツイヒリンスキー、製本屋の主人ライヒヤルト、洋服屋のベツク、ギルド論者のウエルヒ、ファウヘ等が寄稿して、バウエルが、「自由者」のなかから得んとしたシュテイルネルや、ケツベンヤマイエルやルーテンベルグ等は、つひにそれに應じなかつた。バウエルは、この新聞によつて、彼の反政治的觀念論を主張し、ヘーゲルの流を汲む「自由者」の孤壘を守らうとした。その第八號で、バウエルは、マルクスのユダヤ人問題を批判し、マルクス、エンゲルスが獨佛年誌に於いて發表した傾向に對して反駁をこころみた。

「神聖家族」一篇は、この新聞のもつ傾向一般に對し、ことにバウエルに對して反批判をこころみたるマルクス、エンゲルスの共同著作である。

この著作の序文には次のごとく書かれてゐる。

「現實的人道主義の最も怖るべき敵は……心靈主義或は思辨的理想主義である。……吾人がパウエルの批判に於いて克服せんとする所のものは、正に、このボンチ繪として再生産せられつつある思辨哲學である。この思辨哲學こそ「批判」自身を超越的な力に代へて、最後の試をなすキリスト教的ドイツ的原理の最も完成せられた表現である。

吾人の叙述は主としてブルノー・パウエルのアルゲマイネ・リテラトゥール・ツァイトウングに關聯する。何となればその中に於いて、バウエルの批判と、従つてまた一般ドイツ思辨哲學の馬鹿々々しさが、その最頂點に達してゐるから。批判的批判（リテラトゥール・ツァイトウングの批判）は、哲學による現實の倒錯を、明白な喜劇と仕上ぐれば仕上ぐるほど益々教訓的なのである。——リテラトゥール・ツァイトウングは一つの材料を提供する。これによれば、一般民衆も思辨的哲學の幻想を理解することが出来るだらう。これが我々の著作の目的である。……」

神聖家族の最初の一部(二十二ボーゲン中の一ボーゲン半)はエンゲルスの執筆にかゝり、他は全部マルクスの筆になつたところである。エンゲルスの部分は、パリ滞在中にマルクスの家で執筆したものである。

この書は、バウエル一派のライヒャルト、フアウヘル、エドガー・バウエル、スツエリガ等の批判に對して痛烈に皮肉を浴せかけ、この本の眼目なるブルノー・バウエルに對する批判たる第六章に於いては、その筆勢が最高點に達してゐる。この章に於いては、マルクスの唯物史觀が、發芽してゐるのを見ることが出来る。

要するに、「神聖家族」一篇は、マルクスがその影響を長い間うけて來た觀念哲學に對する最後の清算であり、その後のマルクスの體系形成への明白なる出發點をなしてゐる。(註)

マルクスは、ギゾー内閣に追はれて、ブルツセルに行つた。そこで彼の未來への輝しい理論及び實踐への發展が經驗される。

(註) マルクス自傳手記によると、神聖家族は、彼がブルツセルに行つてから出版されたらし

第五章 ブルツセル時代

ギゾーによつてパリを追はれ、ベルギーの首都ブルツセルに來たマルクスは、そこに千八百四十五年の一月から、二月革命の前夜たる千八百四十八年の二月までとどまつて、多くの文獻的活動と實踐的活動との忙がしい、しかし有意義な生活を送つた。彼の共產主義者としての實踐的活動、社會主義の歴史的文獻たる共產黨宣言は、實にこの時代になされたものである。パリ時代に刻苦して研究した理論、勞働者との交遊によつて體得した經驗は、ブルツセル時代に開花しはじめたのである。ブルツセル時代は、パリ時代につぐところの、彼の生涯にとつて重要な時期であつた。のみならず、國際的社會主義の歴史にとつても、劃期的な時期であつた。

ブルツセルに移つたマルクスは、すこぶる經濟的に困窮してゐたらしい。エンゲルスは、二月二十三日の手紙でマルクスに宛てて次のやうにいつてゐる。

「僕はケルンから、長い間、あちらこちら手紙を出した揚句、たつた今、君のアドレスを受取つた。で、早速君に手紙を書くために坐つたところだ。あの追放の通知に接するやいなや、僕

は、そのために君の蒙つた特別の負擔を共產主義者らしく我々みんなに割り當てるために、直ちに寄附金の募集をやる必要があると思つた。事は順調に運んだ。そして僕は三週間前に五十ターレル餘をユング宛におくり、またデュツセルドルフの連中をも勧誘した。彼等もこれと同額の金を集めた。それからまたウエストフアーレンでもヘツスをしてそれに必要な運動を起させた。しかし、當地では、まだ申込が締切られてゐない。畫家ケツトゲンが問題を長引かせたのだ。従つて僕はまだ豫定の金の總額を受取つてゐない。しかし二三日中には全部集つて來るであらうから、さうしたらブルツセル宛の手形で君に御送りする。だが、それで果して、君がブルツセルで、家の設備を整へるに足りるかどうか、僕にはわからないから、僕はいふまでもなく、あのイギリスに關する最初の著述の僕の原稿料を大喜びで君にお役立する。これは多分遠からず尠くとも一部分は支拂つて呉れるだらうし、また僕には僕の父が金の工面をして呉れるに相違ないから、僕の方はさしあたりなくても済むのだ。大共には尠くとも奴等の破廉耻行爲によつて君が金銭的に困却してゐるのを見るの快味を味はせてはならないのだ。奴等が君に、未來の家賃の支拂までも迫つたことは、實に忌々しき限りである。だが僕は、奴等が結局ベルギーでも君を苦め抜いて、とゞの詰り、イギリスだけにしか行けぬやうなことになるはせぬかと懸念してゐる。』

右の手紙のうちの「最初の僕の著述」とあるのは、おそらく、ライプチツヒのヴィガンド書店から出版された、ニンゲルスの名著「イギリス労働者階級の狀態」を指してゐるのであらう。この手紙の末尾にあるエンゲルスの懸念はやがて事實となつて、四十八年三月にはブルツセルを追ひ出され、つづいてバリからも同じ運命に會つて、ロンドンを最後の土地と定めなければならぬ運命となつた。

マルクスがブルツセルで最初に居をかまへたのは、ブルツセル市内のバシユンヨ街のサン・ジヤン病院の向ひ側であつた。ベルギーの政府は、マルクスの行動を制限するために、公定局に出頭を命じて、ベルギー國內で政治論文を印刷しないといふ始末書に署名を強要した。のみならずプロシヤ政府は、ベルギー政府をして、マルクスを國外に追放する策をとつて、マルクスを壓迫した。ために、マルクスはプロシヤの國籍から離脱した。トリエール政府から、「著述家ドクトル・カール・マルクス」に送附された公文書には、「北アメリカに移住のため」と記されてあつた。その後、マルクスは、どこの國籍にも入らなかつたから、結局彼は、千八百四十五年から死ぬまで、全くのインタナショナルリストであつたわけである。

四十五年の春、エンゲルスはブルツセルに來て、二人共に海を渡つてイギリスへ六週間の短い

旅行をした。この旅行で、マルクスは始めてイギリスの土地を踏み、すでにイギリスを知つてゐるエンゲルスに案内せられて、イギリスの社會、政治状態を研究し、多くの經濟學研究書、ことに「イギリス、スコットランドの古い經濟書」を見る機會を得たのであつた。すでに、パリ時代、マルクスはリカードやマカロツク等の經濟學を研究したことは前に述べたが、今度マンチエスターに滞在するに及んで、タムスン、コベツト、シーニョア、クーバー、エドモシヅ、トウーク、ウエード、イードウン等諸家の著書をむさぼり讀んだ。

この短い研究旅行から歸つたマルクスは、市内から市外に移轉して、ルーヴエン門外のアリアンス街に住居した。ここに恰度一年間住つた。エンゲルスは、故郷の地を引上げて商人たることをやめて、ブルツセルに來り、マルクスの隣家に住居し、ここで、共同の勞作「ドイツチエ・イデオロギー」が成つた。この勞作は、今日にいたるまで、いまだ完全なる形に於いては發表されてゐない。その一部分は、當時月刊誌「ヴスストフアーリツシエス・ダンブポート」に發表されたが、大部分は手記のまま未發表であつたが、今世紀に入つてから、ベルンシュタインやマイエル等によつてすこしづつ發表され、最近にはモスコウのマルクス・エンゲルス研究所長であつたリヤザノフの努力で、大部分が發表された。マルクスは、この「ドイツチエ・イデオロギー」について、次のごとく言つてゐる。

『千八百四十五年の春には彼（エンゲルス）もまたブルツセルに落着いたので、私達は、ドイツ哲學の觀念論的見解に對する私達の見解の對立を共同でまとめ上げることに——實は、私達の以前の哲學的良心の總決算をすることに、決めたのであつた。この決意は、新ヘーゲル派哲學の批判といふ形に於いて遂行された。二冊の厚いオクターヴ版の原稿は、とくにヴェストフアーレンの書肆に送られてゐたのだが、その後、事情が變つて來た爲めに刊行し兼ねるといふ知らせがあつた。私達は、私達の主要目的——自身の理解——を達してゐただけに、それだけ喜んでその原稿を鼠共の牙の批判にまかせてしまつた。』

かゝる目的をもつて書かれたので、この勞作の副題には、「フオイエルバツハ、ベー・パウエル、及びステイルネルを代表者とする最近ドイツ哲學の、並びに諸種の豫言者に於けるドイツ社會主義の批判」と書かれてゐる。この原稿は、以上のやうに諸種のものから成り立つてゐるが、それについて、リヤザノフは次のやうに言つてゐる。

『我々の諸原稿は、若しドイツチエ・イデオロギーを、フオイエルバツハ、ブルノー・パウエル、及びステイルネルに關するものと、真正社會主義の様々な豫言者たちに對して向けられたものとの二つの部分に分割すれば、次のやうに配當される。ドイツチエ・イデオロギーの第一卷はフオイエルバツハに關する手稿、第二卷は真正社會主義の哲學、真正社會主義の歴史記述、

クルマン博士別名真正社會主義の哲學から組成される。クリーゲに對する反對宣言並びにグリユン及びベツクを攻撃した論文も亦この第二部分に附加される筈のものであつたらう。最後の二つの勞作は、一八四六年と一八四七年とにヴェストフアーリツシエス・ダンプボートとドイツ・ブリユツセル新聞とに印刷された。そのほかに尙ほ吾々は同じく真正社會主義を論じたエンゲルスの原稿を持つてゐる。」

それを具體的に示すと、ドイツエ・イデオロギーは、次のごとき諸論文から成りたつてゐる。

第一卷

序言

フオイエエルバツハに關する論綱

フオイエエルバツハ唯物論的及び觀念論的見解の對立

ライプチツヒ宗教會議

聖マツクス

第二卷

真正社會主義の哲學

カール・グリユン著、フランスとベルギーに於ける社會運動、または真正社會主義の歴史記

述法

ホルシユタイン出のゲオルグ・クルマン博士、別名、真正社會主義の豫言
その他

リヤザノフの言ふ所によれば、これらの原稿の大部分は、エンゲルスの肉筆によるものであるが、それは全部がエンゲルスの述作によつたといふ事ではなくて、いふまでもなく兩者の共同著作で、マルクスの口述をエンゲルスが筆記した部分もあるとのことである。

フオイエエルバツハを論ずる部分では、ヘーゲル的思想と唯物辯證法との中間體であるフオイエエルバツハに對するマルクス、エンゲルスの發展しつゝある思想からの鋭い批判がなされてゐる。有名なるフオイエエルバツハへのテトゼ十一項の中には簡潔にフオイエエルバツハ的唯物論の不完全さが指摘されてゐる。「哲學者は世界を種々に解釋しただけだ、世界を變更することが問題なのだ」といふ有名なる句は、その第十一項である。

「フオイエエルバツハ唯物論的及び觀念的見解の對立」に於いては、後年に比するとやや素朴的ではあるが、唯物史觀が系統的に述べられ、生産力、生産關係、上層建築等の間の關係、階級、革命、強力理論に對する反駁などの唯物史觀的の重要問題が、力強く論述されてゐる。マルクス

が、ライン新聞時代の末期からパリ時代へかけて歴史と經濟學を研究した成果が、ここに至つて一つのまとまれる史觀として結實したのを見ることが出来る。

「ライブチツヒ宗教會議」は、ブルノー・パウエルに對する批判であり、聖マツクスは、マツクス・ステイルネルの著書「唯一者とその所有」への批判である。

第二卷の眞正社會主義への批判は「社會主義的公式と標語とを腐敗したヘーゲル・ドイツ語に翻譯するに満足した所の」眞正社會主義者たるグリユン、ヘツス、リュニング等の批判である。

ブルツセルは、ドイツとフランスへの交通の要所をなしてゐたので、當時多くの社會主義者がここに集つてゐた。

ウイルヘルム・ウオルフ、フェルチナンド・ウオルフ、詩人ゲオルグ・ウエエルト、ヴィデマイエル、ステファン・ボルン、ブルラウ、義弟エドガー・フォン・ヴェストフアーレン、詩人フライリヒラート、エルンスト・ドロンケ、ヘツス、ワイトリング等の大星小星が、マルクスを中心として、ブルツセルに來往した。

ウイルヘルム・ウオルフは、シュレジエンの農民の子として生れ、苦學して大學の課程をおへ、卒業後シュレジア地方に社會主義を煽動し、幾度も迫害され、千八百四十六年ブルツセルに亡命して來た。これからウオルフとマルクス、エンゲルスとの交遊が始まり、後年資本論第一卷が出

版せらるるや、マルクスは多年の交誼に報ゆるために、ウオルフに、それをデイケートした。すなはち、資本論第一卷の冒頭に、「私の忘れ得ざる友、勇敢にして、忠實なるプロレタリアートの貫き闘士ウイルヘルム・ウオルフ（千八百九年タルナウに生れ、千八百六十四年五月九日、マンチエスターに於いて放浪中死去）にさゝぐ」とあるそのウイルヘルムだ。六十四年にウオルフの死んだとき残された彼の遺産は、當時貧乏に苦められてゐたマルクスに贈られた。マルクスが資本論の大著をものし得た蔭にはウオルフのかゝる力があつたことを忘れてはゐけない。後に記すであらうやうにロンドン時代には兩人は共働、交遊した親しき仲である。

ウエエルトは「ドイツのプロレタリアートの最初の、そして最も顯著なる詩人」であつた。デットモルトに生れた。父は監督僧であつた。千八百四十三年、彼はドイツ商館の番頭となつてイギリスのブラッドフォードに行き、そこで、マンチエスターにゐたエンゲルスと知り合つた。千八百四十五年、マルクスとエンゲルスとがブルツセルに住んでゐた時代にブルツセルに來て、勤めてゐた商館の大陸代理店をしてゐた。ここでマルクス、エンゲルスと共に活動した後の「新ライン新聞時代」にもケルンに來て、新ライン新聞の文藝欄を擔當してユーモラスな皮肉な才筆をふるつたが、誹毀の罪を得て、三ヶ月の服役を強制せられた。千八百五十年からスペイン、西インド、南アメリカを旅行し、一度ヨーロッパに歸つて、再び西インドに行き、千八百五十六年、

黄熱病に脳膜炎を併發して、異郷の土と化した。エンゲルスは、ウエルトを評價して、その社會主義的な政治的な詩は、獨創、諧謔、わけても情熱の點に於いてフライリヒラートを凌駕し、ハイネの壘を摩し、たゞゲーテに一籌を輸すばかりである、と激稱してゐる。にもかゝらず、彼の詩集は今日に至るまで、いまだ一冊もまとまつてはゐない。

ヨゼフ・ワイデマイエルは、ウエストフアリア生れで、プロンヤの砲兵中尉であつたが、それをやめて、眞正社會主義者たちの經營してゐたトゥリール新聞に關係してゐた。ブルツセルに來てマルクス、エンゲルスと近づき、その後長く兩人と親交を結んだ。ワイデマイエルは義兄リユニングとともにヴェストフアリアリツシエス・ダンポートを、千八百四十五年から發行して、千八百四十八年まで、始はフイーレフェルド、續いてパデカボルンでつづけた。この新聞には、マルクスもエンゲルスも寄稿した。ドイツチエ・イデオロギーの一部をなすカール・ダリユンの批判はこの紙上に千八百四十七年に發表された。それより前の四十六年七月號には、「ニューヨークに於いてヘルマン・クリーゲにより編輯されるフォルクス・トリビュンに抗して」といふマルクスによる愛の社會主義者クリーゲル批判が發表されてゐる。ワイデマイエルは、千八百五十一年までドイツに住居してゐたが、その年ドイツを去つてアメリカに行き、そこで労働者の組織及び經濟學の普及に力を盡し、「ニューヨーカー・レフォーム」、「ニューイングランド・ツア

イトウンダ」、「ターナー・ツアイリウング」等に寄稿してゐたが、後南北戦争に加はり、千八百六十六年秋死んだ。五十年―六十年代の反動期、マルクスが經濟的にもつとも苦しんだ時代に、このワイデマイエルに宛てたマルクス及びマルクス夫人の手紙は、後年ゾルゲ、メーリングの手によつて集められた。それを見ると、マルクス夫妻は、ワイデマイエルと、すこぶる近しく交つてゐたらしい。また、ブルツセル時代には、ルーゲの邪魔からダス・リテラリツシエ・コントルが、マルクスの著書出版を拒絶したので、ワイデマイエルは、その出版資本、出版所等について、多大の骨を折つた。それは結局うまく行かなかつたが、マルクスのためにつくした親切は、他人の追従し得ざるところであつた。

ポルン及びヴラウは共にドイツチエ・ブルツセル・ツアイトウンダの植字工で、マルクスの運動に加つた。

エドガーは、マルクスの妻ウエストフアレンの弟で、終始してマルクスと共に働きはしなかつたが、姉夫婦の行動を理解し、時にはマルクスの聲明に署名したこともあつた。後アメリカに渡つた。千八百四十七年ブルツセルで生れた長男に、マルクス夫妻は、この愛する義弟の名を附してエドガーと呼んだ。この愛子エドガーは五十五年に、マルクス貧窮の時代に死んだ。

フライリヒラートは、千八百十年デトモルドに生れた。マルクスより八才の兄である。十五歳

まで母都のギムナジウムで勉強した。十六歳の時、病氣の床に横はつてゐるとアイスランド産の苔からつくつた茶を飲まされ、その後で「モース・テール」と題する詩をつくり、近親、友人を驚かせたが、それは土地の新聞ツェステル・ロカールブラットに掲載せられた。彼の詩才はすでにこの頃から頭角をあらはしてゐた。千八百三十一年までゾエステルで商人の教育をうけ、アムステルダムやバルメンで爲替業者に雇はれて働いた。三十八年彼の詩才がみとめられたので、商人をよして、ワイマール、ダルムシュタットに赴いた。四十二年にはプロシヤ王より年金を貰つてサン・ゴアールに行き、そこで詩三昧の生活に入つた。ところが、四十四年詩の形による「告白」を書き、それによつて自由主義をたたへたがために王の年金が取り上げられ、さらに彼の思想がラデイカルとなつたために四十四年ドイツから追放され、先づオステンドに行き、ついでブルツェルに赴き、そこでマルクスと會つた。マルクスは、フライリヒラートがブルツェルに到着したのをきくや、ハイブリツヒ・ビュルガルに向つて、「我々は今日フライリヒラートを訪はねばならぬ。私は、ライン新聞が彼に犯したところを償はねばならぬ。彼の『告白』はすべてを決算した」と言つた。そこで両者は會合した。フライリヒラートは、會つたマルクスについて、「面白い、氣持のよい、謙遜な人」と言つてゐる。この兩名の交際はここでは長くつづかなかつた。何故なら、彼はスキスに行つたからである。しかし、そこも追放せられて、四十六年にはロンド

ンに赴き、ある商館の書記となつた。四十八年、革命起るや「革命」その他一篇の詩をつくりドイツにかへり、デュツセルドルフに住したが、上の詩のために告發された。後免訴にされ、後また詩のために捕はれんとして、オランダに逃げ、更にロンドンに走つた。五十一年までは、マルクスと離れてゐたので、兩者の間には手紙による交際が行はれたが、五十一年以後は、兩者がロンドンに住んだため、親しく交際した。後ドイツに歸り、カンシュタットで、七十六年易簣した。マルクスが最後にフライリヒラートにあてた手紙は千八百六十四年九月一日のもので、それはラツサールの死を悼む文句をもつて充たされてゐる。

ドロンケは、「ベルリンの秘密」なる著書をかいた罪によつて不敬罪に問はれ、二年間要塞に拘禁されてゐたが、脱出してブルツェルに亡命し來つた。

ヘツスは、エンゲルスと一緒に、「ゲゼルシャフト・シユビーゲル」を、千八百四十五年夏から千八百四十六年の夏まで、エルベルフェルドから月刊で出した。この雑誌には、マルクスは、「プーシエ、自殺論」を寄稿した。エンゲルスはその署名による論文は出さなかつたが、ヘツスと共に同誌の編輯に參與した。エンゲルスがマルクスに宛てた手紙に於いて、次のごとく言つてゐる。

『最も新らしいことは、ヘツスと僕とが、四月一日からハーゲンのテイーメ・ウント・ブスカ

ら月刊雑誌ゲゼルシャフト・シュビーゲルを出し、その中に於いて、社會的悲慘とブルジョアジエの支配とを描寫するであらう事だ。趣意書は近いうちに、もし詩的な「手工業者」がその地の悲慘からの材料を我々に送つてくれる勞を執るならば差當り好都合だらう、特に共產主義に對して準備教育さるべきフィリステルに恰好の事例を。記事の編輯は僅かな骨折りで出来る。毎日四ボーゲンを埋めるだけの材料に對しては、寄稿者も十分にあるだらう——我々はその仕事で勞すること少くして多くの効果を上げることが出来る。」

この雑誌は、實際はハーゲンからではなくエルベルフェルドのユリウス・ベデケルから發行された。この雑誌の目的は、時代の社會状態を反映させることであり、同誌のモットーは「無所有大衆の代表と現代社會状態の解明のための機關」といふことであつた。エンゲルスは、署名した文章は寄稿しなかつたが、イギリス、フランス、ベルギー等の社會状態についての通信を、ヘツスとともに書いた。このほか、ブルツセル時代には、マルクス、エンゲルスは、ヘツスといろいろのことで共同の仕事をした。しかしヘツスには、哲學の觀念が抜け切れず、階級闘争の代りに階級の協調、愛を力説する辭がぬけ切れないので、共產黨宣言前後には、マルクス、エンゲルスとの間に意見の相違を來たし、つひに決裂するにいたつた。ドクトル・クラブ時代、アテノイム誌に哲學的論文をのせはじめたから、マルクス、エンゲルスに近づいて、漸次ブルードンから社

會主義、共產主義に入つたが、舊來の觀念的思考からぬけ切れず、つひにマルクス、エンゲルスと決裂した。

ウイルヘルム・ワイトリングがブルツセルに來たのは、千八百四十六年の初であつた。そこでマルクスとの間が阻隔する事件がもち上つた。先づそれを理解するがために、ワイトリングの過去を一瞥しよう。ワイトリングは、あるフランス士官の子供としてマグデブルグに生れ、仕立屋を職業としてドイツ各地をめぐり、千八百三十五年にパリに來り、そこで、サン・シモン、フリーエ、カペー（イカリア旅行記の著者）、キリスト教社會主義者ラメネー、ブランキイ等の社會主義的思想に觸れて社會主義者となり、千八百三十八年には「人類の現在と將來」といふ著書を出して、共產主義的思想を發表した。四十一年スキスに移り、四十二年には彼の代表的著作たる「調和と自由の保障」が出版せられた。マルクスはこの書を激賞した。のち出版した一書のために瀆神罪に問はれて、追放せられてドイツに歸つたが、ドイツ官憲の追及が急で、再び、國外に亡命してロンドンに渡つた。そこに四十六年まで滞在して、同年の初めブルツセルに來り、そこで初めて、マルクス、エンゲルスと接した。ワイトリングは、勞働者出身のすぐれたる才能をもつ社會主義者であつたが、仕立屋出身であつたためか、中世的、ギルド的思想の持主であり、またその社會主義にはキリスト教的臭味が多く、多くの空想的ソシアリストを學んだ結果、空想的

な要素がすくなく存在してゐた。彼はブランキーに影響せられて暴力的革命説を奉じ、その革命の主力となるものは、ルンペン・プロレタリアート、山賊、盜賊等であるとした。これらのワイトリングの思想は、マルクス、エンゲルスのもつてゐる思想とはいちじるしく異つてゐた。この點が、ワイトリングとマルクスとの決裂の根本的な原因であつた。この兩者の争は、四十六年初めの一會合に於ける兩者の激しい論争、ニューヨークでクリーゲの出してゐた「フォルクス・トリビューン」に關する五月の葛藤を契機として發し、つひに兩者の決裂となり、ワイトリングはアメリカに渡り、そこで共產村コンムニアの建設を計畫したが、つひに失敗した。千八百七十一年に死んだ。

ワイトリングとの訣別の序に、ビエール・ブルードンとの訣別をも、ここに記して置かう。

ブルードンは千八百九年、ブザンソン近くに、桶屋と女中との間に生れ、七才から十二歳まで牧牛夫となり、それから印刷工や植字工や校正者となつて全フランスを遍歴したが、三十八年に「古代イスラエル人の日曜作業」についての論文によつてブザンソン大學から賞金をもらひ、それにながくパリに滞在することが出来た。千八百四十年「財産とは何ぞや」を書き、一躍して有名となつた。彼の思想は、無政府主義的色彩を帯びた社會主義と過激自由主義の中間にあつた。彼は私有財産の廢止を主張せずむしろ財産をすべての人にあたへ、それによつて財産の獨占性を

揚棄しようとした。また貨幣と利子の廢止を主張し、その代りに平等な自由な直接な交換の目的をもつ交換銀行を設立すべきを提唱した。彼は強者のため弱者を擄取するの故をもつて資本主義を攻撃すると同時に、弱者のために強者を損ふ故をもつて共產主義をも攻撃した。

マルクスが、ブルツセルに行く前にパリに滞在してゐた時代、ブルードンと交つた。「千八百四十四年、自分のパリ滞在中、自分はブルードンと個人的關係を結んだ。自分はこの時の事情を思ひ出す。長時間にわたる討論、しばしば徹夜までして、自分は彼にヘーゲル主義を注ぎこんだ。

——だが損なことに、彼はドイツ語を知らなかつたので、これを徹底的に研究することが出来なかつた。」後年、千八百六十五年、マルクスはブルードンとのパリ時代の交際について自ら以上のごとく言つてゐる。マルクスが、パリを去つて、ブルツセルに行つてからも、兩者の間には手紙による親しい交りがつづけられた。「神聖家族」に於いても、マルクスは、ブルードンを賞め、擁護してゐる。プロレタリアート出身の思想家として、マルクスは彼を賞讃した。千八百四十六年にマルクスは、ブルードンに手紙を送つて、マルクス、エンゲルスによつて設立せられた英・佛・獨社會主義者秘密通信協會に加入することをすゝめたに對して、ブルードンは、マルクスに批評的な態度をとることを宣言し、「たとへそれが論理と理性の宗教であらうとも、我々は新らしい宗教の使徒たる役割はつとめない」と述べ、従來の革命説をかへり見なくなつた。

元來マルクスとブルードンとの思想との間には、一致しがたい點が潜在してゐたが、ここに至つて、兩者の立場は漸く對立的となつた。

千八百四十六年、ブルードンは、「經濟的矛盾の體系又は貧困の哲學」と題する著書を出版した。これに於いて彼は、現在社會の經濟的矛盾を指摘し、貧困の發生を説き、その解決は經濟關係の善き方面を保存し、悪き方面を除去し、正義の要求する經濟制度を樹立すべきを説いた。階級的組織や鬭争を排し、正義の經濟制度は社會主義によつては實現されず、勞働量に應じて商品交換する、貨幣及び利子なき、需要と供給の均衡をたもつ社會を建設すべきを力説した。

このブルードンの著書に對して、マルクスは、四十七年の夏フランス語で書いた「哲學の貧困」を出版して、ブルードンの思想に對して、辛辣なる批判を下した。マルクスのこの著書についてエンゲルスは言つてゐる。

『本書——哲學の貧困は——千八百四十六年から千八百四十七年にかけての冬、すなはちマルクスが彼の新しい歴史・經濟觀の原理を明らかに頭に描くに至つた時代に、書かれたものである。丁度その頃現はれたばかりのブルードンの「經濟的矛盾の體系、或は貧困の哲學」が、マルクスに對し、それらの諸原理を展開し、その後當時のフランス社會主義者たちの間に一有力なる地位を占むることになるブルードンその人の諸思想に、これを對立させる機會をあ

へたのであつた。二人がパリで經濟上の諸問題について永々と——しばしば夜を徹して——議論してゐた時分から、二人のすゝむ道は段々と離れて行つた。ブルードンの著書が現はれると、すでに二人の間には到底踏え得ない深淵が横はることが明かになつた。沈黙を守ることは不可能であつた。そこでマルクスは、彼がブルードンに對してなしたこの答へに於いて、この取返しのつかない決裂を検證したのである。』

マルクスは、ブルードンの説を、經濟上からと哲學上からとから批判し、そこに、マルクスの完成されたる史的唯物論を展開して、歴史は對立物の發生によつて進化するものであつて、貧困と鬭争を惡と考へ、たゞ絶對的な正義觀から善き方面のみの社會の建設を考へるの誤なるを指摘し、階級鬭争の必然性を力説してゐる。マルクスは、この書の冒頭の序言に於いて、「このやり甲斐のない仕事に於いて、我々がしばしばブルードン君に對する批判を拋棄して、ドイツ哲學の批判をなし、同時に經濟學への展望を與へるのやむなきに至つたことを、讀者は諒とせらるるであらう」と言つてゐる通り、この書の、主なる眼目は、マルクスが從來斷片的に、あるひは未完成的に發表したドイツ哲學の清算と史的唯物論の組織的、系統的完成とに、まとめりをつけたところにある。この論争をもつて、過去のブルードンとの交りも、つひに決裂をもつて終るにいたつた。

以上のごとき活動の外に、マルクス、エンゲルスはまた「ライオン誌」、「ドイツチエス・ピユルゲルブツフ」及び「ドイツチエ・ブリユツセルル・ツアイトウンダ」とも関係した。「ドイツチエス・ピユルゲルブツフ」は千八百四十四年の終りから四十五年の初めに第一巻が出て「ライオン誌」は、千八百四十五年五月に第一巻が出た。共に、ダラムシュタットのレスケ書店から刊行された。社会主義的見地からいふと、後者の方が一層すんだもので、マルクス、エンゲルスとの関係も一層深かつたといはれる。この兩誌ともに、千八百四十六年に出た第二巻だけで終つてゐる。

「ドイツチエ・ブリユツセルル・ツアイトウンダ」は、千八百四十七年の初め週二回の割で、プロシヤの前官吏アダルベルト・フォン・ボルンシュテットによつて發行された。この男は、その前身よりしてスパイであるとの嫌疑が、多くの社会主義者によつてかけられてゐたが、マルクスは、「機会を逸せぬ」ために、之を利用せよとすゝめた。従つて、この新聞には、マルクスもエンゲルスも多くの論文を寄稿してゐる。當時に於いては、經濟上の理由からと、政治上の理由からとのために、ブルツセルに集つた社会主義者たちは、出版したり寄稿したりすることは困難であつた。「哲學の貧困」のごときも、印刷費を支拂ふといふ條件のもとに、初めて出版されたのである。かゝる言論發表の困難にせまられてゐた當時だから、マルクスが、公的活動の舞臺として

て提供されたこの新聞の機會を利用することを決心したのであつたのであらう。

ブルツセル時代のマルクスを語り來つて、今や彼の實踐的運動、共產主義全盛に於ける活躍、共產黨宣言の執筆をとくべき順序となつた。思想的に、完成し來つたマルクスが、いまや實踐的活躍の舞臺に立ち、社会主義の聖書といはれてゐる共產黨宣言によつて、世界のプロレタリアーに呼びかけるしんげんなる時期を描寫すべき段取りとなつた。

マルクスを中心として、當時ブルツセルに多くの社会主義者たちが集つたことは、前に述べた通りであるが、マルクスはエンゲルスと一緒に、ウイヘルム・ウオルフやステファン・ボルンたちとともに、労働者教育協會を組織して、労働者の教化につとめ、マルクス自ら經濟學を講じた。マルクスは、この團體を基として、國際的な結合を作らうとした。その結果、千八百四十六年の秋には、通信委員會が作られ、本部はブルツセルに、支部はパリとロンドンとに作られた。パリ支部については初めマルクスはブルードンの力を藉りようとしたが、結局エンゲルスが千八百四十六年にパリに行き、そこで同志の獲得につとめた。ロンドンにはカール・シヤベル、ハインリッヒ・パウエル、ヨセフ・モル等が中心となつてゐた。かゝる組織によつて、フランス、ドイツ、イギリス、スウェーデン等の共產主義的團體を一つの國際的團體にまで作り上げようとした。

千八百四十七年の一月末、この通信委員會のロンドン支部のモルは、ブルツセルに來つてマル

クスに會ひ、ロンドン支部の情勢を傳へ、さらにパリにエンゲルスを訪ねた。モルの訪問によつて、ロンドンの形勢を知つたマルクスは、ブルツセル委員會に、ロンドンで大會を開く提案を可決せられた。そして同年六月にロンドンで大會が開催せられた。「僕はロンドンへは行けない、資力がそれを許さないのだ。だが、我々はウォルフをやり度いと思つてゐる。さうすれば、君等二人が行けば十分だらう」。マルクスはエンゲルスに、かく言つてゐる。それで、ウォルフはブルツセルを代表し、エンゲルスはパリを代表して、ロンドンの大會に出席した。この大會には、小數の代表者しか出席しなかつたが、この大會によつて、通信委員會は、義人同盟の人たちと合同して、こゝに共産主義者同盟が結成せられた。(共産主義者同盟については、エンゲルス自身「共産主義者同盟の歴史」と題する文章を、マルクスの「ケルン共産黨訴訟事件の闡明」のなかでその序文として書いてゐる。)

こゝで一寸、義人同盟について、若干の解明をしよう。

千八百三十四年に、パリ亡命中のドイツ人たちは相集つて、亡命者同盟をつくつた。千八百三十年の七月革命はドイツにも波及し、各地に暴動を勃發せしめ、この暴動は鎮撫されたが、それより後も、いたるところに、自由に對する熱望が事あるごとに、動亂の形式をもつて現はれた。千八百三十二年の南部バイエルンのパラチナーテ州に反抗が發生し、多くの知識階級や前に述べ

たベルネヤ、労働者にしてアチテーターであるヨハン・フィリップ・ベツケル等が一大集會を催して、ドイツの自由をさげんだ。これ、ハンバツハの宴會として知らるゝ事件である。つづいて千八百三十三年四月三日にはフランクフルト事件、フランクフルテル・ブツチュンなるものが勃發した。これはカール・シャベルはじめ労働者學生がフランクフルトの兵營を襲撃した事件である。この二大事件のほか、ドイツの各地方に同様なる叛亂が各所に起つた。その結果、それらの叛亂に加はつて、國外に亡命、追放せらるる者が非常に増加した。フランス、スキスは、これらドイツ亡命者の集つた所である。ハイブリツヒ・シュミットの「スキスに於けるドイツ亡命者」には、これら亡命者が如何にかつたかを、我々に知らせてゐる。亡命者同盟は、パリに於けるかゝるドイツ亡命者によつて組織されたもので、この中には、社會主義派と然らざるものとが對立し、前者を指導したのが、前ゲツティンゲン大學のテオドル・シュヌステルであり、結局この派が同盟内に勢力を得、千八百三十六年、亡命者同盟を解體して、義人同盟を新たに結成し、これには、シャベル、パウエル、ワイトリング等が有力なる地位を占めた。所が千八百三十九年にブランキ一派が、パリに一揆を起したが、義人同盟の人たちも、これに加はつたがために、政府の壓迫をうけて、ワイトリングはスキスに、シャベルとパウエルとはロンドンに逃げて、義人同盟は解散し、その一部のもものがロンドンに小團體を組織した。ロンドンに逃げたシャベルその

他の人たちは、そこに「ドイツ労働者教育協會」を設立し、さらにドイツ人のみならず他國人も包含した「共產主義的労働者教育協會」にまで發展せしめた。この舊義人同盟のロンドン在住者は、マルクスがブルツセルに本部を設けた通信委員會のロンドン支部を形成し、ブルツセルにマルクスを訪ねたモルは、シヤベルのマンダートを携へて來たのである。前にのべた、ロンドンに於ける四十七年六月の通信委員會第一回大會では、この通信委員會は、ロンドン在住のこれら義人同盟の亡命者と結合して、共產主義者同盟を結成したのである。

こゝで「共產主義者同盟」の設立に努力したシヤベル、パウエル、モルの三人についてのエンゲルスの記述を摘録しやう。「シヤベルはナツソオのワイルブルグに生れ、一八三二年ギイセンに一林學生の身を以つて、ガオルグ・ブヒニアアの起した陰謀の一員となり、一八三三年四月三日フランクフルト警察署襲撃に参加し、外國に遁れ、一八三四年二月、マツチニのサヴワ一揆に参加した。果斷にして精力絶倫の偉丈夫、ブルジョアの生活と生命を賭する覺悟を有する彼こそは、既に三十年代の活躍の示す如く、眞に職業的革命家の典型であつた。思索に或種の鈍重氣味はあつたが、さりとして、彼が理論的洞見を缺いて居なかつた事は、既に彼が「煽動家」から共產主義者に進轉した一事に徴しても分る。そして一度認識したものを愈々頑強に固執した、だからこそ彼の革命的情熱は屢々彼の理論と共に貫流した。然しながら彼は常に自己の非を悟り、率直

に告白した。彼は男らしい男であつた。彼がドイツ労働運動の建設に盡した業績は永久に忘れられないであらう。ハインリッヒ・パウエルはフランクン生れの製靴工で、元氣で、快活で、才氣に富んだ小男であつたが、其小軀には又狡猾と決斷を藏してゐた。モオルはケルン生れの時計工、中文のヘルクレス——彼とシヤベルとは、實に度々、數百と押寄せる敵に對して、本據を固守して勝利した——精力と果斷との點では、尠くとも兩人に劣らず、精神的には是等の兩人に優つてゐた。彼の多くの宣傳旅行の結果に徴しても分る如く、彼は生來の外交家たるのみならず亦理論的洞見にも疎くなかつた。」

この大會の決議としては、共產主義同盟の目的を明確に定めて、ブルジョアジの打倒、プロレタリアートの獨裁、無階級、無私有財産社會の建設としてゐる。又組織についても詳細なる規約を設け、同盟の機關紙を發行し、秋十一月には第二回の大會をロンドンに召集することを決した。そして、各地の支部は、同盟の間答體的な綱領の草案をつくつて來ることを決議した。

この第一回大會後、ブルツセルにも、「ドイツ労働者協會」が設立された。この協會は、その後「民主主義協會」となつて、ロンドンにある「友愛的民主主義協會」と結んだ。マルクスは、副會頭に選任せられた。イギリスにある友愛的民主主義協會は、チャーティスト運動の大立物ハリーネイとアーネスト・ジョーンズ、シヤベル、モル等によつて指導せられ、十一月九日、千八百

三十一年のポーランド革命の記念祭が行はれることとなつたので、マルクスはベルギーの民主主義協會を代表して出席するかたわら、共産主義同盟の第二回大會にも出席するために、ブルツセルを出發してロンドンに渡つた。

これよりさき、第一回大會の決議によつてエンゲルスは、問答體の「共産主義原則」を書いた。これは、二十五の問答よりなり、共産主義とは何か、にはじまり、現在の共産黨以外の諸政黨對共産黨の關係は如何、に終つてゐる。その中には、プロレタリアの性質、産業革命、恐慌、新社會、革命等の共産主義に對する原則が、エンゲルスの簡潔にして平明なる筆によつて示されてゐる。エンゲルスは、マルクスに宛てて書いてゐる。

『綱領を、是非、すこし熟考しておいて呉れ給へ。僕は、問答體の形式をすてて、これに共産黨宣言といふ名をつけるのが一番いゝと信ずる。その中には多少歴史が述べられなくてはならないのだから、今までの形式はいかにも不適當である。僕は、僕の作つて置いたこちらのをもつて行く。これは簡単に叙述してあるが、大急ぎで書いた貧弱なものである。僕は、共産主義とは何ぞや？ に筆を起し、すぐそれに次いで、プロレタリアート——その發生史、以前の勞働者との差異、プロレタリアートとブルジョアジーとの對立の發展、恐慌、結論といふ順序で書いてゐる。そのあひだには、各種の附屬事項、そして最後には、一般に公開すべき性質を有

する限りに於いて、共産主義者の黨の政策を述べた。こちらの綱領は、まだ全く裁定を求めらるるまでには至つてゐない。しかし二三の極めて細目の點に至るまで、せめて我々の見解に接觸するやうなところが少しもないやうに、仕上げようと思つてゐる。

この「原則」をたづさへて、エンゲルスはオステンドでマルクスと落合ひ、ともにロンドンに向つた。

マルクスは、十一月二十九日、友愛的民主主義協會のポーランド革命記念祭に出席し、一場の演説をなし、さらに、共産主義者同盟第二回大會に出席した。大會は十一月二十九日から十二月八日までつき、大に議論が闘はされた。その結果、共産主義者同盟の名に於いて、マルクスに共産黨宣言を起草することが委囑せられた。マルクスは承諾した。

マルクスとエンゲルスは、大會終了後、相携へてブルツセルに歸り、エンゲルスはそこでマルクスと別れてパリに歸つた。

千八百四十八年一月の末、共産主義同盟からの催促をうけて、宣言を起草し、二月革命の直前に印刷せられて、ドイツ語でロンドンから發表せられた。それが有名なる共産黨宣言である。

「一つの怪物がヨーロッパを横行してゐる。共産主義の怪物が。」に、はじまつて、「プロレタリアは、その鎖の外失ふべき何も持たぬ。彼等は得るべき世界を有つ。全世界のプロレタリア

團結せよ！」で終つてゐる。この宣言は、ブルジョアとプロレタリア、プロレタリアと共産主義者、社會主義的、共産主義的文獻、諸種の反對政黨に對する共産主義者の地位の四章より成つてゐる。この短い、だが力強い文章のうち、マルクスとエンゲルスが、この時にまで到達し得た理論と實踐の原理が、コンデンスされてゐる。リヤザノフは、「この宣言は、エンゲルス及びマルクスが千八百四十五年から千八百四十七年にいたるまでに爲し遂げた、あらゆる科學的研究の結果を具體化したものだ」と言つてゐる。エンゲルスも、この宣言には、幾度かマルクスと相談して、その完成を助けてゐる。「この宣言は、二人の合作ではあるが、予はその眞核をなせる根本の提案が、マルクスのものであることを明言する義務がある」と言明してゐる。

第一章の「ブルジョアジーとプロレタリアート」に於いては、「從來すべての社會の歴史は階級闘争の歴史である」ことを冒頭に斷言し、從來の階級闘争を略述し、次に資本主義の發生と、それに伴ふブルジョアジーとプロレタリアートの對立を述べ、「ブルジョアジーが封建制度を打破した武器は、いまや自分自身に向けらるるに至つた。ブルジョアジーは自己を倒す武器をつくるのみでなく、この武器をつかふ者すなはち近代労働者、プロレタリアを作つた」と言ひ、この兩者の闘争は、今や革命にまで達して、ブルジョアジーの崩壊にまで至つてゐることを力説してゐる。

第二章の「プロレタリアと共産主義者」に於いては、共産主義者と一般プロレタリアートと如何なる關係にあるか、共産主義者は何を主張するか、について述べてゐる。

第三章の「社會主義的・共産主義的文獻」に於いては、封建的社會主義、プチ・ブルジョア社會主義、眞正社會主義、保守的社會主義に對する批判が展開されてゐる。

第四章の「諸種の反對政黨に對する共産主義者の地位」では、他黨に對する共産黨の性質を特記し、共産黨は、社會的・政治的現狀に反抗する共産主義者を組織し、プロレタリアートの團結及び一致に努力するものなることを斷じてゐる。

歴史的文書たるのみならず、今尚ほ賑々たる生命を有するこの宣言は、世界各國語に譯さられて、世界のプロレタリアートに呼びかけてゐる。

この「宣言」發表後、數日ならずして、千八百四十八年の二月革命が勃發して、社會動亂が再び始まつたのである。

マルクスには、以上の外、ブルツセルのドイツ労働者教育協會での講演、四十八年一月ブルツセルの民主主義協會でなした自由貿易に關する講演。「保護貿易について」の講演等の草稿が、殘存して、今日發表されてゐる。

二月革命の勃發と共に、マルクスのブルツセル時代は終る。舞臺は再びパリにうつる。」

第六章 千八百四十八年二月革命前後

千八百三十年の七月革命は、ブルボン王朝の代りに、ルイ・フキリツプを王とするオルレアン王朝を擁立した。ルイ・フキリツプは、新興ブルジョアジーの要望を納れて、多くの自由主義的政策を行つた。しかし、千八百十五年のウキーン會議以來世界を風靡したメツテルニヒの専制主義は、やうやくフランスにもその魔手を延しはじめた。千八百三十九年のブランキ一揆の失敗後は反動主義的抑壓政策を行ひ、千八百四十年には、ギゾー内閣が組織せられて、ますます専制主義を斷行した。議員たる資格は、國稅二百フラン以上を納むるものに限られ、大部分の民衆は政治上の權利すら與へられず、不平、不満がパリに充満してゐた。時たまたま、千八百四十七年には、十年目の大恐慌がヨーロッパを襲つた。鐵道の濫設、アイルランドの馬鈴薯收穫の饑饉、アメリカの棉花不作、イングランドの農産物不作が主たる原因をなし、ヨーロッパを恐慌の中に陥し入れた。「千八百四十七年この恐慌に於いては我々は以前よりも遙に明瞭にこれらの商業動亂の國際的な殆ど世界的の跡を見出し得るのである。パリやアムステルダムやニューヨークはす

べて千八百四十年のこの中心的なイギリスの恐慌の波動をうけ、ヨーロッパ大陸に於ける千八百四十八年の政治的大革命運動は、その發源地をロンドンの騷擾に有してゐた經濟的地震の衝擊によつて先驅せられたのである。商業的店舗ばかりでなく、工業會社の破産が之に隨伴した。大なる鐵道熱を除いた以外のイギリス商業界に混亂を惹き起さしめた原因と同一のものが、大陸に於いても今や明瞭に働き出しはじめた。(ハイドマン、第十九世紀の商業恐慌、八木澤善次君譯文による。)その結果、破産、生産の制限、停止等が行はれ、失業群が大量的に發生した。これは、パリにも同じ結果を呼び起した。貧富の懸隔甚だしく民血の怨嗟は、やうやく動亂にまで發展する傾向を見せた。ルイ・ブラン、ピエル・ルルー、ブランキイ等の社會主義者が、これに乗じて活動した。ルイ・ブランは、千八百二年マドリッドで生れ、スペイン、コルシカ、パリへと移住し、千八百三十年の七月革命には父が破産して倒れたので、一轉して社會主義者となり、「ボン・サン」誌を編輯し、「進歩評論」により急進民主主義を主張し、千八百三十九年には、代表作「労働の組織」を出し、政府の國民工場經營と、労働者の利益均分とを主張し、プロレタリアートの間に勢力を占めた。ルルーは、千七百九十八年労働者の子として生れ、一時サンシモニストに加はり、後ヒューマニズムの上に立つ社會主義を主張し、千八百四十三年には「社會評論」を出した。二月革命には大に活躍した。アウギユスト・ブランキイは、千八百五年の生れで、生

れながらの革命家、煽動家で、千八百二十七年、千八百三十九年の兩度にパリに暴動を起こし、四十八年の革命直前に出獄したが、革命とともに、パリに中央共和主義者委員會を組織し、再三捉へられて、コルシカの監獄に十年つなされた。

かゝる社會的情勢である上に、政治上では、帝政に反對するブルボン黨、共和黨、社會黨が活躍し、他方にはルイ・フィリップを排してナポレオンの姪ルイ・ナポレオンを擁立せんとするナポレオン黨があつて、現在の支配者を廢せんとする氣勢が盛であつた。加ふるに、フランス外交の失敗相次いだがために、ギゾー内閣の信は全く地に墮ちた。千八百四十八年二月十一日、選挙法改正案が議會で否決せられ、そのために憤慨した民衆はパリに大宴會を開催して、反對の氣勢を上げんとしたが、中止を命ぜられたので、それを動機として革命が勃發した。

千八百四十八年二月二十三日、市民蜂起して、市街戦を起し、「革命萬歳！」「ギゾー打倒」を叫んで、二十四日には、パレー・ロワイアル、チュレーリー王宮を襲撃したので、ギゾーは内閣を逃げ出し、王ルイ・フィリップは國外に逃亡した。そこでラマルティヌが假政府を組織し、二月二十七日共和政治を宣言し、新議會、新選挙を宣明し、ルイ・ブランが同志アルベル、ロランとともに假政府に一員として入り、彼の年來の主張たる國民工場を實施した。新議會は、選挙の結果招集せられたが、社會黨少く、ブラン計畫するところの國民工場の閉鎖を斷行したので

労働者は憤激し、議會の解散と工場の再開とを動亂を以て主張したが、假政府は陸軍大臣カヴァニアツクをして、六月二十四日から三日間にわたつて、パリのプロレタリアートの蜂起を弾壓せしめた。これ、六月革命といはるところのものである、カヴァニアツクは、パリの數千のプロレタリアートを虐殺して、この革命を漸く「鎮壓」した。

十一月四日、新憲法が判定され、大統領の統制による共和政治が施行せられ、自由、平等、友愛がモットーとされた。

これが、バリーに於ける千八百四十八年の革命の素描である。パリのこの叛亂は、ヨーロッパ全土に影響を及ぼし、各國に動亂を繼起せしめた。

二月革命の勃發は、當時反動の本據オーストリアにも大なる影響を及ぼし、三月十三日、ウィーン市民及び大學生等が立つてメツテルニヒ打倒、豫算の公表、出版の自由、市制の改革、議會の改組を主張して叛亂を起し、メツテルニヒはハンノーヴェルからイギリス方面に逃げ、皇帝フランシス一世もウィーンを脱出して、インスブルックに難を避けた。

ハンガリーでは、ルイ・コツストの獨立運動が、三月三日よりおこり、オーストリアよりの分離・獨立、諸種の自由権の獲得を主張し、農奴の解放をさげんで、オーストリア皇帝をして、それらを認識せしめた。ボヘミアにも一揆が起つた。

オーストリアの革命化、反動獨裁者メツテルニヒの亡命は、當時その勢力下にあつたイタリア諸地方、ヴェネチア、ミラノ、サルジニアその他の地方をしてオーストリアの桎梏より解放する運動を誘發した。その他、法王領、トスカナ、ナポリ、シチリヤ等の地方にも自由主義運動が旺盛として起つた。

ドイツにも二月革命の波は急速に擴延した。ベルリンはじめバーデン、ウエルツテンベルグ、サクソニヤ、バイエルン、ハノーヴェル、ヘッセ、ダルムシュタット、カッセル、ケルン地方にも自由をさげぶ暴動が勃發した。

「ナツサウには、完全な革命がおこり、ミュンヘンでは學生と畫家と労働者とが完全なる暴動を起し、カッセルに於いては革命が戸口に迫り、ベルリンには際限もない不安と狐疑逡巡とがあり、全西部ドイツでは出版の自由が宣言された、さし當りは充分だ」。三月九日、エンゲルスは、マルクス宛の手紙で、ドイツの情勢を以上のやうに報告してゐる。

ドイツ皇帝フリードリッヒ・ウイヘルム四世は、この社會的情勢に當面して、三月十八日、憲法政治と聯邦議會の開設とドイツ統一運動とに對して認諾をあたへざるを得なくなつた。南部ドイツでは、ドイツ自由派が、フランクフルトに會合して、自由主義による憲法制定を議した。

以上の諸國のほかに、スハスは聯邦政治となり、オランダは暴動によつて民主的憲法を獲得し、

ポーランド、ガリシア、ボヘミア地方にも自由獨立運動が起つた。

パリに投ぜられた二月革命の石は、かくして、イギリスを除いた、ヨーロッパ諸國に、旬日ならずして、大なる動亂の波紋を及ぼした。かれらの革命、暴動は、自由の獲得、憲法の制定、獨立を標榜したブルジョア革命の性質をもつたが、これらの運動には、すでに成熟して來たプロレタリアートが各所で重大なる役目をつとめ、このブルジョア革命をプロレタリアート解放に利用せんとした。

かゝる大範圍にわたる革命的動亂は、マルクス、エンゲルスの活動に、いかなる舞臺を供給したか。

パリ市民の武裝的蜂起がロンドンに傳はるや、共産主義同盟は、ブルツセル支部に萬全の策をとる權限をあたへたが、ブルツセル支部は、この權限をマルクスに與へた。

ところが、そのころ二月革命はすでに、ブルツセルにも波及して、そこでも民衆の暴動が勃發した。國王レオポルドは、一方自由主義的な大臣、議員等に、民衆が欲するならば、退位してもよいと約束しながら、他方では戒嚴令を施行し、軍隊と警察力とをもつて、叛亂を彈壓した。そして、自由主義を標榜してゐた手前プロシヤ政府よりのマルクス國外追放を拒絶してゐた王レオポルドも、この時にいたつて斷然、マルクスとウオルフを國外に追放せんとした。

三月三日、ブルツセル支部の五人のものが集合して、マルクスに全權を與へたが、その會の散會するのを待つて官憲はマルクスを捕縛し、さらにマルクス夫人をも捕へて、一晚を留置場に留置した。これより先、パリにフェルディナンド・フロコンなる人物がゐた。フロコンは、千八百年の生れで、千八百三十年の七月革命當時はブニシェーとともに、「人民の友協會」を設立したが解散を命ぜられた。更に新聞「改革」を發刊した。これには、ミハエル・バクーニンが編輯長であつた。この新聞には、エンゲルスも寄稿したり、關係したりしてゐた。エンゲルスがマルクスへの手紙の中にも、レフォルムやフロコンのことがしばしば出て來る。「フロコン親爺と一緒」に、僕も盛に活動してゐる。……フロコンは私用のために僕にチャーティズムに関する論文を一つ書かせようと思つてゐる。……僕はすぐ彼のところへ行つて益々彼を我々の網の中に引つ張り込んでやらう。要するに、フロコンは、共産主義に理解を有する自由主義者であつたらしい。このフロコンが、二月革命の勃發とともに、共和民主黨を代表して、ルドルユ・ロランとともに假政府に加はつた。このフロコンが、ブルツセル在住のマルクスにあてて、舊政府時代の法令は無効になつてゐるから、パリに來いと通知してゐる。ブルツセル官憲に捕縛されて、一晚留置されたマルクスは、これを考へて、翌日早速パリに赴いた。マルクス夫人も、ウオルフも亦、ブルツセルを追放された。

ブルツセルに於けるマルクス及び夫人の捕縛は、かなり無法であつたので、市民のうちに多くの憤慨を起させたらしい。エンゲルスはマルクスへの手紙の中で、次のように言つてゐる。

『日曜日の晩、ジョットランは君と君の奥さんとの問題を、民主主義協會で話した。僕はおくれて行つたので、この話をきゝそこなつた。そしてたゞべールランの激怒した亂暴な言葉を若干聞いただけであつた。チゴイも話をした、そして話は結局同じところに歸着した。ルブリナ―はこの問題についてエマンシバシオンに一つの論文を載せた。當地の辯護士は激怒してゐる。マインツは、この一件を告發し、且つ君を家宅侵入等々の罪によつて民事告訴人たらしめようと欲してゐる。チゴイも告發すると言つてゐる。政府は奴（マルクスを捕縛した官吏のこと）は免職されるだらうと言ひふらさせてゐるが、それが實行されれば非常に結構なことであらう。カステイオーは、この問題に關して政府に質問するために、昨日マインツから必要な書類の供給をうけた。この質問は、明日か或ひは明後日かに行はれるだらうと僕は考へてゐる。この件は大きなセンセーションを起して、ドイツ排斥の感情を和げる上に役立つた。

ルプス（ウイルヘルム・ウオルフのこと、マルクスとともにブルツセル追放をうけた）は、この前の日曜日の朝十一時に、汽車に乗せられ、ヴァランシエンヌに運ばれた。……彼はまたそこに居るだらう。彼は一度も裁判所へは引つ張り出されなかつた。彼の物を押収するために

奴等は一度も彼を家に連れて行かなかつた。——奴等は僕には一向手を觸れなかつた。奴等のもらした口吻から察すると、奴等は僕を追放することに尻込みしてゐる。何故かといふと、奴等は、あの時僕に旅券を與へたからであり、この點が彼等に對して主張されるかも知れないからである。……君を襲ふた警部補はもう免職になつたといふことだ。あの事件は當地の小ブルジョアの間に非常な憤激をかましたのだ。』

この手紙は、三月九日で、ブルツセルから出されてゐる。エンゲルスは、その時ブルツセルに居たのだ。

パリに來たマルクスは、共産主義同盟の命によつて、そこに、「中央委員會」を組織し、その會長にマルクス、書記にはシャベルが選任された。ジョーンズ、ハーネー、シャベル、パウエル、モル等がそこに集まり、ヴァルラウ、ウオルフ、エンゲルスもそこに集つた。三月六日、パリにゐる、ドイツ人たちがパリにドイツ人大會をもよほし、それによつて、ドイツ軍隊を編成してドイツに侵入して、ドイツ革命を斷行しようとした。ゲオルグ・ヘルヴェグ、ボルンシュテット、ボエルンシュタイン、バクーニン等が、その計畫の立案者であつた。當時のパリにはイタリー、スペイン、オランダ、ポーランド、ベルギー等の諸國の亡命者が集まり、それらが同國人を聯合して、二月革命の機運に乗じて、母國解放運動を興さんとしてゐた。フランスの假政府は、かか

る各國の亡命者をパリから追拂はんとして、これらの革命軍に、行軍費と日當五十サンチームとを供することを宣言した。ヘルヴェグの計畫は、このフランス假政府の計畫に乗るやうなものであつた。また、ヘルヴェグとボルンシュエットとは、マルクス等の共産主義同盟に對して、黒・赤・金同盟(昔のドイツ國旗を標榜したもの)を組織した。

マルクスは、このヘルヴェグ一味の計畫に反對した。かかる試みは、却つてドイツの革命を妨害し、また在パリのドイツ人を一まとめにしてドイツ官憲に手渡すやうなものだとして、斷然反對した。ヘルヴェグは、この忠告をいれずして、自己の計畫を斷行したが、政治的見解を有たぬこの暴舉は、つひにニーダードツセンパツへの潰滅となつて、マルクスの豫言の正しさを、事實をもつて證明した。

さきにパリに設立した中央委員會は、この革命的情勢に面して、殊に三月三日のケルンのゴツトシャルク、ウイリヒの騒動、ベルリン三月十八日の動亂に面して、十七條より成るマルクス執筆の「ドイツの共産黨の諸要求」を發表した。この諸要求を略述すると、

- (一) ドイツの統一的共和國
- (二) 普通選舉權
- (三) 議員の有給制

- (四) 國民皆兵
- (五) 司法の無料
- (六) 封建的負擔の廢止
- (七) 封建的領地、鑛山、鑛坑の國有
- (八) 農民地への私的抵當權の國家への移轉
- (九) 地代、手附金は租税として國家へ支拂
- (十) 銀行の國有
- (十一) 運輸手段の國有化
- (十二) 官吏俸給の平等
- (十三) 政教分離
- (十四) 相續權の制限
- (十五) 強度の累進税と消費税の廢止
- (十六) 國營工場、勞働者の生活保證
- (十七) 國民教育の無料

この要求の最後に委員として、左の諸氏の名がかかけられてゐる。

カール・マルクス、カール・シャベル、ハア・パウエル、エフ・エンゲルス、ヨット・モル、
ヴェ・ウオルフ。

この要求によつて、當時の共産主義理論が、ドイツの現實に對して、いかなる要求となつて具體化したかを、明瞭に知ることが出来る。

マルクスは、ドイツ亡命者が、一かたまりとなつてドイツに入るヘルヴェグの計畫には反對したが、個人個人がドイツに入つて、そこで革命のために働くことをすすめた。そのために、彼は同志とともに、「ドイツ共産クラブ」を組織し、假政府の一員たるフロコンと相談して、彼等に對して、旅費の補助をしてやることにした。その結果、三四百のドイツ人がドイツに歸つた。中には、共産主義同盟に屬する人たちもゐた。

かくして、パリにゐた外國人の四分の三は本國に歸つて、各地に散在し、住所も不定となつたがために、同盟としての連絡、指令の通達等は困難となつた。シャベルはナツサウに、ブレンスラウではウオルフが、「華々しい活躍をし、フランクフルト議會の議員として、またシュレジエン全權の地位を得た」。かくつて、ブルツセル及びパリで、同盟員として活躍した植字工、シュテファン・ポルンは、ベルリンに『労働者親交會』を設立したが、相當傳播し、千八百五十年まで

存続した。……千八百四十九年の五月のドレスデン一揆にも彼は參加したが、幸に遁れた。……ベルリンの反動政府は、千八百五十年になつて、同會を抑壓した。」かくの如く同志が各地方に散つたために、同盟としては、有機的な、統制的な行動をとることが困難となつた。ポルンは、マルクスに言つた。「同盟は解消した——同盟は至る所にあり、しかも何處にもない」といふ意味は、同盟は各所で活動してゐるが、同盟自體の組織としては、活動してゐない事實を示したのである。

マルクスは、ドイツの他の地方に行かず、ラインランドのケルンに行つた。古き「ライン新聞」時代の友人ゲオルグ・ユングは、マルクスに故郷トリエールかバルメンに行くことをすすめたが、マルクスはそこへ行くを欲しなかつた。ベルリンに對してもマルクスは何等執着をもつてゐなかつた。彼が、ラインランドを選んだのは、同地方がドイツで一番ブルジョアジー、従つてまたプロレタリアートのすすんでゐた土地であり、ケルンはその地方の中心であつたからだ。マルクスは、新聞をやらうと思つてゐたが、彼の欲する新聞は、ケルンを除いた他のドイツの地方では、全く不向であつた。マルクスがケルンを選び、四月上旬家族とともに同地に向つてパリを去つたのは、かかる事情にもとづくのである。

マルクスは、ケルンで、創刊準備中の新聞を獲得して、六月一日から發刊した。これ「新ライ

「新新聞」である。發刊に當つて、株主を得ることが困難であり、エンゲルスのごときは、故郷のウツペルタールの有福なる工業家を探したが、仲々うまく行かなかつた。しかし、マルクスの手紙によると、四月中旬には、かなり多くの株主の署名を得たことが判る。新ライン新聞の編輯は、主筆としてマルクス、編輯員としては、兩ウオルフ、ウエエルド、ドロシケ、エンゲルス、プエルゲルス、フライリヒラートが加はつた。フロコンは、マルクスとエンゲルスに對して、新ライン新聞の資金の寄附を申出でたが、マルクスは、ドイツ人として、たとへ親交あるもフランス政府から金をもらふのは潔くないとて、フロコンの申出を拒絶した。

新ライン新聞は、民主主義的機關紙であつた。ケルン地方は労働者の力が弱いので、マルクスは、民主主義的な機關を利用する策をとつた。しかし、マルクスは民主主義者として、新ライン新聞を編輯したのではなく、あくまでも共産主義者として入社したのである。新聞は六月一日より發刊し、マルクスは毎號ほとんど執筆した。そして、現下目前で行はれてゐる社會事象に對して、峻辣なる批判の筆をとつた。六月のカヴエアツクのバリプロレタリアートの虐殺、フランクフルト議會等々に對しては、「デモクラシーの機關」たる新ライン新聞らしくなく、共産主義的立場からの辛辣なる批判をこころみた。そのために、多くの株主を失つたと言はれた。

六月バリーに於ける、反動のプロレタリアート弾壓の成功は、各國にも反動の勢力を盛ならしめ

た。新ライン新聞に對する壓力も加はり、九月には、二週間にわたつて發行が停止せられた。十月十二日復活して再刊せられた。反動軍の盛り返へしは、十二月一日のウィーンの陥落、十二月六日のベルリン國民議會の解散等によつてますます盛となり、その間に處してブルジョアジーの態度は怯懦をきはめ、背面よりは専制主義者、前面よりはプロレタリアートの攻撃をうけ結局、専制主義の爲に働く役目をつとめた。マルクスは、前に述べたやうに、民主主義的組織を利用せんとして、新ライン新聞により、いまだ封建的社會關係を有する社會を先づブルジョア民主化せんとし、そして共産的運動の地盤を作らんとした。「マルクスの新聞には、労働階級の要求に直接關係した問題は極めて稀であつた。この新聞はほとんど全く、政治的熱情を激發することにのみ宛てられ、そして、ドイツをば廢れた封建的のあらゆる遺物から一舉に解放するやうな民主主義的革命軍を創造するための煽動にのみ宛てられた」のである。(リヤザノフ、マルクス、エンゲルス傳、長谷部氏譯)。したがつてマルクスは、ブルジョアジーの民主主義者には、かなりな期待をかけたものであるが、いま、反動軍の勃興に際しての民主主義者の怯懦なる態度を見て、從來の考へ方を全然改めて、民主主義者に期待する態度をすてて、もつばらプロレタリアートに訴へることにした。この態度は新ライン新聞の上にもあらはれた。「賃労働と資本」とが、千八百四十九年四月四日から新ライン新聞に連載されて、資本と労働とが對立關係にあることを明確

に論述した。この「賃労働と資本」は、もとブルツセル時代に、ドイツ労働者教育協會でなした講演の臺本であり、新ライン新聞では終了しないうちに發刊が中止された。この論文に於いて、マルクスは從來新ライン新聞が資本と労働との對立を何故に明確にしなかつたかの理由を説明した。その部分を左に摘記しよう。

「我々は、諸方面から非難されてゐる。我々は現今の階級闘争と國民闘争との物質的基礎をなす所の經濟關係を説明してゐないと。然し我々は、計畫的に、——その關係が直接、政治上の衝突を引起した場合にのみそれに觸れたのであつた。

それには、何よりも先づ、現在の歴史に於ける階級闘争を究明する事、そして現在の、且つ日々新たに作りだされる所の、歴史的材料によつて、次の諸事を實驗的に證明する事が必要であつた。即ち「二月」と「三月」を現出させた所の、あの労働階級の抑壓と共にその労働階級の敵手——フランスのブルジョア共和主義者、全ヨーロッパ大陸に亘つて封建的専制主義と戦つて居た市民階級及び農民階級——も亦同時に撃破された事、フランスに於ける、あの「品格ある共和制の」勝利はまた同時に、勇敢なる獨立戦争を以つて二月革命に答へた所の諸國民の政北であつた事、最後にヨーロッパは、革命的労働者の屈服と共に、その昔の二重奴隸制、イギリス式——兼——ロシア式奴隸制度に逆戻りした事。

パリの六月戦争、ウィーンの陥落、一八四八年十一月のベルリンの悲喜劇、ポーランド、イタリー及びハンガリーの死物狂ひ、アイルランドの大饑饉——これがブルジョアジーと労働階級との間に於けるヨーロッパの階級闘争を概括した主要事件であつて、我々はそれによつて、總べての革命的叛亂は、——たとひその目的が、まだ遙かに階級闘争から遠ざかつて見えようとも、——革命的労働階級が勝利を占めるまでは、必ず失敗せねばならぬ事、あらゆる社會改良は、プロレタリア革命と封建的反革命とが、世界戦争に於いて干戈を交へるまでは、一個の空想に止まる事を證明した。我々の叙述に於いても、現實に於いても、ベルギーとスペインとは、歴史の大畫面に於ける悲喜劇的、戲畫的の浮世繪であつた。即ち一はブルジョア王政の典型的國家、他はブルジョア共和制の典型的國家であつて、そして兩國共に階級闘争からも、ヨーロッパ革命からも、獨立したものだと思像して居た。

所で、我讀者は既に、一八四八年の階級闘争が巨大な政治的形態に發展した事を見たのだから、今や、ブルジョアジーの存在と、その階級支配との基礎であり、又労働者の奴隸的屈從の基礎である所の、經濟關係そのものを、もつと深く研究すべき時が來たのである。」

新ライン新聞が、この「賃労働と資本」とを掲載しはじめたことは「政治的熱情を激發することのみ宛てられ」「労働階級の要求に直接關係した問題はきはめて稀であつた」從來の方針に

對して、全く新しい方向に向つたことを物語つてゐる。

新ライン新聞には、マルクスもエンゲルスも、無數に多くの論文を書いた。しかし、兩者の活動は、文筆の上のみではなかつた。運動の上にも盛に活躍した。

千八百四十八年三月三日、ケルンの醫者ゴットシャルクとウイリヒは一揆を起したが、一揆後も「ケルン労働者同盟」を組織して、多くの労働者を包含してゐた。これには、マルクスに近いシヤベル及びモルが屬してゐた。マルクスは「情熱」に動かされるこの共和主義者とは意見が合はず、別に「ライン・ウエストフアリア民主主義協會」の三會頭の一人となり、民主主義協會の會長をしてゐた。しかし、民主主義の態度に期待を置くことをやめてからは、ケルン労働者同盟に近づいたが、これも分裂して、マルクスは、民主主義協會から脱退して、新しいプロレタリアの黨をつくらんとしたが、帝國憲法戦役がおこり、結局それは中途にして成らなかつた。

千八百四十八年十一月八日、ブランデンブルグのマントイフェル内閣が成立し、革命軍から自己を防禦するために議會をベルリンからブランデンブルグへ移さんとしたが、議會及びそれを支持する市民軍は反對し、それに対して政府は戒嚴令をもつて威嚇した。それに対抗して議會は、納税を拒絶する決議をなした。これに対して、マルクス、シヤベル、シュナイデルの三人が、組織してゐた州民主主義協會は、次のごとき檄をとばした。

『民主協會ライン州委員會は、ライン地方に於ける民主黨團體に對し、左の規約を決議し且つ實行せんことを要求する。

- (一) プロシヤ國民議會自身がすでに納税拒否決議をなしたる以上は、租税の強制徴收に對して反對すること。
- (二) 敵に備へる國民軍を至る所に於いて編成すること。
- (三) 各地の凡ゆる政府に對して、國民議會の決議を承認實行する意思ありや否やを公に宣言すべく要求すること。』

この檄は、武装蜂起を煽動するものなりとて、十一月二日、マルクス、シヤベル、シュナイデルの三人は、豫審判事に召喚せられ、叛逆罪として起訴せられ、翌四十九年二月八日陪審裁判に附せられることとなつた。その前日、マルクスは、エンゲルス、コルフと共に新ライン新聞の出版法違反で審理をうけ無罪の宣告をうけた。

叛逆罪の陪審裁判について、エンゲルスは、マルクスの辯論に次の二點を注意すべきであるとしてゐる。

『第一には——一コンムニストが有産的陪審員の前に立つて、彼の犯した、しかしてその故に

今彼が彼等陪審員の前に立たされるに至つた、その行動が、實に犯してよい行動、否むしろ何處までも押しすゝめて行かねばならぬ行動であり、本來から言へば彼等の階級の、すなはちブルジョアジーの果すべき義務であるべきものなることを、説き明さんとしたといふことである。...

第二に興味深き點は、彼の辯論が、政府の偽善的なる合流主義に對し、現今でも適用し得る如き論法をもつて、美事にその共產主義を防護してゐることである。』

二月八日、新ライン新聞主筆マルクス、校正係シャベル、及び辯護士二名、シユナイデルは出廷し検事はポエリングであつた。

被告は、公訴の事實たる檄文は自らが書いたこと、敵といふのは政府の武力であることを説明した。

検事ポエリングは、檄文は煽動罪に當るべきを論じた。検事の論告後、十五分休憩して、裁判長クレーメルは、マルクスの發言を許した。マルクスの辯論があり、次にシャベル、シユナイデルも同趣旨の辯論を行つた。陪審員は三十分の評議の後、全員一致無罪を宣言した。

ドイツは多年國家聯合をなし、各聯邦は各々自由權を有し、ドイツ帝國としては統一してゐな

かつた。千八百四十八年二月革命おこるや、ドイツ各邦は、自由主義憲法をもつ統一ドイツを形成せんとし、各邦の代表者は、四十八年五月フランクフルトに集合して憲法を決定したが、プロシヤ國王ウイルヘルム一世は之を納れず、プロシヤ代議院を反つて解散したので、ここに、憲法擁護派と守舊派との間に、所謂「帝國憲法戦役」が起り、ドレスデン（ここでは有名な音楽家リヒャルト・ワグネルが加はつた）、ベルギツシエン、ベルリン、バーデン、フアルツ等に暴動がおこつた。プロシヤの軍隊は之を弾壓するために戒嚴令を布いて、ライン州、ウエストフアールン地方に、ことに彈壓がひどかつた。そして外國人に退去を要請した。マルクスは先にブルツセル時代にプロシヤ國籍を離脱して、どここの國籍をも有しない「かけなき人」であつたので、遂にケルンを去つてパリに赴いた。エンゲルスは南ドイツに脱れた。新ライン新聞は發行を禁止されるに至つたので、五月十九日、同紙は赤刷の最終版を發行し、マルクスはその三百一號の最終版に、「ケルンの勞働者に與ふ」といふ訣別の辭を書いた。その一番最後は次の一句をもつて終つてゐる。

『新ライン新聞の編輯局は、今諸君と別るるに際し、新聞に對し示された協同に對して諸君に厚く感謝する。その最後の言葉は、至る所常に、勞働者階級の解放！である。』

この最後の版には、又「詩人は民衆とともに歩まねばならぬ」とさげんだ民衆詩人フライリヒ

ライトの「新ライン新聞の訣別の言葉」といふ詩がのつてゐる。その一節。

戦の嵐と焰の中に

最後の反動が硝子のごとく碎けるとき、

民衆が最後の「有罪」をさげぶるとき、

我々は再び共に立たう

言葉もて、剣もて、ドナウの岸に、そしてまたラインの岸に、

.....

マルクスは、パリに向つて、ケルンを去るに當つて、新ライン新聞の負債を支拂ふために、自分及び妻の所持金をすべてなげ出し、妻の所持品をフランクフルトの質屋にぶつ込んだ。妻は一時子供を連れてトリエールに歸つてゐたが、後でマルクスを追ふてパリへ來た。

六月十三日、ドイツ、フランスの民主主義者が——これには新ライン新聞の前編輯員、ケルン労働者全同盟も加はつた——示威運動を行つたが失敗した。「パリでは、千八百四十九年六月十

三日をもつて、ドイツでは五月一揆の鎮定をもつて、さらにロシアによるハンガリー革命の弾壓をもつて、千八百四十八年革命の重大なる時期は終を告げた」——エンゲルス。

この暴動の失敗のため、フランス政府はつひにマルクスを追放せんとした。

「親愛なるエンゲルス、僕はモルビアン縣に追放を申し渡された。ブレイクレーヌのポンティエーヌ沼澤地方へ。君の知る通り、僕はこんな體裁のいゝ、殺害計畫に承服するものではない。だから僕はフランスを去る。」

八月、マルクスは、海をこえて、ロンドンに渡つた。

「親愛なるフライリヒライト！……實際パリの警察の下劣さ加減を考へて見てくれ給へ。僕の家内までもがひどい目にあつてゐるのだ。そして、僕たちはパリで九月十五日まで住居を借りてあつたのが、同日までパリに居残ることの許しを得るまでには一通りの困難ではすまなかつた。僕は目下本當に難澁してゐる、家内は臨月の身なのに、この十五日にはパリを去らねばならない。しかも僕は、家内が同地を出立するに必要な金や、それから當地に移つてくるのに要する費用をどう才覺すべきか、判らないのだ。」

第七章 千八百五十年代の初期

千八百四十九年八月の終り、マルクスはパリを追はれてロンドンに着いた。翌月、マルクス夫人は四人の家族をつれて、マルクスの後を追つて英京に來た。新ライン新聞廢刊以後の苦心勞に加へて、妊娠中の彼女は、肉體的苦痛をも交へて、やうやくロンドンにたどり着いた。夫人の生家にて幼い時から彼の女につきそつてゐた女中レンシエンは、この時以後マルクス一家の一員となつて、それ以後マルクスの死ぬまで、マルクス一家と苦樂をともにした。

『親愛なるワイデマイヤー様、遣り送げる見込ももはや殆どなくなつた時に、デモクラチツクなビーデルマンのやうな人達に説き勧められて、數千の現金を投じたり、新聞の財産を引き受けたり、どんな犠牲を私の夫が新聞のために拂つたか、貴方は御存じです。新聞の政治的名譽を、ケルンの譏り合ひの方々の市民的名譽を救ふ爲めに、彼は一切の負擔を自分で負ひました。彼の機械、全収入を棄てました。のみならず、發行を續ける際には、新に借りた編輯局に對する家賃と編輯者への未拂ひの報酬金等を拂ふ爲めに、彼は三百ターレルを借りました。——そ

して彼は無法にも放逐されたのです。貴方は御存じです、我々が一切の物から何物をも我々の爲めに残さなかつたといふことを。私は私の銀道具を質入する爲めに、フランクフルトへ參りました。それは我々の持つてゐた最後の物であつたのです。ケルンでは私は私の家具を賣らせました。反革命の不幸なる時期が始つた時に、私の夫はパリへ行きました。私は三人の子供と共に彼に随ひました。パリに到着く間もなく、再び、追放を命ぜられ、私自身と子供等にもより以上滞在する事は禁ぜられました。私は再び海を越えて彼に随ひました。一ヶ月の後には四番目の子供が産れました。三人の子供と四番目の子供の誕生、それが何を意味するかを知る爲めには、貴方は此處ロンドンの事情をお知りにならなければならぬでせう。家賃だけでも私共は月四十二ターレル拂はなければなりません。これら總てを私共は自分で調達した財産から支拂ふことが出来ました。しかし私共のさうやかな資財は、評論誌の出た時に盡きてしまひました。約束にもかゝらず金は届きませんでした。そして手に入る金は小額づゝです。かやうなわけで私共は非常にみじめな状態に立ち至つたのです。』(清水三郎氏譯、ワイデマイヤーに與へたマルクス、エンゲルスの手紙、十六―十七頁)

これが、後年夫人自らの手になる渡航當時のマルクス一家の姿であつた。

この手紙の中に出て来る評論誌といふのは、マルクスが渡英後最初に企てた仕事の一つである。「新ライン新聞、政治、経済評論」のことである。この評論誌の発行の計畫は、すでにパリに居るときに企てられたものであることは、八月二十五日のパリよりエンゲルスに宛てた手紙に、「僕はロンドンでは一つのドイツ雑誌を創刊する見込をもつてゐる。資金の一部分は大丈夫だ。」とあるによつて明瞭である。

この「新ライン新聞、政治、経済評論」は、千八百五十年の一月から創刊せられた。編輯は、ロンドンにあるマルクス及びそれをかこむドイツ亡命共産主義者たちによつて行はれ、印刷はハンプルグでなされた。月刊誌であつた。併し時が悪かつた。四月までに四冊出たが、十分に賣れず、賣れても代金の徴収がうまく行かなかつた。永い中断のあとで、十一月にあと二冊が一卷となつて出ただけで、前後六冊をもつて、同志の運命がつきた。主として経済的原因にもよるが、その他に共産主義者同盟員間の意見の分裂も重要な廢刊の理由をなしたに相違ない。それについては後に述べる。

マルクスとエンゲルスは、各々この評論に重要な下記の論文をかいたが、その外に、毎月、經濟情勢についての月々の概観を書いた。エンゲルスは、この評論の第一號から第三號にかけて、「ドイツの帝國憲法戦役」を連載した、これは「その誘因、その出現、その状況、その全經過は

徹頭徹尾、ドイツ式」であり、當時の「ドイツ殊に南ドイツに於ける社會的及び政治的發達の程度」を示したといはれる、千八百四十八年五月のドイツ帝國憲法戦争への彼の從軍記である。新ライン新聞の廢刊とともにエンゲルスは、南部ドイツ地方の叛徒に加はつてプロシヤの軍隊に抵抗したが敗れてスキスに逃げ、そこからジェノア、ジブラルターを経て四週間の海上旅行のちロンドンに來たのだ。この論文は、そのときの從軍記である。

エンゲルスは又同評論の五號及び六號にわたつて、「ドイツ農民戦争」を書いた。これは、唯物史觀の立場から千五百二十五年のドイツの農民戦争を描いたもので資料は、ヴェ・チンメルマンの「大農民戦争」から借り、チンメルマンの記述が、「内部の連絡を缺き、當時の宗教的・政治的係争點を以て當時の階級闘争の反映なりと指示する事に成功せず」「農民戦争の勃發ならびに結末に對して均しく影響を與へてゐた社會状態に對するその洞察力が極めて不足だらけ」なるを遺憾として、「農民戦争の起因、その中に於いて起つた種々様々の黨派の立場、是等の黨派がその立場を鮮明ならしむるために執つた政治的及び宗教的理論、最後に闘争の結果、それ自體も是等階級の歴史的に與へられた社會的生存條件から必然的に生ずるものなりとして説明せんと」こころみたまものである。

マルクスは、この評論の一、二、三、五、六號にわたつて、「千八百四十八年より千八百五十

年に至るフランスに於ける階級闘争」を連載した。これは、共産黨宣言に明確に定められた彼の唯物史觀的理論をもつて、いま彼が目前に経験し來つた二月革命の歴史を叙述したものである。マルクスがこの論文に於いて、千八百四十七年の世界恐慌が二月革命の社會的原因であつたこと及び千八百四十八年の中頃から恐慌が去りはじめ、四十九年から五十年にかけては産業上の繁榮が來たが、それが革命後に來た反動勢力擡頭の社會的原因であることを指摘した。このことは、後でのべるやうに、共産主義者同盟分裂の主要なる契機をなしたところのものである。

四十九年八月マルクスは、最初にロンドンに渡つた。エンゲルスは南ドイツに行き、その叛軍に加はつてプロシヤ軍と戦つて敗れ、スキス、ジエノア、ジブラルタルを経て、四十九年の秋ロンドンに來た。シヤベルは新ライン新聞に参加したが、捕へられてウイスマンバーデンの獄にながれ、千八百五十年の春釋放されて、ロンドンに來た。モルは共産主義者同盟再組織のためにドイツに派遣せられ、後プザンソン労働者軍に加つて、七月十九日ムルクの會戰中、ロオテンフェルス橋の前方で、頭部をうたれて即死した。その他の「新ライン新聞」の同志や、ケルン労働者同盟の同志たちは、千八百四十年の初には、みなロンドンに集つた。かつてゴットシャルクと共に二月革命の當初ケルンで暴動を起したアウグスト・ウイリツヒも亦、ロンドンに集つた。當時のロンドンは、實に、革命家の集合所であつた。ことに亡命ドイツ人が多かつた。

マルクスとエンゲルスとは、ここに於いて、先に二月革命のために、事實上解消したところの共産主義者同盟を再び組織した。そして、三月、同盟の中央委員會は、マルクス、エンゲルスの執筆にかゝる回狀を同盟員に發表した。

それによると二月革命の勃發後、同盟員が各地方に散つて、個々の革命的活動をなしたがために、中央委員會の支部との聯絡が中斷せられ、同盟の組織がいちじるしく弛緩した。「かくて民主黨、小ブルジョア黨が、ドイツでは、いよいよますます組織せられて行くに引換へて、労働黨はその唯一の鞏固なる地盤を失ひ、精々地方的目的のために、個々の地方に組織せられるにとどまり、これがため、一般的運動に際しては、全く小ブルジョア民主黨の支配と指揮とをうけるやうになつてしまつた。我々はよろしくかゝる状態を絶滅して、労働者の獨立を確立しなければならぬ。」「ドイツ・フランス革命黨の敗北後、殆んど中央委員會はロンドンに再び集合して、新たに革命的勢力を補充し、捲土重來の熱誠をもつて同盟の再組織を急いだ。」「再組織を行ふには唯密使の手をかりるより外はない。中央委員會は、もし千八百四十八年のごとく、再びブルジョアジーのために利用せられ、その曳繩に浚はれまいとするには、正に新たな革命が目睫の間に迫り、労働者が出来るだけ組織的に、出来るだけ一致提携し、又出来るだけ獨立的に、踏出さなければならぬ時期に際して、密使を派遣することが、きはめて肝要な事をみとめるのである。」

一この發展を促進すべき革命は目睫にせまつて居る。しかしてこの革命がフランスプロレタリアの獨立的暴動によつて惹起されると、革命のバベルに對する神聖同盟の侵略によつて惹起されるとは問ふ所でない。」「ドイツ労働者はやゝ久しき革命的發展を充分經驗する事なくしては、政權を得ることも出来なければ、又自己の階級利益を貫徹することも出来ないが、今度こそは、この目標の革命の第一幕が、フランスに於ける労働階級の直接の勝利と合致し、且つ是に依つて、非當に促進されることは少くとも確かである。」

この宣言には、マルクス、エンゲルスが、近く大なる革命がおこるべきを豫定してゐる。かかる豫言的言句は、その他の新ライン評論の上にもあらはれてゐる。また、この宣言に於いて、今一つ注意すべきことは、この中に、プロレタリアの獨裁とそれが行ふ政策についての輪廓が描かれてゐることである。

この回狀をもつて、ハインリッヒ・パウエルは、密使としてドイツに派遣せられ、ドイツ内部に共産主義者同盟を發表させる策が講ぜられた。六月には、ここに第二の回狀が發布せられた（パウエルは、その後オーストリアで行衛不明になつた）。

しかしながら、五十年の夏以來、近く革命が起るといふ希望は望みなきことが明瞭となつた。それは、千八百四十七年の恐慌の反動としての好景氣の到來である。かゝる好景氣の繼續のもと

では、革命は起り得ない、といふ認識がマルクス、エンゲルスによつてなされるに至つた。この認識は、「フランスに於ける階級闘争」のなかでも、すでに引用したやうに述べられてゐるし、また評論誌の最終卷のマルクスの評論のなかにも詳しく論ぜられてゐる。

それによると、イギリスでは、千八百四十八年の三月―五月の間に、恐慌は鎮靜に歸し、それ以後、商業、工業は漸次好況に向つた。その一つの證據は、主要産業部門である棉花加工業の繁榮であり、他の證據は、植民地主要商品の消費の増加及び價格の騰貴である。イギリス工業の繁榮は、さらに、次の事實によつて高められる。「其一つは新たに行はれたオランダ植民地の開發であり、其二は、後段更に論及するであらう太平洋の新交通路建設の切迫であり、最後には一八五一年の産業大博覽會である。此博覽會は、既に一八四九年、大陸全體が未だ尙革命を夢みつゝあつた當時、イギリスのブルジョアジーに依つて、最も驚くべき平靜さをもつて準備されて居たのであつた。」

イギリスに續いてアメリカも繁榮した。殊に、それを促進せしめたのは、カリフォルニアの金鑛の發見である。「カリフォルニアの金鑛の發見は、アメリカの繁榮に王冠を戴せた」のである。のみならず、それは、全世界の經濟界に大なる影響を與へた。かゝるイギリス及びアメリカの繁榮は間もなくヨーロッパ大陸に反應した。ドイツ、フランスも好景氣のうちにあつた。

『ブルジョア社會の生産力が、ブルジョア關係の内部に於いて一般に可能である限り、十分に發展するやうな、斯かる一般的繁榮の際には、眞實の革命なんて有り得やう筈がない。かかる革命の可能なのは、只、近代の生産力とブルジョアの生産様式の此二要素が相互に矛盾に陥るやうな時期に於てである。今日大陸に於ける保守黨の各派の代議士がそれに終始し、そこに於て相互に暴露し合ふてゐる各種の争闘は、新たな革命を惹き起すどころか却つて只其反對に諸關係の基礎が一時極めて確實であり、且つ、反動家は知らないことだが、それが極めてブルジョア的であるからこそ、さうした争闘が可能なのである。ブルジョア的發展を阻止する總ての反動的試みは、民主主義者の總ての道徳的憤怒と總ての興奮せる宣言と同様、等しく、著しくかゝる争闘の上に反映するであらう。新らしい革命は新しい恐慌の結果としてのみ可能である。而も前者は後者が確實であると同様に又確實である。』

マルクスは、かくして、好景氣の時代には、革命は不可能であり、したがつて、經濟的、社會的前提條件のあたへられてゐない五十年度に於いて革命は決して來ない、と論斷した。この論斷の上に立つて、マルクスは、ジョセフ・マヂニ、ルドリュ・ロラン、アーノルド・ルーゲ、アルベルト・ドラズの四人よりなるヨーロッパ中央委員會が、宣言を發して、「我々の仲間の最高者の監視のもとに一體となつて進行するであらう日は……争闘の前夜であらう。此日に於いて、我

我は我々自身を清算するであらう。我々は我々が何ものであるかを知り、我々は我々の力の意識を有つてあらう」とて、理想の力でもつて革命を起し得るとする考へを嘲弄した。同様の嘲笑はコツスト、キンケル、ゲツグ等に對しても向けられた。

このマルクスの論斷は、共產主義者同盟の内にも多くの反對者を出した。その頭梁は、シヤベルと、そしてウイリヒであつた。この説を中心として、共產主義者同盟は二つに分裂した。革命派が、革命即行説をとなへて資金募集をはじめや、マルクス、エンゲルスは、かゝる運動に参加するを潔とせずして同盟を脱退した。フライリヒラート、ウオルフ、パウエル、リープクネヒト、ザイレル等はマルクス陣營に屬し、元のケルン労働者同盟の人たち、ワイトリング派の人たちはシヤベル、ウイリヒの陣營に屬した。この同盟の分裂は、その後千八百五十三年に至つて、共產主義者同盟の解散への主要なる原因をなした。

ウイルヘルム・リープクネヒトは、千八百二十六年、ライプツヒの生れで千八百四十八年の二月革命には、バーデン共和國を建設せんとした義勇軍に参加して投獄せられ、後釋放されて、スキスから強制旅券によつて、千八百五十年フランスを通つて、ロンドンに送られた。スキス滯在中、ジュネーヴでエンゲルスに會つた。彼自らの追憶記によると、「前の年にジュネーヴでエンゲルスに會ふまでは、毫も、個人的關係はなかつた。マルクスについては、パリ年鑑に出る

「哲學の貧困」しか、エンゲルスに就いては、「英國に於ける勞働階級の狀態」しか知らなかつた。「共產黨宣言」は勿論夙に其の名を聞き、その内容を承知してゐたが、やつと憲法戦争後、エンゲルスに會ふ少し前に私は——千八百四十八年から共產主義でありながら——手に入れることが出来たばかりであつた。それから「新ライン新聞」は極めて稀にしか見なかつた。といふのはそれが發行されてゐた十一ヶ月の間私は國外に居たか、或は牢に還入つてゐたか、或は叛逆のスツルム・ウント・ドランクの混沌とした生活をしてゐたからだつた」(小椋廣勝氏譯本四一—四二頁)。ロンドンに渡つたりブクネヒトは、共產主義勞働者教育俱樂部の野遊びでマルクスと一緒に、その翌日、マルクス、エンゲルスのテストをうけてマルクスの仲間に加はり、それから長く交遊を重ねたのである。

共產主義者同盟を脱したマルクスは、この期を利用して書齋の研究生活に歸つた。五十一年六月の手紙には、次のやうにかゝれてある。

「僕は六時朝九時から夕七時までブリテイッシュ・ミュージアムで仕事をしてゐる。僕の取扱つてゐる材料は非常に多岐に亘つてゐるので、あらゆる努力を以つてしても、六乃至八週間を要せずしては仕上げることが出来ない。その上始終、ロンドン流の生活法において不可避的に難

務に妨げられる。それにも拘はらず、仕事は急いで進められてゐる。入は時には無理にも分離しなければならぬ。」

エンゲルスはマンチエスターにある父の營んでゐる商會エルメン・ウント・エンゲルス商會の事務員となり、引退して勉強した。マンチエスターでのエンゲルスの研究項目は、軍事方面であつたらしい。ワイデマイエルへの手紙には、「僕はマンチエスターに来てから、軍事を勉強し初めた。次の運動に於いて、軍事が得るに違ひない所の非常に大なる重要性、昔からの傾向、「新ライン新聞」に物した僕のハンガリア戦争に關する諸論文、最後に僕のベーデンに試みた光榮ある冒険、すべてこれらの事が、僕をして軍事研究に心を向けしむることとなつた。」(清水三郎氏譯による)エンゲルスはかつて、學生時代の後で、ベルリンの砲兵隊に一年志願兵として入隊した経験があつた。それも軍事方面への興味をもつ一つの原因であつたであらう。後年、エンゲルスが、軍事方面に於ける評論で、卓抜なる才能を示した素地は、このマンチエスター時代の研究で築かれたのだ。

この時代から、兩人の研究時代が始ると共に、マルクスの身邊には貧窮の生活が纏ひつく。いま、マルタス一家が、當時如何に、經濟上苦難の生活を餘儀なくしなければならなかつたか

を知るために、二三の手紙を引用しよう。

千八百五十年五月二十日、マクルス夫人が、マルタスの友人ワイデマイエルに、書いた手紙の一節。

『私は私共の生活からたゞ一日だけを、有りのまゝに描いてみませう。かやうな生活をしたものは亡命者でも恐らく少いことが貴方におわかりになるでせう。こゝでは乳母を雇ふことは思ひもありませんので、胸と背中が始終ひどく痛むのですけれども、私は自分で子供を育てることを決心致しました。あはれな小さい天使は私の乳を呑みました。ですが云はゞそれだけ澤山の心配と苦みとを呑んだのです。でこの子は始終病弱で、晝も夜も烈しい苦痛の中に横つてゐました。この子は産れて以後、まだ一夜も満足にやすんだことはありません。せいぜい二時間から三時間やすむだけです。最近にはなほはげしい引き付けをも起しました。でこの子は始終死とあはれな生との間をさまようてゐたのです。かうした苦痛のうちにあつてこの子は、私の胸が傷き破れる程強く乳を吸ひました。度々その小さな震へる口に血が吸ひ込まれました。或る日かうして私が坐つてゐた時に、突然私共の主婦がやつて参りました。私共は此の主婦に冬中二百五十ターレル以上拂ひまして其餘の金は彼女にはなく、以前に彼女に金を貸した家主に支拂ふといふ契約を取結んだのです。ところが彼女は今急にこの契約を取消し、なほ彼女に

借りになつてゐる五ポンドを要求しました。そして私共がそれをすぐに拂へなかつた時に、二人の執達吏が家に押入り、私のさゝやかな持物をすつかり差押へました。ベッド、洗濯物(Wäsche)敷布、卓布、シャツ類、ハンケチ等洗濯し得る多くの物を指す——譯者)着物、何もかも、可哀さうな赤子の搖籃や涙に泣きぬれてゐた娘等の目ぼしい玩具をさへも。彼等は二時間内に何もかも持ち去ると威しました——かうして私は私の凍えてゐる子供等と痛む胸とを抱いて何もない床の上に置かれました。私共の友シユラムは救ひの金を調達に市内へと急いで行きます。彼は馬車に乗り、馬は進み、彼は馬車から飛び下り、そして私があはれな震へてゐる子供らと悲しんでゐた家へと心を傷め乍らやつて來ます。

翌日私共はその家から立退かねばなりません。それは寒い、雨の降る、陰氣な日でした。私の夫は私共に住家を探します。彼が子供が四人あることを話すと、誰も私共に貸さうといふ人がありません。やつと一人の友が、私共を助けてくれました。私共は拂ひました。そして差押へ騒ぎを聞いて懸念した藥屋、パン屋、肉屋、ミルク屋が俄かに勘定書を持つて押しかけて來ましたので、それらに拂ふために、急にベッドを破らす賣りました。賣られたベッドは戸の前に持ち出され、荷車に積まれました——何事が起つたでせうか？もう日が落ちてから大分たつてゐます。英國の法律はそれを禁じます。宿の亭主は警官をつれて人を押し分けてそ

こへやつて来ました、それは彼の物で私共は他國へ行かうとしてゐるのだと主張しました。五分もたないうちに、二三百人以上の人が私共の戸の前に群り立ちました。チエルシアの彌次馬總出の有様です。ベッドは戻りました。日の出の後翌朝買ひ手に引き渡されるのは許されるのです。かやうなわけで、私共が全財産を賣拂つてやつとすつかり支拂ひをすますことが出来た時に、私は私の小さな子供等とライセスター・スクエーヤ、ライセスター・ストリート一番地下イッホテル内の私共の只今の二つの小室へ移つたのです。こゝで私共は一週五ポンド半で人間らしい待遇を見出したのです。』(清水三郎氏譯)

五十年十月二十九日、マルクスはワイデマイエルに手紙をやつて、ロンドン亡命の途次、夫人がフランクフルトで質入した銀道具をうけ出し、さらにそれを賣却して、金を送つてくれと頼んだ。「今の僕の生活状態は研究をつづけ得るためにさへ、どうしても金を調達しなければならぬ有様だから」。しかし、賣拂つた額から質屋への利子を支拂ふと、二三十グルデンしか残らぬといふ慘憺たる有様だつた。

經濟的困窮の上に、家庭的の不幸さへしきりにマルクス一家を襲ふた。

『親愛なるエンゲルス、君の手紙は、私の妻を喜ばした。あれは本當に危険なほど興奮して衰弱してゐる。あれは自分の乳をあの子に與へ、苦い暮しむきの中に、大きな犠牲を拂つてあの子の生命を保つて來たのだ。それなのに、あの哀れな兒が市民的窮乏の犠牲となつたかと思ふと。……』

これは、五十年末、次男ヘンリーが、痙攣の發作で急死した時、マルクスがエンゲルスに通知した手紙の一節だ。

千八百五十二年の復活祭には、三女フランチカスが病のために倒れた。マルクスの娘エリーナは後年、當時の母の日記を公にした。その日記の一節。

『一八五二年復活祭に我々の哀れな小さいフランチカス(Franziska)は重い氣管支炎にかかりました。三日の間、哀れな兒は死と闘ひました。大變に苦みました。その小さな、靈の去つた身體は後の小さい室に憩うてゐます。私共一同は前の室に移りました。夜になつて私共は床の上に身を横へました。三人の生きてゐる子供等も私共と共に横つてゐます。そして私共は、冷く蒼ざめて私共の傍に憩うてゐる小さな天使の爲めに泣きました。愛し兒の死は私共の最もひどい貧乏の時に起りました。私は、近所に住んでゐる、少し以前に私共を訪ねられたフランスの亡命者の方の許へ参りました。彼は直に最も親切な同情を以て二ポンドを貸して下さいました。その金で小さな棺を買ひ、その棺の中で今私の可哀さうな兒がまどろんでゐるのです。』

この児が生れた時、この児は搖籃を有ちませんでした。そして最後の小さな住居も長いこと興へられませんでした。この児がその最後の休み場に運ばれたとき、まあどんなに悲しかつたこととせう！』(清水氏譯)

千八百五十二年九月八日のマルクスからエンゲルスへの手紙の一節。

『君の手紙は、今日、非常に取亂してゐる真ん中に届いた。

僕の妻は病氣だ。小イエニーも病氣だ。レンシエンも一種の神經熱に罹つてゐる。僕には、少しも藥代がないので、醫者を呼ぶことが出来ない。またできなかったのだ。僕は八日か十日ほど前から、家族をバンと馬鈴薯で賄ひ通して來た。僕が今日これらのものを工面することができるかどうかも問題である。目下のやうな氣候の鹽梅では、かうした食餌療法がいけなかつたことはいふまでもない。

僕は新聞を讀みに行く金が一錢もなかつたので、ダナへの論文は書かなかつた。……

僕の家は病院だ。そして危機はますます激しくなつて來て、僕は否でも應でも、最大の注意を向けることを餘儀なくされるのだ。どうしよう？……』

かゝる貧窮のために、マルクスは、最初の住居チエルシアを、家賃不拂のために追ひ出されて

ソホ區のデン街二十八番地の汚い家屋の二階屋を借りた。ここに五十年から五十六年までの六年間を暮した。マルクスとエンゲルスは、千八百五十年の十一月、一時アメリカ行を思ひ立つたが、アメリカの某會社の代表社員がロンドンに來て、エンゲルスの義兄と相談したが、仕事の性質が兩人を入用とするものでなかつたので、渡米は無期延期となつた。

典すべき家財もつき、借財も不可能となつた。かゝる經濟上の不幸は、五十年代、六十年代の初期にも及んだ。ある時は、ジュネーヴの方が生計が楽だから、ロンドンでは四百ポンドかかるのに、ジュネーヴでは二百ポンドでやつて行けるから、ジュネーヴに移住しようかとも思つた。しかし、「ロンドンでのみ、私は私の仕事を完成させることが出来る」ので、この計畫は中絶した。また、ある時は、それは六十二三年の頃だが——イギリスの鐵道局の書記にならうとしたが、字が不明瞭のために採用されなかつたことがあつた。

慘憺たるこの苦難を僅かに助けたものは、エンゲルスの友情とニューヨーク・トリビュン紙への寄稿による稿料とであつた。エンゲルスは、マンチエスターの父の經營する商會に勤めてゐたから、生活には困らなかつた。エンゲルスは、自分の職業を「犬の職業」と呼んでゐた。この犬の職業に従事したことは、自分の未來のための勉強と、マルクスへの仕送りによつてマルクスの學問を大成せしめたことによつて、十分報わられてゐる。ニューヨーク・トリビュンへの寄稿

については、後段に更に述べるであらう。

話を少くし元に返す。千八百五十年、マルクスとエンゲルスとが、ロンドンに落合つて共産主義者同盟を再組織し、三月および六月には、中央委員会の名によつて廻状を發し、それとともにそれを携へて多くの密使がドイツに派遣されたことは、前に述べた通りである。これらの密使のうち、ハイブリツヒ・パウエルは、オハストリアで行衛不明になつたが、ノットユングは千八百五十一年五月十日に、ライプツヒで檢擧せられ、續いて、ビュルゲルス、レエゼル、ダニエルス及びベツケルス等が檢擧せられた。そして檢擧の際に共産黨宣言、共産主義者同盟の規約、廻状二通等が發見せられ、同志の名も發覺した。この頃、ロンドンでは既に同盟内に分裂が生じ、同盟の力も弱くなつてゐたが、それを知つたプロシヤ政府は、反動の勢に乗じてドイツ内部における共産黨を根絶しようとして、これらの共産主義者を起訴した。

千八百五十二年十月四月、プロシヤ國家に對する大逆罪として起訴せられたる被告人は、一年の未決監收容ののち、ケルンの陪審裁判所に出頭した。當時の被告を被告入簿によつて擧げると、

- 一、パイ・ジー・レエゼル、煙草労働者
- 一、ハイブリツヒ・ビュルゲルス、後の進歩黨代議士

一、ペテル・ノットユング、裁縫人、數日前爲眞師としてプレスラウに死去

一、ダヴリユウ・イイ・ライフ

一、ヘルマン・ベツケル學士、現ケルン市長、貴族院議員

一、ローランド・ダニエルス學士、醫師、牢獄で死去

一、カール、オットー、化學者

一、アブラハム・ヤコビイ學士、現ニューヨーク醫師

一、イー・イー・クライン學士、現ケルン醫師兼市會議員

一、フェルチナンド・フライリヒラート

一、イー・エ・エールハルト、番頭

一、フリードリツヒ・レスネル、裁縫師

以上の十二人で、公判は千八百五十二年十月四日から十一月十二日までつづき、その陪審裁判の結果、レエゼル、ビュルゲルス、ノットユングは禁錮六年、ライフ、オットー、ベツケルは五年、レスネルは三年、ダニエルス、クライン、ヤコビイ、エールハルトは無罪。これ、ケルン共産黨訴訟事件として知られるところのものである。

政府は、権力を利用して、犯罪事件の虚構、歪曲を行ひ、證據の作製、警部シュテイペルの教唆等、あらゆる無茶を行つて、無理やりに犯罪を作り上げた。マルクスは、同盟が分裂したに拘らず、舊同志のために多くの材料を供給して、警部や政府や、裁判所の卑劣なるやり方を暴露した。千八百五十三年に出版された、マルクスの「ケルン共産黨事件の暴露」は、實にこの事件を、根柢から暴露したものである。

この事件の後、千八百五十三年には、共産主義者同盟は、正式に解散せられた。

當時、マルクスの友人ヨセフ・ワイデマイエルは、ドイツに於いて、新ドイツ新聞に關係してゐた。が、ケルン共産黨事件が檢舉せられて、黨員の名が明瞭となるや、プロシヤ政府のワイデマイエル捕縛狀が出で、彼の身邊やうやく危からんとした。そこで彼はスキスに逃れたが、更にアメリカに渡つた。千九百五十一年九月二十八日、マルクスの止めるのもきかず、一片の訣別の手紙を出して、フランスのアーブルの港から大西洋を渡つた。

アメリカで、彼は、すでに千八百四十九年アメリカに渡つてゐたワイトリングが發行してゐた「勞働共和國」を買収して、これを「革命」と名づけ、マルクス、エンゲルスにあてて、寄稿を委囑した。マルクスが、「ルイ・ボナパルトのブルニメンル十八日」を寄稿したのは、實にこの新聞であつた。この新聞は二號しか續かなかつたが、後にフランクフルトの一仕立工が、ワイデ

マイエルに全貯金四十ドルを提供したので、それによつて、マルクスの論文は、一書となつて出版せられた。この著書は、ルイ・ボナパルトのクーデターを取扱へるもので、「それは二月事變以後のフランス歴史の全行程を、その内的な聯關に於いて説明し、十二月二日の奇蹟を、この聯の自然にして必然な結果に歸し、そしてクーデターの英雄を、彼にふさはしい輕蔑以外の何もをもつて遇する事をも、少しも必要としなかつた(エンゲルスの序文)。マルクスが発見した歴史法則を「この歴史に應用して試験」し、「この試験が燦然たる結果」を示したものであつた。

マルクスは、フライリヒラートに依て、ニューヨーク・トリビューンの支配人シー・エー・ダナに推薦された。ダナはかつてケルンにゐたことがあり、二月革命當時マルクスに會つたこともあつた。このダナは、フリーエ主義者で、ブルツク農園といふ社會主義團體の所屬員で、社會主義に對しては、一應の理解と同情とを有してゐた。このダナは、ケルンに居た時に、マルクスの才能を知つてゐたのであるが、千八百五十一年の終りに近く、その編輯するニューヨーク・トリビューンの紙上に、西ヨーロッパの事件を取扱ふ部門を設け、そこへマルクスの執筆することをすすめた。マルクスは、英語が十分に書けなかつたので、エンゲルスの助けを借りて、兩人合作の上、毎週通信をトリビューン紙に送つた。一文に對して一ポンドの報酬をうけた。當時この僅かな収入が、マルクスの家計をすくなく助けた。マルクスの通信は、二月革命前後のヨーロッパ

パの諸状態を批判したものである。この評論は、好評を博したと言はれる。千八百九十六年四月マルクスの娘エリーナーは、この通信の一部を編輯して「革命及び反革命」と題して發刊した。

千八百五十三年一月二十八日以後は、マルクスも英文執筆に慣れて、自らの筆をもつて、英語の通信を書いた。千八百五十二年以後の通信は、別に集輯せられて、「イギリス通信」となつてまとめられてゐる。これは、主として、イギリスの政治、社會に關する通信を集めたもので、グラッドストーンを論じ、デイスレリーを論じ、コブデンを論じ、痛烈なる批判をイギリスの社會に投じてゐる。

ニューヨーク・トリビュンへの通信を、マルクスが如何なる環境に於いて執筆したかは、「革命及び反革命」のエリーナーの序文に示されてゐる。

この章の取扱つた千八百五十年代の初期は、運動も衰へ、私生活に於いては、經濟的にも家庭的にも、マルクスにとつて、一生涯中、もつとも苦悶に苦しんだ時代であり、同時に將來に於ける活躍の雌伏時代であつた。

第八章 反動期に於ける文筆的活動

千八百四十七年の恐慌が克服されて、世界に繁榮が續きはじめると、社會運動は、その發展の社會的基礎を失ふ。それに反して、反動の陣營が勢を得る。千八百五十七年に、すなはち前の恐慌後十年目に、再び世界的恐慌が來て、その二三年後に社會運動が再び擡頭するまで、マルクス、エンゲルス、その他の一派の人達は、運動の表面から退いて、もつぱら研究と文筆による活動の部面に立ちもつた。

マルクスは、イングリツシユ・ミュウゼウムに立ちもつて専ら勉強に餘念がなかつた。彼は、自分のみならず、周囲の友人をも促して、學べ！學べ！と鼓舞した。シャペルウイリヒ一派のものやキンケル一派のものは、明日にも革命が來ることを幻想してゐたが、マルクスはそれらの徒を嘲笑しながら、自らの研究を鞭撻するとともに、周囲のものたちにも、それをすゝめて、もつぱら時機を待つた。彼自らは「資本論」完成のために、一生懸命になるとともに、生活費を得るために、多くの新聞への寄稿の論文を書いてゐた。エンゲルスは、マスチエスターに

あつて、父の仕事を手傳ひつつ軍事學を勉強したり、マルタスに、經濟上の知識を教へたりしてゐた。千九百五十三年のエンゲルスの手紙によると、

『この冬は、スラヴ語に於いても軍事學 *Militaribus* に於いても著しく進歩した。今年の末までにはロシア語と南スラヴ語を可なりよく理解するやうになるだらう。僕はケルンで或るプロシヤの退職砲兵將校の藏書を安く手に入れた。そして僕は、暫くの間古いプリュムニケ *Plümnike* 旅團學校教科書や其他君の記憶にある古本の中に、再び全く砲兵になつたやうに感じた。

プロセインの軍事文獻は確かに一番悪い。ただ一三一一年の戰鬪の直接の新しい追憶において書かれたものだけが、可成りのものだ。だが、一八二二年以來は厭な軍人風の自慢が始まつてゐる。最近において又プロイセンで可成りのものが現はれたが、それとても多くはない。古い戰爭（一七九三年以來の）については、僕は可成勉強した。ナポレオン戰爭は、さう暇がかゝらぬ程簡單だ。ジョミニは結局それについての第一の叙述者だ。天才クラウゼヴィッツは、多く良い物があるに拘らず、僕にはあまり氣に入らない。』（清水三郎氏譯前掲本）

その他の一派の人達も、種々の手段で生計の策を講じつつ時期を待つてゐた。少こし後の事ではあるが、マルタスは、六十九年にワイデマイエルに宛てた手紙の一節で、同志の消息を次の如

く傳へてゐる。

「エンゲルスはすうつとマンチエスターに居る。ルプス（ウオルフのこと）も同處で時間教授をし、可成りに暮してゐる。フライリヒトはロンドンで、スキスの動産銀行の支店の支配人をやつてゐる。ドロンケ (*Dronke*) は、グラスゴーで代理販賣人をやつてゐる。イマント (*Imandt*) (君が彼を知つてゐるかどうか、僕は知らない) はダンデー (*Dundee*) で教授をしてゐる。我々の親愛な友、ウエルトは惜しいことにハイチで亡くなつた。償ひ難き損失である。』（清水氏譯）

かゝる間に、ヨーロッパの風雲は平和ならずして、千八百五十四年には、クリミア戰役が勃發した。二月革命當時に於いては、各國に革命の變しきりに起り、民主主義者や共產主義者が活躍したので、各國の政府は、従來の行きがかりを忘れて、協同して、共同の敵の彈壓に當つたけれども、革命の波が去つて、反動の陣營が脅かされる惧がなくなるにつれて、各國間には従來の對立、利害關係の背反が再び頭をもたげ始めた。

その最初の争が、ロシア對トルコの紛争の形をとつて現れた。ロシアは、多年地中海方面に手を延さんとする意圖を有ち、ニコラス一世が帝位に登つてから、殊にその野心を露骨にしめし、

イギリスに對して、すでに千八百四十四年に、トルコ分割を提唱したが、イギリスの反對に會つて、志を得なかつた。

千八百五十一年に至つて、フランスのルイ・ボナパルト（ナポレオン三世）がトルコを強制して、イエルサレム聖地地方に於けるローマ教徒に對する保護權を承認せしめたので、聖地の監督權と同地方のギリシヤ教徒の保護權を有するロシアは、クーチウク、カイナルジー條約を楯にとつて、トルコに抗議を申込むとともに、ローマ教徒の迫害をはじめたので、ここにロシア、トルコ、フランスの間に係争生じ、イギリスはストラットフォード卿を派して、この係争を仲裁せんとしたが、卿のいまだトルコに來らざるうちに、千八百五十三年勅令を發布して、トルコへメシニコフ公を特派して、トルコを威嚇しはじめた。そのために、トルコは十月十八日、ロシアは十一月一日それぞれ宣戰の詔を發した。オーストリアはさきにハンガリアが獨立の反抗をこころみたときに、ロシアの援助をうけた關係から、この戦争を防止しようとしたが果さず、イギリス、フランスはトルコと結んで、後にはサルジニアもその聯合軍に加はつて、ロシアと戦端をひらくに至つた。千八百五十四年三月二十七日のことである。これクリミア戰役である。この戦争は、セバストポール要塞の陥落をもつてロシアの大敗に終つた。千八百五十六年のパリ講和條約はその終末である。

マルクスは、この間もつねに貧乏に苦しめられてゐた。それに、五十三年には持病の肝臓炎に苦しめられてゐた。三月十日のエンゲルスへの手紙には、次のごとくかかれてゐた。

『五ポンド落手。僕は今週死に垂んとしてゐた。即ち肝臓炎に罹つてゐたのだ。乃至は少くともそれに罹るばかりになつてゐたのだ。これは僕の家の遺傳である。僕の父はこの病氣で斃れた。僕がイギリスに來てから四年このかた、病氣は再發せず姿を消したやうな有様であつたのだ。併し今ではもう危機は切抜けた。そして一番都合のよいことは醫者にかからなかつたことである。だがまだ少々疲勞してゐる。』

これと同じ手紙で、トリビューンのダナの機嫌をとるために、「東方問題」について、かゝなければならぬが、この問題は、軍事上、地理上の知識を必要とするから、エンゲルスの助力を必要とする旨を申し送つてゐる。これ、後で、アヴェリング及びリヤザノフによつて「東方問題」と名づけられて、まとめられた論文である。これに集められたものうち最初の二つは、手紙にあるやうにエンゲルスの手になつたものであるが、他の十三篇はマルクスの自らの手になつたものだ。マルクスの東方問題についての知識は、當時マルクスの家にあつたアーカートより得たものである。マルクスによれば、アーカートは、ケルト系のスコットランド人で、「三年のあひだト

ルコ人と共に放浪し歩いた後、トルコに入つてトルコ人に感激した」東方通である。

このクリミア戦争について、マルクスは、その後五十三年一月から、五十四年十一月にかけて多くの通信・論文を同紙に送つてゐる。すなはち「露土戦争」についての二十七篇、「ドナウ諸公國よりの撤兵」について十二篇、「クリミア遠征」三篇がそれである。これらのうちには、エングルスが筆になつたものも若干あるらしい。また、この外に、五十三年の六月から十月にかけて、イギリス資本主義のインド、支那への侵略を論じた「インド支那論」四篇もトリビュンに送られたマルクスの原稿である。

これらの論文を通じて看取されるマルクスのクリミア戦役批判の態度は、問題の事件がヨーロッパ革命の到来を助長するかどうかといふ點に批判の中心を置いた。だから、ロシアは無論攻撃するが、又他方ルイ・ボナパルト、パーマーストーンに對しても辛辣なる筆をふるひ、トルコの野蠻に對しても決して鋭鋒をゆるめなかつた。マルクスに取つての唯一の問題は、それが企圖する革命に對して如何なる關係にあるか、といふことであつた。

千八百五十三年から、五十五年、五十六、五十七年にかけて、マルクスは、トリビュンの外に、ビープルス・ペーパー、ノイエ・オーデル・ツァイトウング、フリー・プレツヌ等の諸紙に無数の論文を書いた。

かゝる多量の、そして、多方面の執筆は、病に苦しめられ、貧乏に追はれたマルクスにとつてかなり重荷であつたらしい。千八百五十三年にクルースにあてた次の手紙を見ると、それがよく判る。

『僕は何時でも數ヶ月孤獨に退いて僕の經濟學を仕上げたいと望んでゐる。だが僕にはそれが出来さうもない。僕は始終新聞の寄稿を書きなぐるので、ウンザリしてゐる。これがために僕は多くの時間を奪はれ、精力を費されるが、それは何にもならないのだ。いくら獨立であらうと欲しても——僕のやうに現金拂を受けてゐる場合には、特に新聞とその讀者に拘束されるのだ。純粹に科學的研究は全くこれと異つたものだ。』

エングルスは千八百五十三年春のある手紙の中で、「最も冷靜な立場からでも、現在の情勢が千八百五十四年の春以後まで續くことは不可能だ」といひ、恐慌が五十四年にきたることを豫想し、マルクスも亦五十三年秋のある手紙で、「千八百四十七年のやうな商業恐慌が春に始まると僕は考へる」と言つてゐる。しかし、この兩人の豫想は當らず、恐慌は、千八百五十七年になつて漸く來た。「以前のいづれの恐慌よりもはるかに重大に、またはるかに明白に文明世界のあらゆる國々に影響を與へた」未曾有の恐慌が起つた。

「一八四七年から一八五七年に至る十年間は、文明國の歴史の中に於いて最も注目し得る時代で恐らくあつたであらう。蓋しアメリカの發見及び喜望岬の迂迴は、全然、歐洲の商業に對する見解を變へてしまつたからである。眞實、如何なる地理的發見も、結局、其の重要さの點に於いて、十五世紀末及び十六世紀初に人類を驚倒せしめたるものとは全然比較にならない。またメキシコ征服やペルー征服と同様な記録せらるべき征服は他にありはしなかつた。然し乍ら鐵道の發展、蒸汽船の増大及びカリフォルニア州やオーストラリアやニュー・ジラランドの金の大發見は、新世界と舊世界とを結合せしむるに至つたと云ふ結果、並に古臭い化石した社會に刺戟を與へて異常なる努力に遣入らしめたと云ふ結果を實際に齎したのである。」(ハインドマン、上掲書、八木澤氏譯)

この未曾有の好景氣は、その終りに未曾有の恐慌をもたらしたのだ。

この恐慌は、その震源地をアメリカにもつた。アメリカは、千八百五十六年に於いて、未聞の好景氣が來り、西部地方の開發、工業、鑛業の發展、農業の豐作、貿易の發達、交通業の隆盛、その他あらゆる方面に盛花期をむかへた。輸出入、鐵道収入は二割乃至三割の増加、農産物、工業生産物は、十五年間に三倍し、その他の統計は、アメリカ資本家に天國を將來したことを示してゐる。だが、この好景氣は、五十七年七月より反動として開始された恐慌によつて痛く復讐された。反對に、あらゆる分野、商業、金融、工業にわたつて恐慌の「暴力的爆發」が開始された。農業も亦「皮肉にも合衆國未曾有の不作」に襲はれた。天國は地獄と變つた。

アメリカの恐慌は、間もなく海をこえてイギリスに飛火した。フランスに燃えうつつた。「すべてのヨーロッパ諸國に於いて、アメリカと同一の結果が起つた。共和國、立憲君主國、或は專制國、すべてがひとしく悩んだ」——千八百五十七年の未曾有の恐慌は、かくして、歐米の天地に荒れまわつた。

この恐慌は、マルクスの活動に、いかなる關聯をもつか。先づマルクス自身へ經濟的打撃をあたへた。千八百五十九年の手紙でいふ。

「この二年間は僕にとつて都合が悪かつた。といふのは、一方トリビュンが恐慌を機として僕の収入を半減した。好景氣の時代には一ペニヒの手當をもあたへはしなかつたのに。——他方、僕の經濟學に關する研究に必要であつた時間は、ロンドンやウィーンに於いて提供された非常の利益のある仕事を拒絶することを余儀なくしたのであるから。だが、僕は僕の目的を萬難を排して遂行しなければならぬ。そして僕を金儲け機械にすることをブルジョア社會に許してはならないのだ。」

恐慌によつて生活を脅かされた彼も、この恐慌——待ちかまへてゐた恐慌襲來を、よろこんで迎へた。動亂の社會的基礎たる恐慌は、彼が待望してゐたところのものだ。事實この恐慌は、とりあへず、ヨーロッパの動亂の一つを誘導した。イタリア問題を中心とするフランス、オーストリアの戦争がそれだ。

恐慌は、フランスをも襲ひ、そこでも暴威をたくましくし、企業の倒産するもの續出し、失業者も多数に上つた。小市民、労働者階級の反抗が漸やく盛ならんとした。ボナバルトは、イタリア統一といふ名目をかゝげてイタリアを助けてオーストリアと争ひ、もつて不平國民の注意を外に轉じて、反抗の氣をそらさせんとした。

千八百五十八年七月二十日、ブロンビエール温泉に、サルジニアの首相カヴールと會見して、サルジニア軍とともにオーストリアの支配を断ち切り、サルジニアをしてロンバルディア及びヴェチアを合併せしめるとともに、フランスはサヴォアとニツツアを併有する密約を結んだ。サルジニア・フランス聯合軍とオーストリアとの戦争は、千八百五十九年四月をもつて開始せられ、サルジニアの勢強く至る所オーストリア軍を敗退せしめたので、ボナバルトは反つてサルジニアの強大化を恐れて、ひそかにオーストリアとピラフランカ密約をなした。サルジニアはそれがため

に勇闘擡けて、五十九年十一月のチユリヒ條約をもつて戦争を終結せしめたが、六十年にいたつて、カヴールはさらにボナバルトと條約を結んで、チユリヒ條約を破棄し、サルジニアは中部イタリア、ローマニア、バルモ、モデナ、トスカナの諸小國を併合して、イタリア王國を建設し、その代りに、フランスは初めの密約通りに、ニツツアとサヴォアとを併合した。このイタリア事件を中心として、ボナバルトの政策は陰險巧妙を極めた。

この戦争について、エンゲルスは、千八百五十九年四月「ポーとライン」を書き、翌年春「サヴォア・ニツツア及びライン」を出版した。

エンゲルスは、これらの著書によつて、イタリアの統一、反動オーストリアの排撃、背後に專制國ロシアをもつフランス政策への反對を主張した。彼の立場は、あくまでプロレタリアートのそれであつた。マルクスもこのエンゲルスの主張をそのまま肯定した。彼は、その自傳の一節に於いて、次のごとく言つてゐる。

『イタリア戦争に關しては、これに對する小生の見解は、小生の友人フリードリツヒ・エンゲルスが、千八百五十九年ベルリン、エフ・ダウンケルより出版せる著名なる小冊子『ポーとライン』に於いて表明せる見解と全然一致するものであることは、なほ一言して置かなければなりません。この書の原稿は、ベルリンに發送されるに先立つて、エンゲルスから私に送附せら

れたのであります。小生等は、小生等が千八百四十八年新ライン新聞に於いて、あらゆるドイツ諸新聞雑誌中最も斷乎として言明せしがごとく、ハンガリア及びポーランドに味方せしと同様に、自由獨立のイタリーに味方するものである。がしかし、小生等はボナバルトが（ロシアと結托して）イタリーの自由もしくは何れか他の民族問題をば、ドイツをほろぼす口實となすことを欲しないのであります。』

このオーストリア・フランス戦役からんで、「フオークト事件」なるものが發生した。カール・フオークトは、千八百十七年にギーセンに生れ、千八百四十八年の革命に、運動に連座して四十九年スキスに亡命した。そこで、地質學、動物學、人類學等の自然科学の教授をしてゐた。彼は自然科学者として素朴なる自然史的唯物論を唱へてゐた。彼は自然科学者であると共に、社會運動にも興味を有し、ジュネーヴ在住中は、各國の亡命者の間に陰然たる勢力をもつてゐた。ボナバルトは、オーストリア・フランス戦争が起るや、あらゆる手段を講じてジャーナリストヤルンペン・インテリゲンチアを買収して、自己に有利なる宣傳をなさしめた。千九百四十八年の革命に参加して、ロンドンに渡つてゐたドイツの國家社會主義者のカール・プリントは、ある會合の席上で、カール・フオークトがボナバルトから金を貰つてボナバルトの宣傳をしてゐる事

を「カンカンに憤慨して」マルクスに語つた。マルクスはこの話を當時ロンドンで「フォルク」といふ新聞を出してゐたビスカンブに話した。ビスカンブはそれにもとづいて同紙に一つの論文を書き、さらにプリントの筆になるフオークト反對のビラ「警戒のために」をのせた。またプリントは「ロンドン・フリー・プレス」紙に「フオークトの名前と二三の枝葉の點は除いてあるが、フォルク誌のと大體同じやうな論文」を書いた。當時ロンドンにゐて「アウグスブルグ・アルゲマイネ・ツァイトウング」に、イギリスの通信を供給してゐたウイルヘルム・リーブクネヒトが、この風聞を同紙に通知した。フオークトは、ボナバルトの兄弟たるブロン・ブロン公爵（赤い公爵）と親交があり、彼を通じて、ボナバルトから金を貰つたのであると。

フオークトはアウグスブルグ・アルゲマイネ・ツァイトウングを相手として侮辱の訴訟を提起しその係争に勝つた。フオークトの事實を證明する文書上の證據が無つたのが理由で。

フオークトは更に、千八百六十年に「アウグスベルグ・アルゲマイネ・ツァイトウング」に対する私の訴訟」と題するパンフレットを發行し、その中に於いて、ロンドンにマルクスを首領に仰ぐシユウエーフルペンデ又はビュルステンハイメルなる團體があり、この團體は餓のごとき規律を有し、團員から金を徴集し、その金によつてマルクスは資澤な生活をしてゐると論じた。またその他、あることないことの捏造的な事實によつてマルクスを攻撃した。

ベルリンのナチオナル・ツァイトウングは、このフォークトのマルクス攻撃のパンフレットに基いて、社説三十七號、四十號で、マルクス攻撃をやつた。そこでマルクスは、この新聞を相手どつて訴訟を起したが、その訴訟は四回の豫備審のあとで、プロシヤ大審院によつて却下された。

そこでマルクスは、千八百六十年にフォークトに對する文筆による抗議「フォークト氏」を出版した。この書に於いて、マルクスは、フォークトの虚偽を摘抉し、辛辣、皮肉をもつて、フォークトの人物を罵倒し去つてゐるのみならず、すゝんで、フォークトの著書を通じてボナバルトとの關係、さらにフォークトを通じてボナバルトに買収されてゐるドイツの民主主義者に對して痛烈なる批判をこころみてゐる。

フォークトとの論争は、やがて、事實によつて、いづれが正しいかが判明する時機が來た。

「千八百七十年フランス帝國がセダンで崩壊するや、チュイレリー宮はその祕庫を開いた——丁度それはあはれなルイ十六世の死刑宣告の材料を提供した有名な鐵の文庫が七十八年前に開かれたと同じに——そしてそれから書類が飛び散り、それが全世界に我々の愛國者と職業的學者の花形の腐敗を知らしめた。——その中には五萬フランの領收書もあつた。この金はフォークトが千八百五十九年八月、すなはち彼が、非常な奉公をぬきんでたかの戦争の直後に受取つ

たものであつた。」(リープクネヒトのマルクス追憶記(小椋氏譯))

この領收書なるものは、ボナバルトの祕密基金支出表の一部であつて、そこには、次のごとく書されてゐた。

Vogt—il lui a été remis en Aout 1859,....Fr. 40,000

(フォークト——千八百五十九年八月彼に渡される……四萬フラン)

千八百六十年までに於けるマルクスの文章的活動については、以上大體のべたが、まだ二つの大物を逸してゐる。「ニュー・アメリカン・エンサイクロペディア」への寄稿と「經濟學批判」とである。

「ニュー・アメリカン・エンサイクロペディア」は、千八百六十年、ニューヨークで出版された百科全書である。五十七年前後の執筆にかゝる。エンゲルスは、主として、軍事方面の項目を担当し、他はマルクスが書いた。擔當した項目は四十項目前後である。この百科全書の出版者の一人は、ニューヨーク・トリビューンの支配人ダナである。

千八百五十七年のエンゲルスの手紙を見ると、この話は、ダナからマルクスに、マルクスから

エンゲルスに傳はつたらしい。「親愛なるモール（マルクスの事）、百科辭典との話は私は全く有難い。君にもそうだらう。されども角やつと缺損の補ひの見込みと、私には夕方やる規則的な仕事の見込が立つた。」とエンゲルスすら欣んでゐる。「純粹のカリフォルニアの金が飛び込んでくる間は、澤山の純粹の科學を我々は易々と供給する」とおどけてゐる。

報酬は、大版の一頁につき二磅だつた。トリビューンの収入の半減したマルクスにとつては、この仕事は、經濟上助かることが多かつたと想像する。

マルクスの勞作「經濟學批判」は、千八百五十九年の二月に、六冊のうちの第一分冊が出版された。ラツサールの骨折りで、ベルリンのドウンケル書店から出版した。

千八百九十五年には、マルクスは、この批判の序文を書き、そのなかで、ブルジョア經濟の組織を、資本、土地財産、賃労働、國家、外國貿易、世界市場の順で考察して行くつもりで、經濟學批判は、資本のうちで、商品、貨幣もしくは單純流通の二章だけを内容としてゐる。この批判は、貧乏と病苦との間に生まれた結晶である。後年出版された名著資本論は、この批判の續きと完成とである。千八百五十七年に書かれた、この批判序説は、有名な唯物史觀の公式を含んでゐる。

批判の出版にあつて、確定的の契約は、第一版の賣行如何によつて定まるといふ條件が附さ

れてゐる。それで、在米の友人ワイデマイエルは彼の爲に、賣行の良いやうに、アメリカで奔走した。彼の手紙によると、ニューヨークで八十五、シカゴで十、ミルウォーキーで六の豫約を採つたことが知られる。

百科全書と批判の外に、ロンドンの「フォルク」誌、ハンブルグの「レフォルム」等に二三の論文を寄稿した。また、フォークト事件に當つて、辯護士に渡した珍らしい「自傳」がある。

千八百六十年ごろまでの、マルクス一家の生活について、夫人は六十一年にワイデマイエル夫人に細々と、女性らしいタッチで記述してゐる。それによつて、その間の私生活を一瞥して見よう。

千八百五十六年には、夫人は三人の娘をつれて故郷トリエールに歸り、久しぶりに母に見えた。老いたる母は非常な喜びであつたが、間もなく病死した。夫人は母の遺産を弟と分配してロンドンに歸つた。そして、その遺産で、ハムステッド・ヒース近くの家に入つて、當分「王侯のやうな生活」をしてゐたが、五十七年の恐慌とともに収入が半減したので、再び借金と質屋通ひを餘儀なくされた。五十五年に全家族の痛悼のうちに若くして死んだ長男エドガーの後には、三人の娘、十七のイエニー、十五のラウラ、幼いエリーナーが残されたが、いづれも達者で、前二者は「花のやうな處女」となつて、學校でも首席を通した。「フォークト氏」は、夫人が書き寫して、出